処女性の問題

精神分析

★第6巻・第4號★昭和13年・5月★

—— 精神分析映畫『春の調べ』の一場面 ——

白鳥處女傳說の現代化・この水浴中に羽衣は
馬背の上にて運び去られた（アプフウブ欄參照）

東京精神分析學研究所出版部

合本單册『精神分析』（特輯題目及び定價）一覽表

東京精神分析學研究所
本郷區動坂町三二七・振替東京七八八一七番

第一巻・上

創刊號（昭和八年五月）「エディポス研究號」＊
第二號（同　六月）「フロイド喜壽祝祭劇記念號」
第三號（同　七月）「教育研究號」＊
第四號（同　八月）「夢の研究號」（第一）＊
（合本としては品切）

第一巻・下

第五號（同　九月）「兒童心理研究號（第一）」＊
第六號（同　十月）「社會思想・犯罪心理研究號」
第七號（同　十一月）「戰爭心理研究號」
第八號（同　十二月）「夢の研究號」（第二）
（合本としては品切）

第二巻・上

第一號（同九年一月）「心理療法研究號」
第二號（同　二月）「女性心理研究號」＊
第三號（同　三月）「傳説研究號」
第四號（同　四月）「文學研究號」
金二圓五十錢（送料共）

第二巻・下

第五號（同　五月）「ドストイフェスキー研究」
（六月休刊・以下隔月刊行）
第六號（同　七・八月）「戀愛心理研究號」
第七號（同　九・十月）「性慾心理研究號」＊
第八號（同　十一・十二月）「夫婦生活研究號」
金二圓五十錢（送料共）

第三巻

第一號（同十年一・二月）「兒童心理研究號」（第二）
第二號（同　三・四月）「宗教心理研究號」
第三號（同　五・六月）「自殺・情死心理研究號」
第四號（同　七・八月）「同性愛と異性愛」
第五號（同　九・十月）「家庭問題と親子關係」
第六號（同　十一・十二月）「常態及び變態の性心理」
金三圓（送料十五錢）

第四巻

第一號（同十一年一・二月）「性格改造研究號」
第二號（同　三・四月）「母性と妖婦研究號」
第三號（同　五・六月）「夢と幻覺研究號」
第四號（同　七・八月）「兒童分析と教育研究號」
第五號（同　九・十月）「愛慾葛藤の諸問題」
第六號（同　十一・十二月）「道德の分析」
金三圓（送料十五錢）

第五巻

第一號（同十二年一・二月）「思春期の研究」
第二號（同　三・四月）「不良少年少女の心理」
第三號（同　五・六月）「生理と心理」
第四號（同　七・八月）「男性と女性」
第五號（同　九・十月）「男女性格分析」
第六號（同　十一・十二月）「幼兒心理研究」
金三圓（送料十五錢）

＊「」は單册としては品切、その他は在庫す。單册代價送料共各五十錢

處女の問題・內容目次

『精神分析』第六巻・第四號

遭難を傳へらるゝフロイド博士とその愛犬
——ウイン自邸露臺にて——（卷頭言參照）

白鳥處女傳說の現代化、精神分析映画『春の調べ』の一場面（アブフウブ欄參照）

『精神分析』 第六巻 第四號 巻頭言

★フロイド博士の危難に際して

三月十九日の各紙はウヰン十七日發同盟のニウスとして、フロイド博士が反ナチ嫌疑の廉にて檢擧せられたことを報道してゐた。獨墺合邦以來或はこの事あらむを秘かに虞れてゐたが、憂ひは遂に現實となつた。我等遠隔の地にある異國異民族の超政治的一團の者等にとつて今更何を爲すことが出來よう。また何を云ふとも詮なきことである。たゞ我等はこの事實に依つて、人間がその善根のために惡果を摘むことのあるべきこと〻、ドイツ民族の實質的敗北とを確證し得たるを知るのみである。ドイツの學界と經濟界とは完全にユダヤ人のために制壓せられたゝめに、窮鼠却つてこゝに猫を噛むに至つたものであらう。學問の爭ひに政治力を用ふるは甚だ卑怯である。

江戸時代の友野與右衛門は蘆ノ湖の水を中駿一帶の荒野に導く大工事を完成し、それほどの犠牲的な公益事業も江戸幕府の不安の因となつたがために、鈴ケ森で打首となつた。(大槻著『新しき立身道』参照。)併し人生の目的は必ずしも凡俗なる幸福にあるのではない。ナルチスムスと超自我とエロスとを生かすところにその意義があるとフロイド博士は喝破してゐる。人類の至寶、學界の巨星、我等の恩人たる偉大なる博士は從容としてその運命を甘受し、八十二歳の老軀を囹圄の內に横たへてゐることであらう。ヒトラーはその著『わが闘爭』の中で日本人を極度に輕蔑し恐怖してゐると云ふではないか。我等は精神的敗北民族ドイツ人の
ことは警戒せねばならぬ。

處女性の問題に就いて（特別寄稿）

エドムント・ベルグラー

小序

東京の『精神分析』雜誌編輯部から、精神分析學に興味を持つ日本の讀者のために處女性の問題に就いて一論を草するやうにとの光榮ある依囑を、こゝに喜びを以てお受けする。

處女性の問題に就いての分析學的文獻を通觀すると、驚いた事には、フロイドの有名な論文『處女性のタブー』以來、別にこれと云ふ本質的な觀察が公刊せられてゐない事を知るのである。幾千人の婦人患者の分析に當つて處女性の問題は又しても話題に上つたに相違ないに拘らず、さうしてあらゆる國々の幾百の分析者がその觀察したところを纒めてゐるに拘らず、何等これと云ふやうな新しいことが觀察せられてゐないと云ふことは瞠目すべきことである。

と云ふのはつまり、フロイドの發見したところが又しても確證せられるに過ぎず、既にそこに云ふべきことが云ひ盡されてゐると云ふことに外ならないのである。實は、處女性タブーの原因の發見は正に一つの「暗中射撃」であつたのだ。正にフロイドのこの論文に於いて、我々は常々如何に諸々の問題の解決が――もしそれを精神分析學父祖級の大才を以て企てる時には――偉大にして同時に簡單なものであるかを、又しても驚嘆するのである。

またわが尊敬する同學大槻憲二氏の書翰を受取り、處女性に就いて執筆してくれとの高囑に接した時の私の主觀的印象は、まづ第一にからであつた。――「そこには何も云ふことは殘つてゐない。總て本質的なことは、實は既に一

九一四年にフロイドに依つて語られて了つてゐる」と。併しながら私は、貴誌編輯部が件の論文を主題に依つて一定の區分を與へるやうに要求してゐられるのだとも考へたからして、而も他方に私はフロイドの論旨を引用して同じやうなことを繰返す氣持には勿論ならないからして、自分の婦人患者に就いて處女性の心理に關する限りも一度探索して見るために、彼等を内的に調べて見ることに決心したのである。ところが私は二三の――あまり重大ならぬことかも知れないが――補説を加へることは可能であるとの結論に到達したのである。と云ふのは、フロイド自身並びにその學徒たちに依つて一九一四年以來爲されて來た種々の進歩は、處女性の問題に關してはこれを逸してゐるがために猶更さうであるのだ。

一、男根定着期に於ける處女性問題の心理的上部構造

まづ第一に云つておかねばならない事は、フロイドの大論文では男根期に關係づけてあることである。卽ち、處女の無意識に於いては、エディポス時代からペニス願望が動的に働いてゐて、そのために彼女等は處女膜の破却を二度目の去勢と感ずると云ふのである。この想像せられたる去勢は彼女等がその夫への無意識的な復讐反應を呼覺すことになる。そこで多くの民族に於いて初夜權の行使がその將來の夫たるべき男に委ねられずして、或る方面に於いては老婦人等に依つて道具を以て破瓜が行はれ、或る方面に於いては僧侶又は父代償等に依つて直接的に、行使せられたと云ふ事も成程と首肯せられるのである。かくすることに依つて夫たちはその妻君等の無意識的憎惡に對して無意識的に自己防衛をしたのである。多くの女が第一の結婚に於いてうまく行かなくても第二の結婚に於いてうまく行くと云ふことをフロイドは取擧げてゐるが、この事實も右の見解に依つて說明がつくのである。想像せられたる去勢の故の憎惡反應は、第一の男に依つて解消してゐるのである。更にそれを證明するものは處女性を喪失した女の夢である。それ等の夢に於いて、去勢願望が明白に夫に向けられてゐる。

フロイドの論旨をもつと精しく知りたい方々はその原文をお讀みになるがよろしい。が、幸にしてフロイドの日本

文翻譯者たる同學大槻憲二氏の大業に依つて、この部分は實は既に日本語に譯せられてある。日本譯第九卷中にそれは包含せられてゐる。

ところがさてこゝにまづ問題になるのは、無意識的に發動せられる處女たちの憎惡の危險あるに拘らず、この處女性なるものに特別の價値を置く男たちが存在するかと云ふことである。或はその價値が彼等の無意識動機となり得るかと云ふことである。女の無意識中に破瓜者に對する嗜虐的な調子の心理的結合が保有せられるやうになるからだとフロイドはその論文中で論じてゐるが、成程この役割を强調することは至當である。フロイドはそれに就いてから云つてゐる。「文明の程度がもつと高くなると、從屬の見込みがなくなることの危險（處女の攻擊慾）をあまり重要視しなくなるのである。女の方から進んで來ること、その他の諸動機の危險をあまり重要視しなくなるのである。」と。

ところでこゝに云ふ「その他の諸動機」とは如何なるものを云ふのであるか。

社會學的契機及び社會的契機が確にそこに地方的な交互的役割を果たし、種々の文化圈內に於いて種々の意義を持つたことであらうと思ふ。私は斷つておくが、私の論旨はたゞヨーロッパ及び北部アメリカの患者の資料にのみ關係があるのである。確に合理的な動機もそこに働いてゐる。例へば、子供がわが子であると云ふことを確めることも一つの役割を果してゐる。（「父親は常に不確かである」とのラテンの諺あり。）併しながらこれ等の合理的動機は非合理的動機に對して必ずしも決定的ではない。現に種々な合理的理由（妊娠や責任加重の不安、已むなく結婚しなければならない不安、金を捲上げられる不安など）の下に於いて、處女に對して何事をも仕ようとはせぬ一群の男子達がゐるからである。實際に於いて、これ等の男たちの無意識に於いては、非合理的なものに基礎を置いてゐる破瓜不安が潛在してゐるのである。不能症に關する拙著（ベルン、一九三七年發行）に於いて次の如き一節がある。——

破瓜時の不能。 ヒステリー型の性能力の特別の條件は、性對象が必ずしも處女たるを要しないと云ふことである。破瓜に對する男の恐怖には種々な無意識動機があり得る。

自己の攻擊慾に對する不安。 ワギナを突破つて肛門との間に通路を作るとの無意識空想を發見することがある。

罪惡感の解消。破瓜者にはそれだけの責任がある。

流血に對する神經症的畏怖。母に對する幼兒的加虐願望の抑壓せられてゐたものゝ復活。

以上總ては、フロイドが擧げてゐる女の復讐慾に對する不安とは別物である。卽ち女達が破瓜を第二の去勢として自尊心の傷害として考へ、そのために彼女等は男に對して復讐慾を持つのである。

これ等の男たちの述べるところには特徴がある。彼等はその愛人選擇に際して不思議に常に困ることがあるのである。彼等はその經驗に依り、處女に對しては自分等の不能であることを知つてゐるので、努めてこれを避けようとしてゐるに拘らず、常にそれに打つかるのである。それは勿論、彼等にとつて齒の立たない處女等をその對象として無意識的に求めてゐると云ふことなのである。（四六頁）

私はこのやうな型を、ヒステリー的性能力障害に於ける「特殊的諸條件」の條下に入れる。「特殊的諸條件」と私が云ふのは、一聯の「不可缺的諸條件」（“Conditiones sine quibus non”）のことであつて、これ等の諸條件は多くの神經症者がコイトスに際し、又は愛人選擇に際して持ち出すところであり、これ等は非常に固着的で拔きさしならぬものであつて、この條件さへ協へられてあるならばいつでも性能力はあるに拘らず、人格の行動の半徑が漸次狹められると、性能力の障害が云々せられるやうになる。

性對象として「絕對的」に處女でなければならないと云ふ人々を更に分析的に調べて見ると、また別の決定要素がそこに働いてゐることが分るのである。そこに三つの型が區別せられることを、私は發見する。

（一）比較の不安

この群の神經症者たちは、性的經驗ある女を恐れるあまり處女の許に逃げて來るのである。何となれば經驗ある女たちは以前の愛の對象と現在の自分とを比較することが出來るからである。これ等の神經症者たちは自分の弱力を、時に能力あり時に無力になることを承知してゐるが故に、無經驗な處女を選擇することに依つてこの不確實さを蔽はんとするのである。

（二）　無意識的同性愛への防禦

この群の神經症者はまた、强い無意識的な同性愛傾向から逃避しようとするものである。經驗ある一切の女たち（寡婦、出戻り女、「過去のある」娘）は、フロイドが始めて指摘した型の女（「男への懸橋としての女」）として、この群の神經症者等にとつては誘惑の危險あるものである。處女は、この種の神經症者等にとつては、「お前は女を求めてゐるのではなく、實は男を求めてゐるのだ」との無意識的な良心の批難を最も美事に反撃するものである。で、この場合、處女愛は無意識的な防禦機制として利用せられてあるのだ。

（三）　兩親のコイトスの否認

サドガーはそのヘッベル研究（一九一二年）の中で、早期にフロイドが認識したところに附加して、次の點に人々の注意を促してゐる。卽ち、兩親のコイトスを否定して母を無垢の處女として高めるのが幼兒期空想の一つの歸結である、と。經驗に依つてこの空想が確證せられるのである。よしんば正にその反對の事が——醜怪にと、特に附加しておいてもよからう——屢々起らうとも……。人々も知る通り、母は娼婦にまで引下げられるが、それは內的不安を節する目的のためであつて、さう云ふ女と交渉を持つことならば、多くの男にとつてもそれほど禁斷せられることゝは思はれないのである。

×

處女性の問題が人々の思想感情の中に於いて如何に生々と明白に現れてゐるかは、先頃の二篇の文藝作品に於いて指示せられると思ふ。それはハンガリーの小說家ラョス・ヂラヒの『囚はれたる二人』、及び英國の作家アーサー・コールダー・マーシャルの『我等は昨日結婚した』の二篇であつて、これ等は共に、一九三七年ヴィンのゾルナイ出版社からドイツ語譯本として公刊せられてゐる。ヂラヒの小說に於いては、處女の心理狀態が次のやうに描寫せられてゐる。その娘は新婚の夜の後に戀愛を感じて結婚したのであつた。——

長く深い眠りの後に、ミーテは眼を開けた。部屋の中は旣に明るくなつてゐた。面喰つて彼女は天井を見上げ

た。さうして自分は家にゐるのだらうと信じた。が、眠氣が彼女の眼頭から去つた時に、彼女の視線の落ちた個所は妙に見知らぬところに思はれた。徐ろに、さうして機械的に、彼女は部屋の天井の一點から他の點へと眼を移した。而も部屋全體を眺め廻すことを敢てし得なかつた。「一體、私は何處に居るのだらう?」と彼女は不安に滿ちて自問した。彼女の視線は今や壁面に落ちた。そこには簞笥の上に、金縁の鏡が前に傾いて掛かつてゐた。その斜めになつた鏡面には、自分の寢臺が垂直に立つてゐるのが見えた。窓の前には、暗赤色の帷がゆるやかな襞をなして垂れ下がつてゐた。陰氣な空には雲脚が迅く、その空は驚くほど近いやうに思はれた。寢臺はいつもよりは高く、さうして狹い小さなこの部屋に於いて總ては恐ろしく他所々々しいものに思はれた。安樂椅子の背の形、戸棚の錠前の眞鍮の金具、自分の寢臺の傍の敷物の色合ひ、簞笥の上の硝子の水容れと水吸み、……總てが何もかも夢のやうで、全然見なれぬものゝやうであつた。やがて彼女は或る椅子の上に男の着物が掛けてあるのを氣付いた。椅子の背の上に氣をつけて掛けてある鼠色の服とチョッキとは一人の人間の胴のやうに見えた。彼女の傍の寢臺には見知らぬ男が眠つてゐた! 彼女のかッと見開いた眼には、彼女に襲ひかゝつたあらゆる事柄の記憶が錯綜して映つた。深い眠りのために彼女の思想の連鎖は斷切られてゐた。この狀態はたゞ二三瞬間續いたに過ぎなかつた。徐々に、彼女にとつてそれは新婚の夜であると云ふことが意識に上つて來た。彼女は自分が何處に居るかを、また自分の傍に寢てゐるのはペーターであることを既に承知してゐた。彼女はも一つの寢臺を見遣つた。そこに彼は顏をあちらに向け、頭を深く枕に埋めて、そこに橫たはつてゐた。彼の頭は枕の間から仄黑く際立つてゐた。彼の髮は鳶色の波となつて額の上に落ちかゝり、彼の頸筋は少年のそれのやうに可愛らしく見えた。彼女は痲醉したやうであつた。宵には黑い、甘い葡萄酒を飲んだのであつた。さうして今や彼女は頭の中に鈍い壓迫を感ずるのであつた。宛も、額の周りに鐵の輪をはめてゐるかのやうであつた。彼女は燒けるやうな渴きを覺えた。寢臺の上に起上つて手をコップの方にさし延べた。併し切るやうな苦痛が彼女を激しく貫いたので、彼女は水を呑むことを中止して、低い呻き聲と共にその唇を嚙んだ。「どうしたのだらう?」—忽ち渴きはやんでしまつた。枕の方に戻つて、彼女は不安に滿ちて自分を觀察し始めた。彼女の意識は徐々に明度を增して行き、その記憶は漸次に再び生々として來た。さうだ、やつと彼女は想ひ出した。彼等は食堂で晩餐をとつたのであつた。彼等の向ひ側には空色の服を着

た太つた淑女と額の廣い紳士とが席をとつてゐた。その紳士は笑ふとその大きな黄色い齒が見えた。……總ては混亂してゐた。それを彼女は想起しようと努めた。晩餐の後に、彼女はペーターの腕に支へられて階段を昇つて來た。彼女は足元が危なかつた。頭の中では甘い重い葡萄酒が泡立つてゐた。燕尾服を着た一人の紳士が口笛を吹きながら階段の上を彼等の方に向つて來た。そこで彼女はその曲をもつと大きな音で口笛を鳴らした。「靜かにしてゐ給へ……」とペーターはやさしく彼女に囁いた。階段途中の踊り場には炬火を持つた青銅像が立つてゐた。その像の腕の恰好を彼女はよく覺えてゐた。腕の筋肉の上に光線が當つてゐた。彼等の傍を通りぬけて行くエレベーターの音を判然と聽いた。併し、自分たちが何階を登りつゝあるかは、彼女にはもう分らなかつた。も一度、彼女は燕尾服を着て口笛を吹いてゐた紳士のことを考へて見た。が、彼の樣子がどんなであつたか、大男であつたか小男であつたか、肥つてゐたか瘦せてゐたか、彼女は知らなかつた。大して重要でない、細々した點はあり〳〵と記憶に殘つてゐたが、併し重要な事柄に就いては彼女は一向覺えてゐなかつた。彼女が實際に經驗したことか夢想したことか少しも確かでないことがあつた。それから廊下！　また彼等が階段を登りきつた時長い廊下を彼女は見た。その廊下は、無限に續いてゐた。あちこちの扉の前には靴が生物のやうに並んでゐて、それが見張番をしてゐるやうであつた。その前を通り過ぎると、その靴が吠えつきさうであつた。……彼女は立ちすくんで男の肩に頭をもたれ掛けたことを想ひ起す。「どうしてこんなに澤山お酒を飲ませたの？」「今に寢床へ運びこんであげるから、さうすれば何もかもよくなるよ。」「あなた、私を愛してゐる？」「勿論、愛してゐるさ。」彼女はペーターの頸の周りに抱きついた。「私をとても愛してゐる？」「とても愛してゐるさ。」それから彼女はやがて部屋の中に這入り、ペーターが扉を內側から閉めたことを彼女は覺えてゐる。部屋の中ではたゞ箪笥の上に、大きな傘を被つたランプが點つてゐるだけであつた。種々な彩取りに遮られた光線と深い煖い影とが家具の上に横たはつてゐた。彼女はまた自分が微笑したことを知つてゐる。併しそれは生氣のない微笑で、たゞ口邊が妙に引きつつたに過ぎなかつた。彼女はそれを何とも遁れることは出來なかつた。他人に何かを唇のあたりにくつ付けられたやうな風であつた。彼女は銘酊してゐた。寢臺の縁に腰かけ、頭をチャンと擡げてゐることが出來ず、兩脚をブラ〳〵させた。ペーターは彼女の前に跪き、靴の紐を解いてやつた。彼女はそれでも彼の聲を聽いた。「さア脚をお出し。これぢやない。

も一つの方。」彼女は着物を着たまゝ寢床の上に仰臥し、兩腕を搖り動かし、さうした舞踊のメロディーを口づさんだ。「さア、チャンと起きて……。今に下着のボタンを外してあげるからね！」「どうして私を愛してくれないの？」「愛してゐるさ、併し起き上らなくちや。」併し彼女は身動きもしなかつたので、ペーターは彼女をやさしく一方から他方に轉がし、遂に着物を脫がせてやつた。「あんた……私を見ちやうんでせう？」「なに、ちつとも……。僕は眼をつぶつてゐるから見えないよ。だから、さア、チャンと起きなさい！」

今や淡黃色の朝の光の中に昨夜の出來事を冷靜に追想すると、おゝ、總ては何と混亂し、無意味なことであらう！　その後何が起きたかに思ひを廻らした時、彼女は喫驚して寢床に起き上つた。彼女は斜になつた鏡面を仰ぎ、そこに髮を振亂し、蒼白い顏をしてゐる自分自身を見出した。彼女の薄い絹物の襯衣は肩から滑り落ち、紙のやうに皺くちやになつてゐた。彼女の肩のあたりには胡桃大の赤い斑點が出來てゐた。それは以前には知らないものであつたから、彼のために出來されたものであつた。さうして彼女が身の周りを見廻した時、夜中の體驗の痕跡をその引搔き立てたやうな寢床の上に認めた。敷布はすつかり片方に押寄られて古い暗紅色の布團が見えてゐた。さうしてあちこち引裂かれた布團からは馬の毛が嫌らしくはみ出してゐた。彼女の視線は鏡の額緣に落ちた。そこには空色の翼を持つた水蜻蛉が宛も金色の木の枝に止まつてゐるかのやうに留つてゐた。多分この蜻蛉は昨日既にこゝへ飛込み、一夜をこゝに閉込められてゐたのであらう。も一つの夜着の下からはペーターの脚が膝小僧まで露出し、それは何人にも屬せざる無生の肉體部分であるかの如く、そこに彼が橫はつてゐることを彼女は氣付いた。さうして總てをこの冷酷な、白々とした朝の光の中に眺めると、宛も輕蔑的に事物を指示するかのやうであつた。見よ、これが現實である！　彼女はどつかとまた枕の中に倒れ、さうしてシク〳〵と泣いた。陰氣な、押しつけるやうな頭痛がし、刺すやうな獨特な感じが全身にして、そのために彼女は自分に起きたことを殘酷な目に會つたと感じたのであつた。

何故、自分は今こゝにゐるのか？　見知らぬ國の見知らぬホテルに……。而も近くの寢床には見知らぬ男が眠つてゐる。見知らぬ男、さうだ、見知らぬ男だ。何となれば、この瞬間に於いてはペーターはその見知らなさに於いて正に憎惡に値するものと思はれたからである。一年前には會つたこともないし、世の中にゐると云ふことを知り

もしなかつたこの男、而もこの男が今や自分の上に所有權を發動させてゐる。一體この人間は誰なのか。彼女は苦痛のために心臓を引き締め、自分の處女性を奪つた男に對する女の原始本能を以て彼を憎んだ。「この人間は誰なのか？」と彼女はまた自問した。と、あらゆる血が彼女の心臓から消え失せるやうな感じがした。如何なる匿されたる缺陷が、如何なる精神上及び肉體上の缺點が、まだこれから彼に於いて現れることであらうか？　もしも毎日共通の生活を送つてそのため、彼女がお祭りの衣裳のやうに大切にし、それを愛だの、なさけだの、優しさだの、鄭重さだのと呼びならはして來たものが奪はれてしまふとしたら……？　如何なる邪惡な情熱が彼の心臓の中に匿されてゐて、それがやがて勃發しないと云へよう？　もし彼が實際には粗暴な、我慢のならない男で、或は堪え難いいやな習慣を持つてゐて、それをこれまで細心に隱してゐたのだとすれば、どうなるであらうか？　彼女がこれまで見聞した大抵の結婚がさま〴〵な形の不幸で破綻し、また彼女がこれまで讀んだ小説が人間の生活をすつかり粗暴なものとして描寫し、美しい衣裳や美しい言葉で匿してはゐるものゝ人間の魂は常にその粗笨さを露出させるものだと述べてゐるが、それは何處から來るのであらうか？　自分の傍にゐるこの男は何者であるか？　この男が自分の許に辿りつくまでに、何處をほつゝき歩いて來たことやら、どんな汚らはしいことを散々やつて來たことやら？　これからの毎日毎月毎年にどんな事が待受けてゐることやら？　子供を生むやうなことになれば、どんな思ひもよらぬ苦痛が自分の肉體を虐むことであらう？　どんなに痛ましい絶望が、どんな煩らはしさが、どんなに苦しい諦めが、自分の心臓をなほもくた〳〵にし、悲慘にすることであらう……？　それ等總てを知り、而も眼を開いてぢつと見てゐなければならないとは……！　人生とは既にさう云ふものであつた。而も自分の生活のみがその例外であると云ふ希望は殆どあり得ない。「どうして私には母さんがないのだらう？……」とて彼女の内に泣くものがあつた。忽ち彼女は、自分が甞てその母を知らないと云ふことが如何にも恐ろしいことに思はれて來た。心臓が苦痛と懷疑とに滿ち充ちてゐる時には、平常は最も深い底に眠つてゐることが眼醒めて來る。母親を持たないと云ふ思ひはたゞ彼女が最も苦しい時にのみミーテを苦めるのであつたが、その思ひが今や彼女の心臓を引裂くのであつた。

マーシャルの小説に於いては次のやうな狀勢が描かれてゐる。兩親の意志に反して戀愛結婚した若い二人が新婚の

夜の翌日に海邊にボートを泛べて遊び、大膽に沖合ひに漕ぎ出し、水游してゐる中に一本の橈を失くする。逆流のためにボートは片方の橈だけで、ジャブ〳〵やつてゐるのではなか〳〵その場から進まず、若い二人は一晝夜を海上に過ごし、遂に救はれるに至つた。この作品は新婚者の攻撃的な考へを頗る美事に描いてゐる。例へば、この小説の書き出しのところで、新郎は攻撃的な氣持からして損じたボートを借りるのであつた。そのわけはたゞ、そのボートの名が新婦の名と同じであつたからと云ふに過ぎないのであつた。――

澤山のボートはゴタ〳〵と叢がつて一本の鐵杭に繫いであつた。その內の一つに「エルザ」と云ふ名前のがあつた。「あれにしよう。」「いゝでせう。」と彼女は云つた。「併し隨分失禮しちやうわね。」その小舟は塗りも禿げてゐて可成り老んぼろであつた。

やがて新郎は何心なく沖の方へ漕ぎ出して行く。が、明かにそれは攻擊的な心持ちからである。妻は夫が水泳中にやり損ひのあつたことを攻擊的に喜び、彼の性器を襲擊することに依つて、復讐をするのであつた。

「水にお這入りなさい」と彼女は云つた。「私もついて這入るわ。」「ぢやア氣をつけてね。僕は先に船首のところから飛込むよ。」彼は匍匐上り、危く平均をとつてゐたが、均衡を失して腹からパシャッと落ちた。エルザは笑つた。その時、男は水面に浮び出て來たが頭髮が額に亂れかゝつてゐた。……ジョンは身を轉じて彼女の方へ泳いで來た。エルザはジョンが自分を引きづり込むのだらうと思つて、彼の方へ水をはねかけた。併し彼は水をはね返して、彼女の方へ戾つて來、その腕を捕へて自分に抱き寄せた。彼等は二人とも沈んだ。男の身體を自分の身體の傍に感じたので、彼女の防禦力はなくなつた。で、沈みさうな恐れがあつた。で、今や彼女は自由意志で沈んで行つた。男は彼女の肘を抱えた。彼女は眼を開いた。と、水を通して彼の眼が見えた。その眼は彼女を非人間的な緊張を以て見つめてゐた。その時彼女は想像した、彼が自分を寢床の中で捕へた時、暗の中で見きわめたかも知れないと。彼は別人であつた――浪籍者であつた。彼女は怖氣をふるつた。口からブク〳〵と空氣が迸り出た。彼女は腕を解き離さうと試みた。さうして思はずその膝頭を上の方に、彼の局部に向つて突き上げた。男は彼女を離した。水泡が彼から立上つた。彼の頭は兩脚の間に沈んで行つた。エルザは彼からツト離れて上の方へあがき泳いだ。肺臟は呼

吸困難のために息苦しかつた。彼女は清鮮な空中に出で喘いだ。ジョンは昇つては來なかつた。彼のせいだ。……やがて彼は浮き上つて來た。さうして力なく水を掻いた。彼は赤黒い顏色をしてゐた。側面の頸動脈は膨れてゐた。彼は頸を締められたかのやうに、水に締めつけられたかのやうに、息がつまつてゐた。彼は喉を鳴らし、咳き込み、唾を吐いた。口をパク〱させながら眞赤な顏をしてゐる彼を見るのは滑稽だと云ふ感じを克服することは出來なかつた。……

なほ物語の筋を辿つて行くと、失はれたる橈は象徴的な意義を帶びてゐることが判然と分るし、なほそれは妻が無意識意圖的に失つたものだと云ふことが明かになる。妻の攻擊慾の下部構造が口唇的サディズムにあることは、妻が激昂して夫に嚙付くところによく表はれてゐる。

「お願ひだから默つてゐてくれないか!」とジョンは云つた。「僕が君を一番必要とする時に、僕に逆うのは如何にも君らしいよ。」それに對してエルザは答へる。「お乳であやすやうにすることが、あなたには必要なのね。乳離れするまでまさかそれぢやないでせうね。」

彼は片方の手で妻の口を押へ、他方の手で彼女の項を抱えた。彼の指の爪が妻の肉に深く喰込んでゐた。さうして一切の身動きがならなかつた。エルザは顎骨を閉ぢて彼女を締めつけてゐる手の眞中に嚙付いた。「こん畜生!」と彼は叫んだ。さうして思はず手を唇のところに持つて行き、傷口を吸はうとした。血は浸んではゐなかつた。齒形はついてゐたが、血は流れてゐなかつた。エルザは夫に抱きつき、「御免なさいね、御免なさいね」と訴へた。數時間の後には、ジョンは自分が何かする度に妻が己れの父親の事を引合ひに出すので、詰つた。さうして馬鹿にするやうな調子でかう云つた。「どうして君はパパさんと結婚しなかつたのだい? 今からでは、もう遲いぢやないか。」そこでまた喧嘩が始まつた。――

彼女は高く跳上り、片方の手でハンカチを摑み、他方の手で男の頭を摑んだ。彼は舵頭の席の上に倒れた。舟は搖いだ。エルザは片方の舷の上につかまつた。ジョンは後頭を船底の板敷に打ちつけた。エルザは喫驚して手を休めた。ジョンは怪我をしたのかしら? 「こん畜生!」と彼は喘いで、エルザの腕を骨の上までムヅと摑んだ。エ

ルザは身もだえし、手を振離さうとし、もうそれ以上ロを利かせないために、ハンカチを男の口に押込んだ。ジョンはエルザを引倒し、すつかり自分の上に乘せるやうにした。エルザ倒れたまゝなるべく身體を重くして、ジョンが息の出來ないやうにしてやらうと思つた。ジョンはエルザの兩腕を左右ともに自分の身體に押しつけ、そのためにエルザは何とも防ぎがつかなくなつた。

ジョンの皮膚は、襯衣の襟が肩先に固く磨れて行つてゐるところでは、白くなつてゐた。眞白になつてゐた。エルザは首を前にやつて男の頸の筋肉に嚙付いた。出來るだけ強く嚙付いた。ジョンは悲鳴を揚げてエルザの手の關節をゆるめた。齒はしかと肉に喰込んでゐた。彼の身體は筋張し、顏は苦痛のために引きつつてゐた。彼は片腕を高く擧げて女を打ち据えようと骨折つた。女はやうやく嚙みついた齒を離した。頭を擧げ、筋肉の中の深い齒形に血が一杯たまつてゐるのを見入つた。彼女は舌で自分の唇をなめた。血腥い味ひが口中にひろがつた。男は彼女をヂツと見据えてゐた。女は刺すやうに見据えてゐる男の眼を、始めて見るかのやうに眺めてゐた。忽ち彼女は男の上に倒れ伏し、兩腕で男に抱きついた。「あなたと」彼女はむせび泣きつゝ嘆いた。「何てことしたんでせう。御免なさいね、御免なさいね……。」

二、性器前期的定着に於ける處女性問題の心理的上部構造

二度目に擧げた作家の描いてゐる神經症的婦人の反應の仕方——破瓜せられたる者の二度の嚙みつき——は自ら、性器前期的定着ある、或は心理的に退行してゐる婦人の處女性問題へと何の無理もなく移行して行くのである。大雜束に公式的な云ひ方をするならば、肛門性感的な婦人は無意識的にワギナと肛門とを同一化し、口唇的な婦人はワギナを口腔として考へる。このやうにして、性器前期的定着ある婦人が破瓜に對して反應する今一つの仕方は、ヒステリー婦人に於いて普通に見られるものとして我々は期待せざるを得なかつた。然るにその期待は事實に合した。たゞ我々はさう云ふ有樣が孤立してゐるものと考へるには及ばないのである。性器前期的定着あるものにも男根期の强き痕跡が認められるのである。

まづ臨床的實例を擧げることにする。——或る强迫神經症の婦人が自分の破瓜に就いて述べたところに依ると、彼女は驚駭のあまりに不安を抱き、それ以後は大便を抑止することが出來ず、一生垂れ流しになつてゐるに相違ないと云ふ風な精神的傷害を受けた。破瓜はワギナに於いて受けたのであつて肛門に於いて受けたのではないと云つて反駁して見せても、彼女は依然、分析の際に於いてさへ、これを拒否して、「何れにせよ一緒です」と云ふのであつた。これに依つて見ると、この婦人患者腸管出産觀（ワギナと肛門との同一視）に無意識的に固執してゐることが分る。破瓜に際して彼女がその夫から「そんなに××××××ないで」と要求せられた時、彼女は驚いて、「でもさうしなければ粗さうをして蒲團を穢すだらう」と思つた。破瓜に際して寢床の敷布が×××れた時、彼女は自分で手づからそれを洗濯した。こんな「不潔」（大便を意味す）なことをして人々から笑はれるだらうと思つたからである。

その婦人患者は結婚後半年にして洗濯强迫症（それは彼女の思春期以來持ち越して居た傾向であつた）のために處置を受けに來たのであつたが、結婚後の數ケ月、夫に對して激しい憤りと憎しみとを抱き、不斷にコイトスの要求を持出して彼を閉口させようと試みた。彼女は性器的なことには興味のないことを十分に意識してゐたが、「少くとも夫を悩ませなければならないから……」と云ふのであつた。弱い夫はやはりヒポコンドリー的な種々な病苦を始終喞つてゐたが、それの原因はコイトスのあまりに頻繁なるにあると彼自身考へてゐた。

この甚だ男性的な、惡意のある、極めて攻擊的な婦人は、破瓜又は月經と關聯して一つの興味ある症候を顯著に示した。彼女は月經を肛門から出るものゝ如く知覺し、それの殘りで夫に病毒を傳染させることがあるだらうと云ふ不安を持つてゐた。破瓜の流血に對して彼女は特別の不安を持つてゐた。これを彼女は特別に有害なものだと考へてゐた。彼女は自分の不安が馬鹿々々しいものだと云ふことを理窟の上では十分に分つてゐたに拘らず、而も本能感情的な根柢からして恐怖が又しても表面に出て來るのであつた。その無意識的願望はかうである。——私は夫を破瓜又は月經時の血に依つて傷害してやりたい……と。そこには更に次のやうな微妙な心理も存在してゐた。即ち、彼女がそんなに屢々コイトスを夫に求めたのは自分が夫を傷けてをらぬと云ふ確信を得たかつたからである。病毒感染の結果

は如何と云ふに、それはつまりペニスが腐つて脱落すると云ふ風に考へてゐたのである。婦人患者がそこに防禦の中に防禦せられたるもの（攻撃慾）を自ら秘かに包含せしめてゐることは、正に定石通りである。頻繁なるコイトスに依つて彼女は夫を困らせ、本質的な「休養」を求めてゐた彼にそれを許さなかつたのである。遂には、血に依つて傷害すると云ふ考への中に、夫と並んで患者自身が傷害せられると云ふ逆の想像が確に認められるやうになつた。

次に、吾々は口唇的な場合に移つて行く。男根期の殘痕が明かに見られない限りは、これ等の婦人は如何にも無頓着に破瓜と云ふことに對するもので、それは驚くばかりである。二三の實例を擧げるならば、口唇段階に退行してゐる或る婦人患者は「處女性の馬鹿げた重荷」（と云ふ言葉を彼女は用ゐたのだが）を背負ふに堪えずと或日決心をなし、從姉妹の紹介した赤の他人の男に破瓜せしめた。この「面白くもない行動」からして別にこれと云ふやうな心理上の痕跡は殘らなかつた。今一人の婦人は重い口唇性格的な神經症者で、且つ健康な道德心を持たないのがその特徴であつたが、彼女は十九歳の處女であつた。時々街上で、男から娼婦と見られ、ホテルに連れ込まれて金を支拂つた上でコイチーレンされた。彼女がその破瓜者に事の眞相を告げた時に、彼は腹の底から哄笑した。今一人の第三の婦人患者は、處女には興味がないと嘗て云つてゐた或る若い男に「惚込ん」だ。その後、彼女は自分よりも社會的地位の遙かに低い男に打込んだ。破瓜は彼女には「どうでもよい」事であつたのだ。結局、彼女はヒステリー發作を持つやうになつた。

これ等口唇性格者たちが性器の事に關して何故にこのやうに甚だしく無頓着であるかと云ふに、それは彼女等が無意識心理内に於いてワギナをワギナとして知覺して居らず、心理上これに口唇としての意義を固執してゐるからである。これ等の婦人患者たちの神經症的不安からして、それを確立することが出來る。最後に擧げた婦人患者はコイトスの後にいつもその相手たる男友等に向ひ、ワギナで怪我はなかつたかと尋ねるのを常としてゐた。これを分析して見て、彼女が母の乳房を吸ひ母に授乳せられてゐた時代からの自分自身の攻撃慾に對して防禦心理を持つてゐたことが分つたのである。彼女は自分の口で乳房を嚙まうと欲したが故に、ワギナ（＝口）がペニス（＝乳房）を傷けるで

あらうと考へたのである。*（メラニエ・クライン。）我等はこゝに於いて、性器に於けるコイトス事情と口唇に於ける哺乳時代とが同一視せられてゐるのを見るのである。

註* わが國の大話（昔から民話中にある大人向きのいさゝか下品な――と云ふ事は科學的意義には關係がない――話）の内に、結婚の夜夫妻とも相手の局所に瓜があり歯が生えてゐると信じて、互に恐怖し合ふと云ふのがある。かゝる民話の成立の民俗心理學的根據はやはり右のやうな無意識的なワギナ口唇同一視と攻撃慾とに歸せねばなるまい。（譯者）

口唇段階に定着ある婦人に於いて亢奮の中心をなすのはやはり、ワギナでもなければクリトリスでもなく、尿道口である。多くの場合に於いて諸々の關係が如何に錯綜してゐるかは、それ等の婦人患者の一人を擧げてそのコイトスの様子を記述して見れば分る。彼女は絶對的に冷感症的で、大抵の場合背後で交り、ペニスに對しては全く無感覺であつて、コイトスの中途×××××を達しに行くことが屢々だと云ふわけである。オルガスムスに達することはあるが、それはたゞ尿道口を××したり、××を押付けたりすることに依つてゞある。これを分析して見ると、ペニスに對して無感覺なのは一方に於いては、ワギナ＝口、及びペニス＝乳房の同一視に於ける攻撃的衝動の防禦であり、他方に於いて、コイトスの間に屢々尿意を催すと云ふことは自己支配（自給自足）の一つの標徴である。即ち、私は母の乳房を必要としない、私自身にも尿道や膀胱があるから乳房のあるやうなものだ、つまり私は母親がお乳をくれなくても一人で結構間に合つてゐる、と。（乳＝尿。）

×

そこで吾人は、心理の世界が處女性の問題に就いても、男根期に於いて終るものではないと云ふことを知る。退行の段階が深ければ深いほど、心理的關係は錯雜を極めてゐる。それに就いては、婦人に關しても、この心理層の闡明は今日に於いてはなほ未だ十分に完成せられてはゐず、謎の解明を待つものがなほ多々ある。心理現象は無限に複雜微妙なものであるから、今後幾代の分析者にとつても十分に活動の餘地や可能性のあるものであることが保證せられるのである。（完）

――大 槻 憲 二 譯――

羽衣型傳說に於ける處女性問題

高水力太郎

一、小序

凡そ種々の型の傳說の中で、羽衣型傳說、又は所謂白鳥處女傳說ほど完全に全世界に傳布してゐるものは少いやうである。勿論、桃太郎型傳說や浦島型傳說も世界的に流布してはゐるが、この羽衣型のは何處の國のもあまり形式が崩れてゐない。で、世界各國の羽衣型傳說を比較研究して、この傳說が我々人間の心理にどう云ふ關係があるかを研究して見たい。が、傳說學者たちがその傳說分類に於いてこの型のを白鳥處女傳說と名付けてゐるところを見ると、これは處女又は處女性に關係のある傳說であると云ふことは、彼等も直觀的に洞察してゐるらしく思はれる。我等分析學徒も、そこに處女心理又は男性の對處女心理が現れてゐると見るのがその結論とならざるを得ないのであるが、この結論の內容及びそれへの過程を次に一通り辿つて見ることにする。

羽衣傳說（白鳥處女傳說）に就いては既に先學の研究結果が文献として山積せられてをり、殊に中田千畝氏の『浦島と羽衣』（大正十五年、坂本書店發行）はこの傳說を組織的に研究したものとして意義があり、內には文献の紹介も試みられてゐる。また本誌上ではかつて倉橋久雄氏が『死の傳說としての羽衣傳說』（第三卷第三號）の題下にその方面からの研究を發表してゐる。

二、羽衣傳說の共通形式

さて、我國の羽衣型傳說と云ふと、誰でもまづ謠曲『羽衣』を聯想するであらう。富士山麓の三保の松原に天女が下りて來て、その飛行機代用の大事の羽衣を松の木に引かけてどこかへ行つてゐる留守中に漁夫の白龍と云ふのがそれを拾ひ、美しく珍しい着物だから家へ持つ

て歸つて家寶にしておかうと一人言を云つてをるところへ、天女が再び現れて、それを返してくれと云ふ。漁夫はそれを返さぬと云ふ。そこで天女は悲み「羽衣なくては飛行の道もたえ、天上にかへらんことも叶ふまじ、さりとては返したび給へ」と哀願するので、白龍も氣の毒になり、羽衣を返すと、そのお禮に「霓裳羽衣の曲」と云ふ、昔のレビウダンスのサービスよろしくあつて、再び昇天して行くと云ふ筋である。

この謠曲は室町時代の作ださうで、文學としては餘程洗練せられてをり、文辭も優雅で如何にも品位の高いものであるが、傳說の原型から見ると甚だ崩れてゐる。恐らくは支那傳說から飜案したものらしく思はれるところは漁夫の名の「白龍」などゝ云ふのにもその名殘の一端を示してゐるやうに思はれる。日本の羽衣傳說として殘つてゐる最も古い文獻は、『帝王編年紀』『丹後風土記』その他に存するものであるが、それ等は各々多少づゝ違つてはゐるが、共通的な點を拾ひ大體の筋を組めば次の如くである。ところどころに『羽衣』の筋との相違點に就いての筆者自身の註釋を挿入しておく。

「ある時、天女が數人、水浴をしてゐた。（既にこゝで謠曲『羽衣』と違つてゐる。こゝでは數人とあるが、謠曲では一人である。それからこゝでは水浴をしてゐるが、謠曲の方では羽衣を脫いでゐたゞけで、別に水浴をしたとは斷つてない。眞晝間に海水着も着けないで水浴をしたりすることは天女らしからぬ不行儀であると云ふわけかも知れない。それだけ分析的に批評すれば抑壓的になつてゐるわけである。）一人の漁士がこれを發見してひそかに忍び寄り、その一天女の羽衣を盜んでかくしてしまつた。（こゝでも漁士のお行儀は、謠曲の場合よりは惡い。謠曲の方では、天女の羽衣をたゞ偶然拾ふのであるが、こちらでは故意に盜むのである。）他の天女たちは人の近付いたのを知つてそれぞれ自分の羽衣をつけて天に昇つてしまつたが、羽衣を盜まれた一天女は昇天することが出來なくて、困つてしまふ。漁士はその天女を自分の家に招き入れて妻にした。（天人と結婚するなどゝは甚だ大それたことで、謠曲の漁士はそんな野心を起さなかつたやうである。）が、それから二人の間には子供が生れるが、數年の後に漁士の外出中に羽衣を見つけ出して再び昇天して了ふ。あとで漁士は孤獨に惱む。」

大體、右に述べたやうな形で羽衣（白鳥處女）傳說は世界中に流布してゐるのであるが、倂し細々した點ではみなそれぞれに多少づゝ違つてゐる。で、それ等が如何に違つてゐるかを、箇條書きにして比較研究して見たいと思ふ。が、その前に、念のために『帝王編年紀』養老

七年の條下にあるものを次に紹介しておきたい。

「古老傳曰、近江國伊香郡與胡鄉伊香小江、在鄉南、天之八女倶爲白鳥、自天而降浴於江之南津、于時伊香刀美在於西山、遙見白鳥其形奇異、因疑若是神人乎、往見之、實是神人也、於是伊香刀美卽生感愛、不得還去、竊遣白犬、盜取天羽衣得隱弟衣、天上乃知其兄七人飛昇天、上其弟一人不得飛去、天路永塞、卽爲地民、天女浴浦、島今謂神浦是也、伊香刀美、與天女弟女共爲室家、居於此處、遂生男女男二女二、兄名意美志留、弟名那志等美、女名伊是理比咩、次名奈是理比賣、此伊香連之先祖是也、後母卽捜取夫羽衣着而昇天、伊香刀美獨守空床唫詠不斷」云々。

次に西洋傳說の典型的なものを擧げて見たいが、それは既に本誌第二卷第三號（傳說研究號）にキリアム・モリス『地上樂園』中の『月は東に日は西に』が紹介せられてあるから、こゝには略しておく。

三、羽衣型傳說の部分的相違點

このやうに世界中に流布してゐる羽衣傳說は、その大體の型はあまり甚だしく違つてゐないが、細部では多少づゝ異つてゐる。で、それ等の異つてゐる點を研究すべき段取となつた。それにはこの傳說を七つの要素に分けて考へて見るのが便利である。七つの要素とは、第一に、羽衣の持主の天女はどう云ふ女かと云ふこと。第二に、羽衣を手に入れた男は如何なる種類の男かと云ふこと。第三に、その事件の起きた場所はどう云ふ場所かと云ふこと。第四に、羽衣を手に入れたのは如何なる方法に依つてかと云ふこと。第五に、羽衣を奪はれた後に、二人の關係はどうなつたかと云ふこと。第六に、羽衣再發見の徑路如何。第七に、羽衣再發見により天女再昇天して後、男の方は如何なつたかと云ふこと。かう云ふ風に七つの要素に分けて考へて見ると、各傳說の相違點と類似點とが非常に判然とするのである。

（一）天女の性格、員數など。

天之八女、其形奇異、神人也。（帝王編年紀）
天女八人（丹後風土記、大神宮參詣記）
一人の仙女（河内國名所圖會）
神女自天降來（員數不詳、神社考）
天女一名（謠曲、室町時代）
天女の群（南洋、ニウヘブリデス）
三人の天女（朝鮮）
姑獲鳥、天人（支那「元中記」）
ペケレカムイ（善神）の美少女（アイヌ）
三羽の白鳥（ドイツ）一人の美女（同）

七羽の白鳥（スカンヂナビア）

(二) 男の性質、種類、職業など。

漁　夫（神社考）
不　詳（帝王編年紀）
老　夫　婦（丹後風土記）
獵　師（東海道名所記）
土地の少年（河内國名所圖會）
漁夫白龍（謠曲）
農　夫（古琉球）
農夫、奥間大親（本山桂川氏『南洋情趣』）
農夫タガロ（南洋ニウヘブリデス）
弓の名人、獵師（インドネシア）
木　樵（朝鮮）
豫州男子（支那）
オイナカムイ（アイヌ）
獵　師（ドイツ）貴　族（ドイツ）
農　夫（スカンヂナビヤ）

(三) 初會の場所

近江國伊香郡與胡鄕伊香小江（帝王編年紀）
其名云眞井、今既成沼（丹後風土記）
丹後國、川邊（大神宮參詣記）
三保松原、有度濱（神社考、謠曲）
池　畔（千葉町）
溪　水（河内國名所圖會）
井　戸（「古琉球」伊波普猷氏）
池　水（南洋ニウヘブリデス）
池（インドネシア）
金剛山上の池（朝鮮）
田　中（支那）
神　泉（アイヌ）
池（ドイツ）湖　畔（ドイツ）
畑（スカンヂナビヤ）

(四) 羽衣獲得の經緯

竊遣白犬盜取（帝王編年紀）
竊　取　藏（丹後風土記）
取かくす（大神宮參詣記）
偶然拾得（謠曲）
奪　ふ（古琉球）
奪ひて柱の下にかくす（南洋ニウヘブリデス）
奪ひ盜む（インドネシア）
奪ひ盜む（朝鮮）
匍匐往先得其毛皮取藏之（支那）
忍び寄つて匿す（アイヌ）
秘かに近付き盜む（ドイツ、スカンヂナビヤ）

女の髪飾を奪へば飛翔の術を失ふ　（ドイツ）

（五）羽衣盜みの結果

夫婦となり、子供四人　（帝王編年紀）
夫婦となる　（東海道名所、神社考、古琉球）
親子となる　（丹後風土記、大神宮參詣記）
羽衣返却、禮に霓裳羽衣の舞をなす　（謠曲）
羽衣を返し、お禮に天國に伴はれて結婚
（スカンヂナビヤ）
夫婦（南洋ニウヘブリデス、インドネシア、朝鮮、支那）
シンタと云ふ羅ものゝ舞衣にて昇天　（アイヌ）
夫婦となる（ドイツ）一度に七兒を擧ぐ　（ドイツ）

（六）羽衣再發見の經路

子守歌（その辭に曰く、「六つ股の藏に八つ股の內に稻束の下に粟束の內に」にて所在を知る　（古琉球）
夫の不在中にとり戻す　（東海道名所記）
淚のために土が掘れて羽衣が現れた　（南洋ニウヘブリデス）
偶然　（インドネシア）
夫が見せる　（朝鮮）
知衣在積稻下　（支「元中記」）
戶棚の鍵を忘れて外出した留守に　（ドイツ）
言及なし　（ドイツ）

始めの約束に基き男が天國から降下　（スカンヂナビヤ）

（七）天女再昇天後の二人の關係

天女昇天、男殘留　（帝王編年紀）
言及なし　（東海道名所記）
女昇天、男も昇天　（神社考）
婚後三年にて天女昇天　（河內國名所圖會）
十年間同棲、一男一女　（琉球）
女一男一女と共に昇天、男あとを追はんとして下界へ落さる　（南洋ニウヘブリデス）
女昇天、男と子供と殘留　（インドネシア）
男女兩兒を抱いて昇天、男は釣瓶にて昇天（朝鮮）
三女兒を衣を以て天に招く。男殘留　（支那「元中記」）
男も昇天　（アイヌ）
女昇天、男殘留　（ドイツ）

四、部分的相違點の心理的意義

以上の比較研究に就いて見ても分る通り、世界に流布してゐる同型傳說の形式があまり甚だしく類似してをることは、寧ろ不思議に思はれるほどであるが、さてこゝに節を更めて以上の諸項に就いての心理的意義、又は時間的、空間的の變化の次第に就いて多少の考察を試みて

見よう。

第一項の天女の性格、員數などに就いては、要するに高尙な女、純潔な女、卽ち處女と云ふ意味であると察せられる。天上の女であること、鳥と關係あること、その衣裳（羽衣）が白色なることは、必須の條件であるらしい。處女はそのタブーに依つて畏怖すべき敬愛すべき、併し克服慾を誘發するものなるが故に天上の者と想像せられ、天上の者なるが故に鳥と複合せられ、純潔なる者なるが故に、さうしてまた晴れたる天上には白雲悠遊するが故に、白色が聯想せられ、かくて白鳥が處女の象徵となるに至つたのではないかと假定せられる。今日でも西洋に於いては白鳥が、東洋に於いては白鶴が尊重すべき鳥とせられるのは、一つにはさう云ふ無意識傳統のなほ現代人の心理に根深く殘つてゐるためもあるであらう。謠曲の『羽衣』に於いてもその衣は羽製にあらざるも、その名に依つて僅にその前身の白鳥であつたことを暗示してゐる。天女の員數は或は八、或は三、或は初めから一人とせられてあるのは、聖數の傳統觀念に基いた決定ではないであらうか。何れにもせよ、この場合、甚だ重大な意味があるとは考へられない。

第二項の、男の性質、種類、職業などは、多くは漁夫又は獵師となり、時に木樵、農夫などゝなつてはゐるが、大抵少年者となつてゐるらしいのは、處女の相手としての年齡的自然さから來てゐるものであらうが、中には老夫婦、又は老翁などあつて、その白鳥の少女を己が養女とすると云ふ類のあるのは、性的要素への抑壓に基く轉位と解釋するのが自然であらう。『竹取物語』は羽衣傳說の一變化と見られるが、その翁夫婦は『丹後風土記』の老夫婦の類であらうと思はれる。職業が漁樵獵農の類であるのは、古代の原始的な生業狀態を暗示するものであると社會學的見地からは解釋し得るであらうが、心理學的には別に象徵的な意味に解し、「白き手の狩人」（Woman-hunter）を暗示すると見ることゝて必ずしも不可能ではなからう。現にわが古語にも「妹狩り」など云ふ言葉が存してゐる。

第三項の、初會の場所が殆ど總て水邊に限られてゐるのは、女主人公がその羽衣を脫がねばならないと云ふ條件を自然にするための考察であることは固より當然ながら、それのみならず、水邊そのものが處女の象徵となるために、特に高尙な優美なる地境の池泉に限られてゐるのであらう。もし男主人公が水邊に於いて天女を捕へることが非常に必要な條件でなかつたならば、天女は白鳥なるが故に、男はむしろ漁士よりも全部が獵夫とせられたに相違ないと思ふ。その方が鳥との關係は自然である

が、たゞその鳥は只の鳥にあらず、白鳥にして同時に水鳥なる點が重大な要素となつてゐる。つまり、場所はあさる場所であると共に、あさられる女の象徴ともなつてゐるわけであらう。

第四項の、羽衣獲得の方法に就いては殆ど全部が「奪ひ盗む」となつてゐる。偶然拾得と云ふのは謠曲だけである。奪ひ盗むばかりではなく、その後長く匿してゐるのである。そこに常識的見地からすれば悪い意志が、犯罪願望が豫想せられてあることは否定出來ない。それ故に謠曲『羽衣』の如き文明史的に洗練（抑壓）せられたものに於いては、この原始本能的な犯罪願望（心理學的には攻撃慾）が拒否せられたわけである。たゞこゝに面白いのは、『帝王編年紀』に於いて「窃遣白犬」白衣を盗ましめてゐることである。處女を奪ふにはやはりそれと同類の童貞を装ふことが必要だとの意であらうか？「女の頭飾を奪へば飛翔の術を失ふ」とドイツの白鳥傳説中に信仰せられてゐるところを見ても、髪＝羽の論理から髪飾も白衣（羽衣）も處女性の象徴として、これを奪ふことに依つて羽の自由（もつと高い境遇への適應の可能性と機會と）が失はれると云ふ意味であらう。日本の女の髪挿も處女の性の象徴た點では同じであらう。それ故に處女は今にも脱落しさうなピラ〳〵した髪挿を付けることに依つて男どもをハラ〳〵させるのは一種の誘惑の手であると解釋することも出來るかも知れない。

第五項の、羽衣盗みの結果では、夫婦になると云ふのが大多數である。親子になると云ふのと、返却したと云ふのとが各一二づゝあるが、何れも後年の抑壓（倫理化）を示すのであらうことは疑ふまでもないやうである。返却して而も天國にて夫婦になると云ふ妥協形式をとつたものにはスカンヂナビヤのものがある。ヰリアム・モリスの『月は東に日は西に』はこの材料に基いてゐる。返却してたゞ天人の舞ひをお禮に見せて貰つて滿足して引下ると云ふ紳士的な態度は漁夫としてはいさゝか不自然のやうであるが、倫理化としては徹底してゐる。併し心理學的には虚飾が目立つて面白くない。

第六項の、羽衣再發見の徑路は、『古琉球』の子守唄に依つて示唆せられてその所在を知ると云ふのが、形式としては最も戯曲的である。而もその羽衣は「六つ股の藏に、八つ股の内に」匿されてあると云ふのであるから「六つ股の藏」や「八つ股の内」はワギナの象徴であることは疑ふまでもない。子守唄に依つて知るのが戯曲的であるならば、涙で土が掘れて匿されてあつたのが出る（南洋）と云ふのは、甚だ抒情詩的である。その他、再發見徑路に就いての言及のないものもあるが、併し何れ

にもせよ、天女が奪はれたる羽衣に對して永く執念してをり、機會あらば奪還せんと待ち構へてゐると云ふことに變りはない。

第七項の、天女再昇天後の二人の關係は種々な形態をとつてゐるが、數から云つて最も多いのは、女が子供を連れて昇天して了ひ、あとに男だけが殘されると云ふ型のものである。さうしてこれが恐らく最も原始的な形態ではなからうかと思ふ。それ以外のものは、その後の倫理觀（抑壓）の發展に伴ひ、變形せしめられたものではなからうかと、私は考へてゐる。

五、分析的解釋

以上のやうに考へて見ると、この傳說が人間の一生を、殊に夫婦關係の始終を、象徵的に表現する民族の夢であると解して大過なきものゝ如くに私には思はれる。個人の夢に傳記的な夢と云ふのがあるやうに、民族の夢としての傳說に人類の一生を象徵する傳記的な傳說の存することは不思議ではないやうに思はれる。

羽衣（白鳥處女）傳說も一種の傳記的民族の夢として、夫婦間の心理的關係の始めから終りまでを彷彿するものであると解することが許されさうに思はれる。さう云へば、我等の身邊には、羽衣傳說型の夫婦關係を持つてゐる男女が相當に多いことを氣付くのではなからうか。例へば、男は初婚にせよ再婚にせよ、とにかく女は初婚である。卽ち、結婚した時には處女であつたのだ。その時、處女なる花嫁は男根期の定着ある限り、處女性を奪つた男に對して感謝を持つ場合もあるが、何れにもせよ、その裏面に於いては憎惡を持ち、長く復讐の機會を覘つてゐる。卽ち、いつかはその機會が到來すると、女は子供等を引きつれて夫の家をおん出てしまひ、別に一戶を構へて夫の束縛を脫却し、而も生活費は夫から出させ、自分の我儘と利己心とをカムフラーヂするために、彼女等は身邊を少しも飾らず、道具は破損してもいだり修繕したりしてとことんまで利用價値を發揮せしめる。自分はこのやうに節約してゐるのであるから、決して贅澤をしてゐるわけではない。夫に迷惑をかけてゐるやうに見えるが、これはやむを得ない（時には子供の病身が利用せられる、母親への定着が好都合な辭柄を提供する）事情のためであると辯解せられる。そしてそれはまた彼女等の良心の苛責へのなだめとしても實際に役立つてゐる。併し時にはストリンドベルクがその不朽の戯曲『父』に於いて描いてゐる妻のやうに、夫を狂氣に追込み、なほもあき足らずして、「子供の父親は母親のみよくこれを知る」と云ふ骨を棘すやうな言葉となつて

憎惡が迸出することもある。

このやうにして見れば、この傳說は決して單なる處女傳說ではなく、寧ろ廣汎複雜な夫婦關係、男女鬪爭の象徵的描寫であり、人間心理の深刻な洞察であり表現である。併し、さりとてこれを處女心理、殊にその處女性タブー（男根定着）の傳說と解し得べき面の非常に濃厚であることは疑へないのである。『竹取物語』との類似點に中心をおいて見る時は、死の傳說（併しそれとてもやはり處女の死の傳說）とも解し得べき餘地の十分に存することは、當然認められるにもせよ……。『竹取』や『雪姬』、『鷺姬』などとの比較硏究に就いては、何れ他日を期したい。（完）

夏目漱石の精神分析（その神經症）

—果して漱石は狂人なりや？—

北山隆

一、序説

前號に於て吾々は、漱石の文學を觀察し、之に種々の批評を加へた。しかも尙ほ彼の文學の或る部分は、その高き價値を失はなかつたのである。しかし、この文學に於る彼の盛名を聞くと同時に、多くの人々は彼が可なりの變人であつた事を、併せて思ひ起しはしないであらうか？　更に又、彼が狂人であつたといふ風說を、耳にせられた人々も少くないのではあるまいか？

或人は之を肯定し、又ある人は之を否定する。そもそも左樣に偉大なる人物が、狂人であつてよい物か？　よし狂人とあるならば、その形態は如何樣であつたか？

筆者は之等の問題を檢討せんと欲するものである。

併し、彼の肉體を診察するの可能性を永久に失つてゐる吾々は、たゞ彼の殘した多くの文字と、近親者の記憶とによつて研究を進めねばならない。そこに勿論、多少の冒險は豫想されねばならぬであらうが……。先づ、當時の漱石を診斷した醫家の言葉を聞かう。

「尼子四郞さんに診ていたゞきました……どうもたゞの神經衰弱ぢやないやうだと首をかしげていらつしやいます。（中略）尼子さんは約束通り吳さんに診せて下さいました……吳さんに伺ひますと、あゝいふ病氣は一生なほり切るといふことがないものだ、（中略）それは追跡狂といふ精神病の一種だらうと申して居られました」（夫人談）

この際（明治三十六年）も、又其後に於ても、神經症の治療は全く試みられてゐない。尤も夫人は

「毒が頭に上るからだ……と占者の忠告なので、每度食事の後に二度づゝ飲む藥に、毒掃丸を入れて、そつと吞ませました、目つかつて小つぴどく怒られました」

といふ療法を行つて居られるが……。

然らば、漱石自身は何う思つてゐたかと云ふと、彼が二十三歳にして書いた『木屑錄』には、「白眼甘斯與世疎狂愚亦懶買嘉譽爲譏對輩背時勢」と自ら狂愚と稱し、翌年子規への書簡には、「嗚呼、狂なる哉、狂なるかな、僕狂にくみせん」といひ、三十六年の書簡には

「山川ハ近キ將來ニ於テ氣狂ニナルト？ ドーダカ分ラナイ、普通ノ人ハ大概氣狂ダ、自分デ氣狂デナイト自信シテ居ル許リサ、何ノ事ハナイ、世ノ中ト云フ者ハ氣狂ノ共進會ト云フ樣ナ物サ、其中ノ大氣狂ヲ稱シテ英雄トカ豪傑トカ天才トカ……云フ迄ダラウ、御前サンダノ、吾輩ノ如キハ小氣狂ダカラ駄目サ」

とあり、三十九年の書簡には

「僕の行爲の三分二は皆、方便的な事で、他人から見れば氣違的である。それで澤山なのである。現在狀態がつゞけば氣違である。死んでから人が氣違ときめて仕舞つたつて、少しも恥とも何とも思はない。現在狀態が變化すれば此狂態をやめるかも知れぬ。さうしたら死んでから君子と云はれるかも知れん」

とあり、又夫人の談によれば

「書齋に入つてみますと半紙の上に『予の周圍のもの悉く皆狂人なり、それが爲、予も亦狂人の眞似をせざるべからず、故に周圍の狂人の全快をまつて、余の佯狂をやめるもおそからず』とありました」

の有様であるから、彼は青年時代から自分の狂氣を自覺してゐた事が知られる。それは世人が不道德であり、狂者であるから、之に對する正當防衛として、已むなく狂を装つてゐるのだ——と彼は主張する。彼は狂を以て寧ろ名譽なりとし、

「新聞位ひに何が出ても驚く事無之候、都下の新聞に一度に、漱石が氣狂になつたと出れば、小生は反つてうれしく覺え候」（三十九年書簡）

「現下の如き愚なる間違つたる世の中には、正しき人でありさへすれば必ず神經衰弱になる事と存候（中略）今の世に神經衰弱に罹らぬ奴は、金持の魯鈍ものか、無教育の無良心の徒か、たらずば二十世紀の輕薄に滿足するひやうろく玉に候。もし死ぬなら神經衰弱で死んだら名譽だらうと思ふ。時があつたら、神經衰弱論を草して天下の犬どもに、犬である事を自覺させてやりたいと思ふ」（同年書簡）

等といふ。しかし漱石とても、始めから神經症に安住した譯ではない。自己の意識では手に負へない心理に、困却もしてゐる。

「此程中から自分の惱の作用は、我ながら驚く位奇上

に妙を點じ、變傍に珍を添えてゐる。腦漿一勺の化學的變化は兎に角、意志の働いて行爲となる所、發して言辭と化する邊には、不思議にも中庸を失した點が多い。舌上に龍泉なく、液下に淸風を生ぜざるも、齒根に狂臭あり、筋頭に瘋味あるを奈何せん。愈大變だ」
（吾輩は猫である）

の如く、また熊本在職中、六高の龍南會雜誌に掲載せられた一文の如きは、良心の目を盗む夢の存在を論じて、無意識的願望に惱む神經症者の態度を盡し得てゐる。

「われ手を振り目を搖かして、而も其何の故にするかを知らず。因果の大法を蔑にし、自己の意志を離れ、卒然として起り、驀地に來るものを謂ふ。世俗之を名づけて狂氣と呼ぶ。狂氣と呼ぶ固より不可なし、されども（中略）己等又曾て狂氣せる事あるを自認せざるべからず。又何時にても狂氣し得る資格を有する動物なる事を承知せざるべからず（中略）蓋し人は夢を見るものなり。思ひも寄らぬ夢を見るものなり。覺めて後、冷汗背に洽く、茫然自失する事あるものなり。夢ならばと一笑に附し去るものは、一を知つて二を知らぬ物なり。夢は必しも夜中臥床の上にのみ見舞に來るものに非ず。靑天にも白日にも來り、大道の眞中にても來り、機微の際、匆然として吾人を愧死せしめて…

…而も人生の眞相は半ば此夢中にあつて隱約たるものなり（中略）人間の行爲は良心の制裁を受け、意志の主宰に從ふ。一擧一動皆責任あり……良心は不斷の主權者にあらず、四肢必ずしも吾意志の欲する所に從はず、一朝の變俄然として（中略）わが身心に秩序なく系統なく思慮なく分別なく、只一氣の盲動するに任ずるのみ。」

當時の人には不可解な迷文であつたらうが、吾々にとつては誠に有難い名文である。

さて、この神經症の原因として彼は、

「醉興に述作をするのだと云ふならば、云はせて置くが、近來の漱石は何か書かないと生きてゐる氣がしないのである。夫丈ではない。敎へる爲め、又は修養の爲め書物も讀まなければ、世間に對して面目がない。漱石は以上の事情によつて神經衰弱に陷つたのである。」（四十年朝日入社の辭）

と單に心身の過勞を以て說いてゐるが、靑年時代の神經症や、幼兒のヒステリー的現象（後述）を知つてゐる吾々は、之に滿足する事が出來ない。まして、漱石の奇行を眼前に見乍ら。譯が判らないと云つて之を放置する事は出來ない。

二、症狀―諸種の被害妄想

漱石は幼時から變人で通つてゐたが、それが神經症狀として著しく表はれ出したのは、彼が二十七歳の時、所謂初戀事件からである。これが爲に漱石は、遁世的な感情を以て松山へ都落し、更に熊本高校へ赴いた。熊本時代は稍平穩であつたが、三十三年から六年までの英國留學は之を再發せしめた。そして、歸朝後の二年間には最も甚しい症狀が現れた。三十八九年も一進一退の狀態で、四十年から四十四年までは、活動的な症狀は起らなかつたが、四十五年から大正二年の春まで、再び異常な症狀が現れた。爾後、その死に至るまで、之が全く消滅したといふ時がなかつた。

その症狀は吳博士の診斷通り、「追跡狂」であつた。もつと完全に云へば「被害妄想症」に一括する事が出來るやうである。

初戀事件については既に述べたが、彼が眼科醫に通つてゐる中、待合室で逢ふ一人の女に心を惱ませたに始まる。

「ところがその女(ひと)の母といふのが、藝者上りの性惡の見榮坊で――どうしてそれがわかつたのか、そのところは私にもわかりませんが――始終お寺の尼さんなどを廻者に使つて、一擧一動をさぐらせた上、娘をやるのはいいが、そんなに欲しい人なら頭を下げて貰ひに來るがいゝ、といふ風に言はせます。そこで夏目も、俺も男だ……と松山へ行く氣になつた……松山へ行つても、まだその母親が執念深く廻者をやつて、あとを追つかけさしたと、自分では信じてゐたやうです」（夫人談『漱石の思出』）

尙ほ漱石は死ぬ四五年前、九段の能樂堂で偶然、その女に再會した。之は『行人』の中にも出て來る。しかも漱石は、その女の方から自分の家へ緣談の申込があつたに拘らず、兄が一存で斷つてしまつたと信じ、血相を變へて憤慨した揚句、當時の下宿である、法藏院といふ尼寺に立籠つてしまつた。家人が行つても逢はない。

「尼さんに變つた樣子でもないかと……尋ねて見ると、夏目さんの部屋の方でも見てゐるのが見つからうものなら、近頃ひどく怖い目附で睨まれたりします、といふ話だつたと申します」（夫人談）

その上そこの尼さんの中に、初戀の女そつくりの人がゐて、その尼さんが風邪で寢た時、漱石が藥をやつたりした爲に、

「外の尼さん達がより／＼に夏目の方を指して、まだあの人のことを思つてるんだよ、と口さがなくほのめ

かしました」（夫人談）

之等によつて漱石の心理はいよ〳〵動搖し、無理やり、東京での職業を捨てゝ、松山中學へ逃避した。

尙ほ「尼」とか「出家」とかいふものが、漱石に異常なコムプレクスの對象となつてゐた事は、其後に於る種々の言動によつて推す事が出來る。彼が尼を極端に嫌ひ乍ら、その尼寺に可なり長い間、下宿してゐたのも怪しむべき事であらう。

前記の通り、其後漱石の神經症が再び激しい症狀を示したのは、二年半に亘る英國留學中であつた。彼の意識した所によれば、「留學費輕少にして衣食にさへ窮した事」「彼の容貌體格が甚しく英國人に劣り、英國人は彼を事每に輕蔑する事」、「研究の不進」、「ロンドンの憂鬱な天候」等の理由からして、彼は自稱神經衰弱に陷り、

「下宿の主婦姉妹が大變親切にしてくれる。しかし陰へ廻るとすぐ惡口を云ふ。それから何かといふと、直きに淚を流すが、それも空淚だ。まるで探偵のやうに人のことを斷えず監視して付けねらつてゐる。」

「頭の調子が少しづゝ變になる。あせり氣味になる。自信を失つて、人に接しない樣に閉じこもつてゐる。それでも世間が自分をいぢめる。英國人が自分を馬鹿にする。それで癇癪を爆發させる。」（夫人談）

といふ有樣であつて、當時の書簡には

「近頃は神經衰弱にて氣分勝れず、甚だ困り居候、然し大したる事は無之候へば御安心可被下候」（三十五年夫人へ）

とあるが、その行動はいよ〳〵常規を逸し、歸りの船賃まで書物に代へてしまひさうなので、ある人が先に船賃だけ拂つて置いてやつたと云ふ。

さて愈々歸朝して帝大・一高の講師となり、居を本鄕の駒込千駄木町にトしてからは、この症狀が殆ど極點に達した。先づ手始めとして歸朝後三四日目に、火鉢のふちに一錢銅貨が置いてあるのを見て、いきなり傍にゐた長女を擲つた。それは、ロンドンで或日、乞食に銅貨を一枚やつた所が、歸つて下宿の便所に入ると、これ見よがしに同じ銅貨が一枚、窓の所にのつてゐる。之は主婦(おかみ)が自分を監視し、馬鹿にした證據だ。その銅貨が又この火鉢にのつてゐる――といふのである。之に引續く症狀を、夫人の談に聞かう。

「六月の梅雨期頃から、ぐん〳〵頭が惡くなつて、夜中に無闇と癇癪を起して枕といはず手あたり次第の物を放り出します。子供が泣いたといつて怒り出しますし（中略）何が癪にさわるのか女中を追ひ出してしまひます。（中略）七月一日、里の父母の元へ歸りまし

た（やがて戻つたが）十月末三女の榮子が生れました。すると十一月に入つて、又ぞろ雲行が險しくなりました。（中略）私の伏せてゐる産室の屏風の後へ來て、『貴様はお産で寢てゐるのだから、相當日がたつたら歸れ』、『お前はこゝの家にゐるのがいやなのだが、おれをいら／＼させる爲に頑張つてゐるんだらう』といふ。又女中に『これを奥さんのとこへ持つて行つて、これで澤山小刀細工をなさいつて、さう云ひなさい』と錆ついた小刀を渡しました。」

「私が産褥にゐる間、安の定、夏目が父にあてゝ再三私を戻すから引取つてくれと申してやりました。」

「お金なんぞ一文もくれず、お小遣は元よりくれません、部屋の唐紙を開けるが早いか、煙草がないと莨盆をほりつける。時計が止つてゐるといつて、懷中時計をほりつける。」

「夜中に不意に起きて、雨戸をあけ、寒い庭へ飛出します。夜中に書齋で大騷をする。」

「隣の俥屋のおかみさん、向ひの下宿の書生が音讀するのを、自分の惡口と思ひ、學生が夏目のあとから學校へ行くと、あれは探偵だと思ふ。朝食前にきまつて、窓のしきゐの上に立つて『おい探偵君、今日は何時に學校へ行くかね』と大聲できく」

といつた有樣であつた。彼の憎惡は近親者から漸次姻戚に及び

「今後絶對に、お前の親や親戚とは交際しない事にする、と申しますから、それから一切の親類間の交際は、夏目は一切出ない事にしたのです」

となつた。其後、大正二年の大發作に於ても、略同樣の症狀が表れてゐる。以下夫人の談を混合して説明する。

「どうも女中が變だとか何とか云つて居りましたが、やがて女中に向つて、いきなり木に竹をついだ樣に『そんな事は云はないでくれ』とから申します、子供が笑つたりピアノを彈くと怒る。自分で難題と知りつゝ難題を吹きかける。見ぬ振をしてゐると、亭主が惡い事をしてゐると知り乍ら、默つてゐるとは何事だ。忠言をして人格をなほさせるのが、お前の本分ぢやないか、といふ。電話が邪魔だと受話器を外してしまう。女中が風邪でかすれ聲をしてゐると、『大きな聲を出せ、貴様はうそをついてゐる。細工をして怪しからん』と怒る」

「私が留守の間、子供を遊びに出してはいけない、と云つてゐたのが、長男が遊びに行つたので、一人を廊下から下へ突き落し、一人が門の外へ出た所を、人の見てゐる路上でポカ／＼擲つた。それで女中が怒つて

出て行つてしまう、筆子が女中の肩を持つと、筆子を目の讐(かたき)にして、今にも刄物沙汰でもし兼まじい形相です」

「頭が悪くなると、朝早く四時半か五時に起きて、自分で戸をあけ、それから『おきろ』と怒鳴るのです。かうなつて來ると、いつもの式で、又も別れ話です。しかし今お前に出て行けといつても行く家もないだらうから、別居をしろ、お前がいやなら、おれの方から出て行く、とかうです」

の如くである。なほ學生も又、彼を脅かす物の一つであつた。

「今日教室へ入ると黒板に、高いダブルカラーをつけて、頭をぐつとそらしたおれの顔が描いてあつたよ、仕方がないから、默つて消しておいたよ」（夫人談）

といふ程度の事實はともかくとして、

「前の通りで、どこかの中學生がボオル投をして、ボオルが庭の中へ入つた。逃げる中學生をつかまへて、家へどなりこむと引立てゝ行く。よく裏の郁文館中學の生徒が、ボオルを投げ込んだ事が根にあるのです」（夫人談）

三十八年十二月の書簡には、

「此學校の寄宿舍がそばにあつて、其生徒が夜に入ると、四隣の迷惑になる様に騒動する。此次は是でも生捕つてやりませう。仕舞には校長が何とか云つてくればいゝと思ふ」

三十六年六月の書簡には、

「近來南隣ノ八ツチャン、北隣ノ四郎チャン、背後ノ學校ノ生徒諸君、日課ヲ定メテ、色々ナ事ヲヤツテ居ルヨ、是モ一學期結了ト云フ譯サネ」

とある。之等は『吾輩は猫である』の中に滑稽と誇張を以て、克明に書綴られてゐる。所謂落雲館事件である。『坊つちゃん』、『野分』、等には、かうした學生への被害妄想が、強く表はれてゐる。坊つちゃんは、學生の爲に、團子や蕎麥の事まで曝き出される。

「二時間目の教場へ入ると、團子二皿七錢と書いてある。實際おれは二皿食つて七錢拂つた。どうも厄介な奴等だ。二時間目にも屹度何かあると思ふと、遊廓の團子旨い〳〵と書いてある」

『野分』の主人公は、

「道也が最後に望みを屬して居た生徒すらも、父兄の意見を聞いて、身の程を知らぬ馬鹿教師と云ひ出し」

遂に中學校を追はれるのである。

更に漱石は、大學で講義をしてゐると、犬が吠えて邪魔し、圖書館では館員が妨害をするといつて、その取締

を總長に上申してゐる。

　しかし彼が最も憎み且、怖れたものは、讀者も既に御承知の通り、第一に金持、次に權威者・貴族・博士・教授・學士等——全て彼より優位に立つ者であつた。彼等は常に、あらゆる手段を用ひて彼に危害を加へんとしてゐるのださうである。

「金さへあれば何でも我意の如くさと云ふ樣な、顏をして居る奴には、たてをついて困らしてやるがいゝ」（三十四年斷片）

「世は富豪を謳歌する。世は博士、學士迄をも謳歌する。然し公正な人格に逢うて、位置を無にし、もしくは其學力才藝を無にして人格其物を尊敬する事を解して居らん。（中略）天下一人の公正なる人格を失ふとき、天下一段光明を失ふ、公正な人格は百の華族、百の紳商、百の博士を以てするも償ひ難き程尊きものである」（野分）

「僕は實業家は學校時代から大嫌ひだ。金さへ取れゝば何でもする。昔で言へば素町人だからな」（吾輩は猫である、主人の言）

「貴方がたは正しく（個人の自由を）妨害し得る地位に將來立つ人が多いからです。貴方がたのうちには權力を用ひ得る人があり、又金力を用ひ得る人が澤山あるからです。（中略）又は三井とか岩崎とかいふ豪商が、私を嫌ふといふ丈の意味で、私の家の召使を買收して、事ごとに私に反抗させたならば是又何んなものでせう」（大正三年講演『私の個人主義』）

「富と勢と得意と滿足の跋扈する所は、東西球を極めて高柳君には敵地である」（野分）

　甚だしき一例として、彼が英文に祕して書いた呪言を見よ。

"I hate you, ladies and gentlemen, I hate you one and all; I heartily hate you to the end of my life and to the last of your race. ...... Very well then, have a dose of my hatred that will soon cool your hot brains or better, still it will burn you to death."

（三十九年斷片）

　彼は紳士淑女に一服盛つて、呪ひ殺してくれる、と云ふのである。更に同樣の言葉を求めるならば、三十七八年の斷片中に左の如きがある。

「小人に可愛がられるは君子の恥辱なり、小人に尊敬せらるゝは君子の恥辱なり、小人と交つて圓滿なるは君子の恥辱なり……小人を輕蔑するは君子の義務なり、天下に嬉しき事只一事あり、小人を輕蔑する事是なり、小人の尤も憂ふる所は其技倆の功果を生ぜざる

時にあり、小人をして日夜に奔走せしめ、日夜に勞苦せしめて、十年の功を徒勞に屬せしむるを以て、君子は一大愉快となす。是君子の小人に對する輕蔑を表する唯一の良法なり。小人十年二十年勞を一指頭に彈じ盡したる時、君子の眉は始めて愁を開く。破顏して始めて墓に入るを得べし」

如何に右の言を記する際の彼が動搖したかは、その中に、平假名と片假名の混合して用ひられてゐる點にも看取出來る。

彼の一生はたゞ復讐の爲に費された。彼の近親者、近隣者は全て金持の廻し者であり、探偵であるから、彼は之と抗戰し、暴行を働かなくてはならないと考へた。しかも吾々は、彼の言ふ「敵」なる物が金持にせよ紳士にせよ、實在するそれらとは餘程かけ離れて居る事に氣付く。それは餘り誇大視され、偉大になり過ぎてゐる。こゝに、彼の異常な心理による轉位の行はれてゐる事を想像するのは無理であらうか？　當時の彼の行爲を、彼は『道草』に於て自ら評してゐる。

「彼は子供が母に強請(せび)つて買つて貰つた草花の鉢などを、無意味に縁側から下へ蹴飛ばして見たりした。赤ちやけた素燒の鉢が彼の思ひ通りにがら／＼と破れるのさへ、彼には多少の滿足になつた。けれども……彼はすぐ一種の果敢(はか)ない氣分に打勝たれた。何も知らない我子の嬉しがつてゐる美しい慰みを無慈悲に破壞したのは、彼等の父であるといふ自覺が、猶更彼を悲しくした。彼は半自分の行爲を悔いた。然し其子供の前にわが非を自白する事は敢てし得なかつた。『己の責任ぢやない、畢竟こんな氣違ひじみた眞似を己にさせるものは誰だ、其奴が惡いんだ』彼の腹の底には何時でも斯ういふ辯解が潜んでゐた」

彼の云ふ「惡い其奴」の正體はそも／＼何物であつたらうか？

三、探偵への被害妄想

彼の被害妄想を形成するものとして、今一つ、最も重要な而して最も不可解な物は、彼が常に抱いた、探偵への極端なる憎惡と輕蔑である。之には既に多くの人が注目して居り、森田草平氏も「何故だかわからない」と不審がつて居られる。

漱石が探偵に對して吐いた强烈にして異常なる憎惡の言は、小說・書簡・講演及び斷片中、三十餘箇所に亘つて繰返され、讀む者をして苦笑せしめる。例へば、

「假面ト云フ名ノ下セナイマヅイ面ヲツケテ、得意ナノガアル、探偵ノツケテ居ル面ハ之デアル」（三十九年

斷片）

「諸君は探偵と云ふものを見て、齒（よはひ）するに足る人間とは思はんでせう。（中略）然しながら、探偵が探偵として職務にかゝつたら、只事實をあげると云ふより外に彼等の眼中には何もない……尤も下劣な意味に於て眞を探ると申しても差支ないでせう……職業をして居る内は、人間の資格はないものと斷念してやらなくては、普通の人間に對して不敬であります」（四十年講演『文藝の哲學的基礎』）

「凡そ世の中に何が賤しい家業だと云つて、探偵と高利貸程下度な職業はないと思つてゐる」（吾輩は猫である）

「世の中はしつこい、毒々しい。こせ〳〵した其上づう〳〵しい、いやな奴で埋つてゐる。（中略）五年も十年も人の臀に探偵をつけて人のひる屁を勘定して、それを人生だと思つてゐる」（草枕）

「不用意の際に人の胸中を釣るのが探偵だ、知らぬ間に口を滑らして人の心を讀むのが探偵だ（中略）おどし文句をいやに並べ立てゝ人の意志を強ふるのが探偵だ」（吾輩は猫である）

漱石が實際の生活に於て、探偵と何の關係もなかつたに拘らず、右の通り大人氣なき批評を敢てするのである。然らば探偵が彼に對して何をするかと云へば、（ロンドンにて自轉車練習中に）

「兩車の間に堂と落つ。折しも余を去る事二間許の所に退宿さうに立つてゐた巡査が、聲を揚げてアハ、アハ、アハと三度笑つた。其笑方、苦笑にあらず、冷笑にあらず、微笑にあらず、カンラカラ〳〵笑ひにあらず、全くの作り笑ひなり、人から頼まれてする依托笑ひなり、この依托笑をする爲に、巡査はシックスペンスを得たか」（自轉車日記）

によつて察せられる通り、探偵は何物かに頼まれて彼を追跡し脅迫し冷笑するのである。尚、ついでに附加して置くが、『吾輩は猫である』に、刑事が泥棒を同道して、被害者である主人の家に來た時、主人は泥棒を刑事と誤認して、之に平身低頭する話が出るが、之は實際に起つた事である。

さて、此處に甚だ不思議な事は、右の如き言にも拘らず、漱石その人が自ら、他を探偵する事に非常な興味を持ち、實際に之を行つてゐる事實である。

先づ文學に於て、彼が前期には社會の表面に表れた悪德を、獅子奮迅の勢を以て追究攻撃し、後期には、個人的な人間の悪德を執拗に曝露し剔抉した事――それが既に被害妄想の一症候と見なさるべき事――を讀者諸氏は

知つて居られる。而して漱石は『彼岸過迄』に於て、その主人公「敬太郎」をして全くの探偵的行動を爲さしめ、之がために長い〳〵細密な描寫を費してゐる。『吾輩は猫である』には、猫が

「人の許諾を經ずして（中略）人間の軒下に犬を忍ばして、其報道を得々として逢ふ人に吹聽する以上は、車夫、馬丁、無頼漢、ごろつき書生、産婆、妖婆、按摩、頓馬に至る迄を使用して、國家有用の材に煩を及ぼして顧みざる以上は――猫にも覺悟がある」

と怨敵、金田家へ忍び入つて、反對に探偵する箇所がある。更に又、四十一年の書簡には、

「僕、高等出齒龜となつて例の御孃さんのあとをつけた、歸つたら話す」

とある。之等によつて考察を進める時、吾々は漱石が探偵に關し甚だ相反併存的（アンビヴァレント）な態度を持し、一方には探偵を憎惡し、之に被害妄想を持つと同時に、他方には之に深い興味を持ち、自ら執拗な探偵を試みてゐる――と斷言せざるを得ない。之は一見甚しき矛盾であつて、小宮豊隆氏は左の如き説明を加へて居られる。

「漱石は『猫』のみならず、前期の作品の到る所で探偵といふ職業に對する無上の反感を示した。それが『彼岸過迄』に來て俄に敬太郎に探偵のやうな事をさせてゐるのは、一見漱石の自家撞着のやうでもあるが、然し事實は決して自家撞着ではない。（中略）敬太郎のした事は探偵には違ひないが、然しそれは不用意の間に人間の弱點を突いて、その人を罪に陥れようとするやうな意味での探偵ではなかつた。（中略）その上漱石は前期の作品ではあれほどの反感を示してゐる探偵に對して、後期の作品ではそれほどの反映を示してゐないのである。（中略）後期の漱石は、人間の心の奥深く潜んでゐる惡德を、爬羅剔抉して餘蘊なきまでにそれを人々に示さうとする。さうしてその際、漱石はともすると物の蔭に隱れて自分の鋭い眼を遁れようとする惡德を、鷹が餌物を追つかけるやうに、何所までも追つかけて自分の捕虜にしようとする。（中略）それは正に、罪ある者に對する探偵の神經と同樣に、鵜の眼鷹の眼の神經であつた。その角度から考へれば、漱石は罪ある者に對する探偵を少しも非難する理由を持つてゐないのである」（全集六卷）

之は少々苦しい辯解であらう。何故なら、「罪なき者への探偵」は惡德だが、「罪ある者への探偵」は推奬すべきである――と云つた所で「罪なき者」とは漱石自身の事であり「罪ある者」とは漱石を脅かすもの（更に詳しく云へば、漱石自身の中にあつて、彼を不安ならしめ

る一部の心理）の別稱に外ならぬ事を吾々は知つてゐるからである。のみならず、右の如き説明によつては、漱石の特に「探偵」といふものに向けられた異常な興味と憎惡との、共によつて來る根本的理由を解する事は不可能であらう。

さて、吾々自身の道を進めよう。吾々は既に彼の文學が、その被害妄想に負ふ事の多大なるを云つた。次に吾々は彼の初期に於る作品『趣味の遺傳』の一節よりして、彼の學問的追究心の源泉が奈邊より來るかを觀察しよう。

「（浩さんの墓へ詣でる若い女を）少し變だが追懸けて名前だけでも聞いて見樣か、夫も妙だ。いつその事默つて後を付けて、行く先を見屆け樣か、それでは丸で探偵だ。そんな下等な事はしたくない（中略）探偵程劣等な家業は又とあるまいと自分にも思ひ、人にも宣言して憚らなかつた自分が、純然たる探偵的態度を以て事物に對するに至つたのは、頗るあきれ返つた現象である。（中略、浩さんの母に浩さんと女の關係を訊きただす時）今迄は犬だか探偵だか餘程下等なものに零落した樣な感じで、夫が爲め腦中不愉快の度を大分高めてゐたが、此假定から出立すれば、正々堂々たる學問上の研究の領分に屬すべき事柄である。少しも疚ましい事はないと思返した」

即ち探偵はいけないが、之が研究に變ずるならば良い——逆に云へば、研究は探偵への興味の變形であり、昇華であり、漱石の言を借りれば「高等出齒龜」であると云ふ事になる。もとより吾々は、漱石の藝術及研究の心的源泉が悉く、探偵趣味から出てゐると主張するものではないが、その一部がこゝに歸因するといふ假定を建てる事は許されるであらう。

こゝに吾々は一つの論斷を揚げよう。即ち、漱石は善不善に拘らず、否、彼がさうした批判力を持つ遙か以前（幼時）に於て、特に强烈な探偵への興味、他を探偵せんとする慾望を持つたものである、と。——探偵趣味は即ち竊視慾であり、出齒龜慾である。分析學は之等が、幼兒の父母に對する、性的興味による觀察と慾望とに、密接なる關係ある事を吾々に敎へてゐる。而して漱石は確かに、之を高度に有したのである。

「父と母との間が何れ程圓滿であつたか僕には分らない。（中略）是程銳敏に父を觀察する能力を子供の時から持つてゐた僕が、母に對する注意に缺けてゐたのも不思議である」（彼岸過迄、須永の告白）

さて漱石は、何等かの理由によつて、人にも增して强烈な竊視慾を持つた。然らば之が後には、何の故に無上

の悪徳として排撃され、その一部は學的及び文學的追究として姿を變じなければならなかつたのか？　吾々は此處に、この幼兒的慾望に對する一つの阻害又は抑壓と呼ばるべき機制の存在したであらう事を想像せざるを得ない。分析學は之を說明してゐる。――幼兒が持つ多くの慾望には、少からざる愛慾的な物が含まれる。從つて之は謂はゞ不道德なものである。而して之は幼兒の成長と共に、道德の名に於て、卽ち幼兒に芽生える所の力強き良心（理想我）によつて抑壓せられ、そのある部分は轉換または變形を餘儀なくせられる――と。幸にして漱石は、右の機制を暗示するが如き言葉を殘してゐる。

「探偵なるものは人の目を忍んで、知らぬ間に己れの勝手な眞似をするものなり。故に探偵たるものは此意味に於て、自覺心が尤も強くならざるべからず（中略）思ふに自覺心の鋭きものは安心なし、此故に探偵を犬といふ。現今文明の弊は探偵ならざる人、泥棒ならざる人をして、探偵的泥棒的自覺心を生ぜしむるにあり」（三十八九年斷片）

「當世の探偵的傾向は、全く個人の自覺心の强過ぎるのが原因となつてゐる（中略）自己と他人との間に截然たる利害の鴻溝があると云ふ事を知り過ぎて居ると云ふ事だ」（吾輩は猫である）

「人が馬鹿にしやしないか、愚弄しやしないか、と思つて始終不安の態度でゐるものは、餘程な臆病ものか、又は僻みものである。然しある人は斯う云つた――己は臆病かも知れない。鷹揚でないかも知れない。然し正しいのだ。正しいものとして、正しくないものを打倒さうとするのだ。故なく他を損ふものを嫉むから、そんなものはどうしても打ち懲らさなければならない、といふ氣がむら〳〵と湧いて出て、この己を不安にするのである。己の落付のないのは、巡査や探偵が眼を皿の樣にして良民を害する惡者を捕へやうと、一生懸命に氣を遣つてゐるやうなものだ」（大正五年斷片）

漱石によれば、「他が自分を探偵する」のも、「自分が探偵の樣な振舞をしなければならない」のも、共に「自覺心の發達」と、「正しいか正しくないか、といふ批判心（理想我）」によつて起るのである。然らば「理想我の形成」以前には探偵心が存在しなかつたか、といふと左樣ではない。之はむしろ「良心よりの抑壓」によつて始めて愕然として、自己の探偵心の存在に氣付いた――と解すべきではなからうか。

吾々は暫く此の理論を進めてみよう。卽ち「幼時に於て強い竊視慾を有した漱石は、やがて強大なる良心の抑

壓を受けた」と。この際に於て、漱石の慾望は次の如き三様の態度を採つたであらう。

第一に、その探偵心は學問及文學への追究としての吐け口に轉換（昇華）し、第二にそれは、社會及び個人の惡徳への詮索と攻撃（特に彼が嘗て好んだ色慾的な事々に對して）へと變裝し、第三には探偵への憎惡と恐怖の態度に化したであらう。第一及第二の場合は既に之を述べた。第三の態度こそ、吾々の最も注目すべく、又最も理解に苦しむ所である。探偵への興味が、何の故に返つて憎惡にならねばならないのか？　理解を早める爲に、二三の卑近な例を採らう。

もし諸氏の御宅に於て幼兒が、他人の盜み喰に對して異常に憤慨するとか、或ひは「あんな事をしちやいけないのね」の如き言を執拗に繰り返すならば、諸氏は必ずや其の幼兒が、嘗て盜み喰ひに強い嗜好を持ち乍ら、最近に至つて叱責により、その慾望を抑壓せられたであらう事を分析者と共に推察せられはしまいか。また成人の場合にも、何某氏が現在は非常な節約家であり、他人の奢侈や浪費に對し、普通以上の非難を加へ乍ら、嘗ては同氏自らが非常な浪費家であつた――といふ話の樣な場合、諸氏はこの機制を成る程と首肯せられ、そこに何等か、抑壓に似た心機一轉の存在する事を考へられるであらう。

更に吾々は、ある男が自ら持つ・「妻以外の女への慾望」を抑壓し、却つて自分の妻が他の男と昵懇である事を空想し、之に甚しき憤怒を差向ける。――嫉妬妄想症の一機制――を參照して見よう。

右を要約するならば、「最も惡める者は、最も好める者である」といふ格言に到達する。而してこの場合、理想我（抑壓）といふ物が「愛憎反轉」の契機となり、挺子の原理に於る「枕」或ひは「支點」となつてゐる事が知られる。

之を漱石の場合に於て見るならば、彼の有した探偵慾は理想我よりの抑壓に堪えかねて（漱石の理想我が如何に強大であつたかは、之を證すべき充分の材料がある）、俄然として、探偵への憎惡に變じたであらう。彼が愛の對象に差向けた探偵慾（之は憎惡に非ずして愛である）は先方の拒絶の爲に、前述の嫉妬妄想症にも似た機制によつて、「先方が憎惡を以て自己を探偵する」といふ空想に變化したであらう。（卽ち彼の放つた對象愛は、抑壓によつて其の方向のみならず、性質をも變じた譯であつて、之の機制は、彼の初戀事件に於て最も明瞭に見る事が出來る。）

尙ほ一歩を追究すれば、漱石自身が探偵慾の前科者な

りと、他人に探知せられる事を極端に恐れたからであらう。

而して漱石が之に過大なる愛を要求し、又これに強烈なる竊視慾を差向け、後に至つて、前者は現實的に、後者は彼の理想我よりして拒絶し抑壓せられた所の對象——之卽ち彼を追ふ探偵の正體であるが——は何物であつたか？ 吾々は既に理論的に、それが兩親（後には多く理想我の形をとる）である事を云つた。吾々は更に之を確證せん爲、漱石の言により、甚だ興味ある例證を擧げよう。三十七八年の斷片に曰く

「我輩の向ふの家に、〇〇〇といふ書生の合宿所がある。此書生等は日常、我輩の疳癪を起して大聲を發するを謹聽するの榮を得る果報者である。時として先生の假聲（こわいろ）抔を使つて我輩を驚かしめる。其所に女の召使か何かゞ居て、此書生と二人、假色を使ふ。……書生、某教授の聲にて『……中々評判がいゝですよ』 女『セルマの歌でも出れば善う御座んすがね』 男『それに近頃、帝國文學へマクベスの幽靈と云ふのをかいた所が、大變評判がいゝです』 有難い仕合せである。ひそかに感謝の意を表して居ると、女『そうですか、そんなに皆様が仰つて下さるのにね——』 何だか我輩の母さん然とした事を云ふ。『どうしてあれで頭は中々いゝのですよ』と蔭ながら贔屓をして吳れる。但しあれでも丈は少々不平であつた。『まあ何んて強情な人でせうね』 母さんが云ふ。此邊より、さすが此女にも、息子の待遇を受ける我輩にも、何だか分らなくなつて來た。男『いつそ出したら善いでせう』 何を出す積りか知らん……かゝる母さんを得たる我輩は實に仕合せであると思つた。 男『時にいくつです』と云ふ。女『もう三十八でさあ』と嘲る如くに答へた。成程、我輩は三十八だ。此點に於て暗に御母さんの聰明なるに驚いた。」

この幻聽は、彼を探偵する者の正體が、一面に於ては『母』であり、彼が之に對し、如何に名譽と愛とを求めたものであるかを確證する。

次に吾々は探偵の正體が他方に於て、實に彼の父であつた所以を證せねばならぬ。幸にして吾々は、分析學によるに非ざれば、全く發見し能ざる所の例證を擧げ得るのである。

筆者は既に、『吾輩は猫である』に於て、主人が泥棒を刑事と間違へて、之に低頭した話のある事を記した。この刑事に對し、漱石は「吉田虎藏」の名を附してゐる。然るに彼は其後、『道草』に於て、彼があれ程迄に憎んだ養父の島田、惡父象徵としての島田が、金を強請せ

んが爲に彼の所へ遣はした三百代言的人物に對し、「吉田虎吉」の名を與へてゐる。この僅に一字のみ異る姓名を、漱石が刑事と惡父象徵の代理人とに與へた事實を、吾々は見逃してよいであらうか！

それは勿論、無意識的に爲されたに違ひない。何故なら兩者を執筆した時期は、實に約十年を隔てゝゐるからである。漱石は全く無意識的に、刑事と惡父とに對し、殆ど相同じき聯想——いはゞ病的な、一種のコムプレクス的な結び付き——を示してゐる。即ち漱石には、父と刑事とが心理上の同一系列に於て複合(コムプレクス)されてゐたのである。

右の如き姓名の類似や、聯想の合致は、或ひは之を些細な偶然の暗合と見る人もあらう。しかし乍ら、無意識的聯想が如何に輕視し難き力を持つ物であるかを知る吾々は、之によつて漱石に於る探偵の正體が、また一面に於て「父なるべき事を確信し得るのである。

畢竟するに、漱石に於る探偵は、彼の兩親——正しく云へば兩親の影——であつたのだ。而して吾々は、彼の被害妄想の悉くが、右と全く同樣の機制より生じたであらう事を、充分の確信を以て論斷する。それは、讀者諸氏も既に氣付かれた通り、漱石を追ふ所のもの、即ち「金持・權威者・貴族・紳士淑女・博士・教授」等は明白に父又は母の代償たるべき性質を具へてゐる事にも知られる。（學生、大衆と云つたものへの被害妄想には、兄弟(カイン)コムプレクスも關與してゐるらしいが）。

右の詳論に關しては、本論の項目第六を見られたい。

（未　完）

ナポレオンの精神分析（承前）

Der Wendepunkt im Leben Napoleons I —Ludwig Jekels.

延島英一

十五、英國に對する態度の變化

ナポレオンのパオリに對する否定的態度は、益々强さを加へ、決定的となつた。前に述べた手酷いパオリ彈劾行爲は、その明白な一つの證據である。

ナポレオンの歷史を極めれば極めるほど、殊にいまこゝで問題としてゐる部分を研究すればするほど、私はナポレオンとパオリの絶縁を償ひがたいものとしたのは、ナポレオンがパオリとイギリスとの關係を疑つたことにあるといふ確信をいだかざるを得ない。そして事實最近の研究によれば、當時パオリとイギリスとの關係は交互的に進行してゐたのである。

政府とはじめて衝突した頃は、パオリは實際確信的なフランス國民であつて、フランスを裏切り、イギリスに附く心は毫も持つてゐなかつた。その頃彼に對して反對者が放つたイギリスと通謀してゐるといふ批難は、全くたゞ誹謗にすぎない。パオリがイギリスに亡命してゐた事情や、彼がイギリスに對していだいてゐた好感などは、この誹謗に多少もつともらしい様子を與へたことは事實だが、しかし彼が當時イギリスと通謀してゐた事實は實際にはなかつたのである。

しかるにその後自分を不信視する政府の態度、反對派の自分を陷れんとする陰謀や密計、國民協議會（コンヴァンション）の早計な敵意表現などに接して激怒したパオリは、次第にイギリスと連絡をとらうといふ考へをいだくやうになり、遂に最後にはコルシカを實際にイギリスの手へ引渡すまでに進んだのである。

ナポレオンは、後にセント・ヘレナで自分でもいつてゐるやうに、當時このパオリはイギリスと通じてゐるといふ風評を信じたのである。だからパオリに對する反感

は、彼の内心で勢ひよく成長した。わづか一月を隔てゐ間に書かれた二つの彼の上訴文の間に明白な矛盾があるのは、この事情によるのである。

最初の上訴狀では、ナポレオンはまだパオリを疑惑視してゐない。すなはちその文章に疑問符が多いのは確信の缺けてゐるのを示し、その論調に內的疑惑と闘つてゐる調子が感ぜられるにせよ、とにかくナポレオンはパオリがイギリスと連絡してゐるといふ可能性を認めやうとしなかつたのである。

だがその後で、この疑惑は力を强められた。それには國民協議會側の妥協的態度にもかゝはらず、パオリがあくまで非協調的な態度を持したことが與つて力あるが、また他方その時旣にパオリとイギリスとの間に恐らく折衝が開始されてゐたらしいことも關係があらう。とにかくナポレオンにとつては、以前の疑惑はたちまち確實性を帶びるに至り、彼はそれを第二のパオリを彈劾した上訴文でかくすところなく表現したのである。彼のこの彈劾執筆には、ほかの動機がひそんでゐたことは旣に述べた通りである。

パオリの親英政策がナポレオンの運命の決定に重要な役割を演じたことは、次の事實を觀察すれば充分に證明される。ナポレオンがその靑年時代に、イギリスとイギリス人に對して非常な親愛の情をいだき、好感を有してゐたことは誰知らぬ者のないことである。そのために彼はアジャキオで、兄のジョゼフ、友達のマセリアと一緒に「イギリス贔負」といふ綽名を貰つたのである。シュケエはナポレオンのこのイギリス偏愛は、彼がルーソオ、レーナル、ボスウェル等を耽讀したことに根據があるとはじめ考へたが、更に硏究を進めた結果、その根據はパオリがイギリスで歡待されたことにあることを發見した。私はシュケエの發見は正しいと思ふ。ナポレオンは前にあげた「新しいコルシカ」と題する作品の中でも、イギリスに對する親愛の情を明瞭に表現してゐる。この作品では、イギリス人と認められた者は命を助けられるが、フランス人はすべて容赦なく殺害されるのである。

しかるにコルシカ逃亡後のナポレオンには、全く反對の方向への進化、徹底的な排英精神の發達が見られる。コストンによれば、一七九三年九月上旬には、彼は南佛地方で叛亂の討平に從つてゐた。だが裏切りのためにツーロンがイギリスの手に落ちたといふ報道を聞くと、彼は自分からパリへ赴き、ツーロン要塞攻圍軍の砲兵指揮官に任ぜられんことを願つたのである。コストンのこの記述が、近代の歷史家に看過されてゐるのは遺憾である。

彼等は前任者の死亡で缺員となつた砲兵指揮官の地位にナポレオンを推薦したのはサリチェティだと述べてゐるが、それは事實と反してゐるのである。

それから數年の後、彼はイギリス新聞の攻擊に酬ひて次のごとくいつてゐる。（一八〇三年十月十三日）

イギリス國民は、賢明な國民だといふ評判をヨーロッパで得てゐる。だが今日の諸君は、諸君の祖先と違ひ大いに墮落してゐる。今日諸君のいふことは、大陸ではたゞ輕蔑と憐憫の種となるに過ぎない。

また一八〇五年八月十五日のイギリス國民に與へる書翰では次のごとく述べてゐる。

諸君は大陸に同盟者があるなどゝ信じてはならぬ。諸君はあらゆる國々の敵であり、あらゆる國々はイギリスの蹂躪されるのに滿足してゐる。

この宣言の出た後數年間、彼がイギリスとイギリス人に對してどんな態度をとつたかは誰でも知つてゐる。この態度を彼は政治的論證で理由づけやうとしたが、かゝる理由づけを精神分析では「合理化」といふのである。

要するにイギリス人は、彼の最も嫌ひな者に變化したのである。彼は絶へずイギリス人の腐敗的影響を指摘（例へば執政官政府に宛てたイタリーからの手紙を見よ）し、レミュザ夫人のサロンから彼等を驅逐しやうとし、イギリス人を常に不俱戴天の敵と看做したのである。また彼は數年にわたつて大陸封鎖を行ひ、イギリス人に刄向はせやうとして、はヨーロッパ全體をイギリスとの通商に閉ざしトに至る港といふ港をすべてイギリスとの通商に閉ざしたのである。そしてエルバ島で配所の月を眺めてゐた時でも、彼はなほ次のごとく書いてゐる（「ヨーロッパ現狀論」）。

イギリス人については、次のごとくいふだけで十分だと私は思ふ。すなはち商業國民が人類の幸福のために一度でも働いたことを示す事實は歷史上に見られない。

そしてイギリスに對するこの憎惡は、このコルシカの孤星の軌道を定め、ワーテルローでその光芒を失ふやうに導いたのである。

これで見ると、ナポレオンのイギリスに對する態度には、少くとも本能感情的と見られる節があること、それがコムプレクスの力を有してゐたことは明かである。從つてパオリとナポレオンの軋轢に於て、パオリの對英態度が重大な役割を演じたのみならず、それに決定的な影響を與へ、遂に兩者の正面衝突を生み、ナポレオンをパオリの勁敵に變ぜしめるに力あつたといふ我々の斷定は正しいとせねばならぬのである。

ナポレオンがフランスに愛を感じはじめたのは、パオリに對して反動を起す數ケ月前でしかなかつた。だがこの反動は、ナポレオンへ無意識の幻想を考慮すれば、決して解決困難なことではないのである。けだしパオリが密かに劃策してゐたのは、かつてシャルル・ボナパルトが犯したのと同じ罪にほかならなかつたからである。ナポレオンはやつとそれに始末をつけたばかりだが、それには何んといふ犠牲を拂つたことであらうか！　しかるにいま優れた父親も、悪い父親、すなはちシャルル及國王と同じく、母親を外國人に引渡さうとしてゐるのである。國王はその罪をその頭で償つたばかりではないか！

いまや彼の心の中にあつた最も力强い親柱は倒潰した。ナポレオンは父親の不埒、不實な陰謀から母親を守るためにあらゆる努力を傾けたのである。だが彼はそれと同時に、一撃を以つていまゝでこの父に對して献げてゐた神殿を打倒した。國王の運命は、不實な父はいかに取り扱ふべきかをすでに彼に敎へた。そして彼は血に渴へてゐる國民協議會にパオリは叛逆罪を犯してゐると訴へ、パオリの頭を要求したのである。

パオリとの軋轢は、ナポレオンに於て父親に對する愛を決定的に、また全部的に崩壞させてしまつた。この軋轢がナポレオンの人格及世界の歴史に非常な意義を有する所以は、父親に對する愛の崩壞がそれに伴つてゐるからなのである。

後にタレーランがナポレオンが喜ぶだらうと思つて、わざ〳〵人をリヨンに派し、「リヨンの演說」の草稿を手に入れ、それを皇帝に献上したことがある。この時ナポレオンがタレーランにいつた言葉は、この軋轢がナポレオンの人格に破壞的な影響を及ぼしたことの否定できぬ證據となるものである。そしてそれはどれほどの倫理的美德を彼に失はせたであらうか！

皇帝はいきなり草稿をタレーランの手から奪つて火中に投じたが、「そのわけはそれに彼が少年時代にいだいてゐたと思はれたくない感情や主義が含まれてゐたからであつた。」

世界の歴史にとつて、この軋轢は測るべからざる意義を有してゐる。けだしそれによつてナポレオンの無意識が、決定的にまた一途に父親に對する否定的態度をとるに至つたからである。それによつてその後彼は、父親に對して不斷の容赦ない鬪爭を行ふやうになつたからである。

十六、假借ない父親との鬪爭

この時から以後、ナポレオンの心は常に母親を全部的

彼の祖國は、例へばコルフ島乃至マルタ島以上の興味を彼に感じさせる力を既に失つてゐた。

それればかりではない。ナポレオンが全能の首席總督となつた時、祖國と祖國人に對して甚だしい忘恩の態度を示したといふマソンの語つてゐる事實は、明かにこの同じコムプレクスに原因があるのである。彼の母親レティチア夫人は、豫期もせぬ自分の地位の變化にもかゝはらず、自分の過去及コルシカに對する忠實な態度を少しも變へなかつた。その母親がナポレオンのことを當時次のごとく語つてゐる。

「だがツーロンからこの方、伜はすつかり變つてしまつた。この頃ではコルシカ語で話しかけられても怒るやうになつてしまつた。

皇帝となつた後も、コルシカの親類の地位と關係を定めるには、皇太后の並々ならぬ努力がいつたのであつた。ナポレオンが前のコルシカの大歩兵隊から自分の側近に採用した人物は、アルリギとオルナノの二人に過ぎなかつた。そしてこの二人といへども、イタリイで、エジプトで、サン・ドミンゴで、要するにカヂスからモスコウに至るすべての試練を經た上ではじめて採用されたのである。

「コルシカ人はもういらない。」ナポレオンはフランスに所有したいといふ渇望で惱まされるやうになつた。そして彼が母親を父親の手から奪ふために遂行した鬪爭は、確かに人類史最大の壯觀であつた。世界に於るこの獨自の存在の動きを操つた糸、そのすべての行動を規定した方針、ナポレオンが至るところで常にあらゆる手段を用ひて行つた鬪爭は、要するに父親の手から母親を奪ふための鬪爭であつたのである。彼はそれにはいかなる手段も辭さなかつた。「けだし私は世人とは別種の人間であり、道德や習慣の法則は私のために作られたものではないからである。」

この結果第一に變化したやうに見えるのは、彼とコルシカの關係である。多忙な父親が母親をマルブーフの手に委ねて置いたことを少年ナポレオンがどういふ風に解釋したにせよ、とにかくこの衝突以後、コルシカはナポレオンにとつて薩張り本能感情的價値がなくなつてしまつたのである。一七九五年、彼は砲兵指揮官として、イギリスの手からコルシカを奪還する遠征に從軍する筈になつてゐた。この遠征は行はれなかつたが、翌年彼はイタリイ征討軍司令官として、今度は自分の手でコルシカ奪還を目的とする軍事行動を組織したのであつた。だがこの事件は、何んら特別の感動を彼に與へた模樣はない。從つてフルニエの次の言は正しいとせねばならぬ。

をコルシカ人の手に委ねやうとは思はなかつた。彼はコルシカ人にコルシカを宛がひ、コルシカにある自分の全財産を犠牲とし、それをコルシカ人の間に分配したが、それは彼等がフランスにやつて來ないやうにするための方法だつたのである。

この無頓着、この嫌悪の態度があつたから、ブッタフオコは前に自分がボナパルト中尉にいはれた言葉を、そのまゝ皇帝にいひ返すことができたのである。彼はその遺稿の中で、皇帝を次のごとく批難してゐる。

　コルシカは汝に對して、いひつくせないほどの言分を持つてゐる。わが子よ、汝の心は汝が生れた島に對して何も感じないのか？　汝が成年に達した時、我は汝の將來をいろ／＼にトつた。汝が大舞臺へ登るのを見た時、我が心は喜びにおのゝいた。我はその時、汝が汝の祖國、汝の同胞を決して忘れぬことを希望した。同胞の一人が、さういふ折に同胞を忘却するとは恐ろしいことである。

しかるにコルシカが彼の愛を失ひ、彼にとつて存在せぬものとなるや否や、ナポレオンはたちまち失つた初戀の代償を熱烈にもとめ出したのである。この追求には限度がなく、滿足がなかつた。そして滿足を感ぜぬ彼の想像力は、次から次へと國を得やうと欲して止まないのであつた。だが結局それは代用品に過ぎぬから、彼の渇望はそれで滿足を與へられることは決してなかつた。そしてこの放縱な追求の過程に於て、彼は諸國の國土を血の海に浸らしめ、地上に恐怖を撒布し、ヨーロッパの外貌に變化を與へたのであつた。だがそれは要するに無益な努力で、彼の渇望がそれで滿されることは決してなかつたのである。

この代償の長い連鎖の第一環として、彼はイタリイを得やうと欲した。イタリイは彼が最も頑强に得やうと欲してゐた國であつたのである。セント・ヘレナ回想記には次のごとき文句がある。

　一七九五年一月、ナポレオンはタンド峠で一夜を過した。曉方彼はそこから美しい平原を眺めたが、それは前から彼の念慮の對象となつてゐたものであつた。

彼がこの國で、オーストリイ人、サルヂニア人、ナポリ人、それから法王とまで干戈を交へ、どれほどの血を流したかは我々はよく知つてゐる。彼のタンド峠の叫びの意義を知るためには、シュケェの傳記によつて、レティチア夫人がラモリノの生れで、コルシカ人となる前はイタリイ人であつたことを知らねばならぬ。

私の推測を證明する一つの小事件がある。ナポレオンが自分のイタリイ名前、ナポリオネ・ブオナパルテを用

ひたのは、ジョゼフィヌ・ド・ボーアルネーとの結婚書類に署名した時が最後である。この結婚直後の手紙、すなはちその一週間後にロッシに出した手紙では、既にその署名はフランス風にボナパルトと綴られ、その後彼はこの綴のみを用ひたのである。この機會に一見重大でないやうに見える一つの事實を記して置くが、それはジョゼフィヌに宛てた戀文の中で、ナポレオンは彼女をイタリア名前でしば〳〵呼んでゐることである。

イタリイ戰爭の平和が締結されると、彼は大急ぎでマルタ、コルフ、ツァンテなどの島々を占領してゐる。これがコルシカに對する追憶から出たことは明かだが、しかし彼はそれを「けだしこれらの諸島は、我國にとつてイタリイ本土以上に重大な利害關係があるからである」と説明してゐる。（執政官政府宛の書翰）

彼はそこからエジプト、パレスチナに渡り、更にダマス、アレプ、コンスタチノプルに赴かうとした。それはトルコを覆滅し、東洋に一大帝國を建設し、アドリノプルを經てウィーンへ歸らうと考へたからである。彼はインドのことも決して忘れなかつた。貪慾な點で比類のない彼の想像力は、インドをも同じく凝視してゐたのである。

ナポレオンは自分でフランスをメートレス（情婦）と呼んでゐたが、フランスの皇帝となつた彼はこの情婦だけでは滿足ができず、司令官及總督時代と同じ貪慾を以て他の國々を得やうと欲したのである。彼は帝國を次から次へと顚覆し、それを作り直したが、それは彼自身の言葉によれば、「ヨーロッパを彼の足下に跪かしめ」、自分が「世界の主人」となるためだつたのである。そしてこの行動はすべて母親に對する近親姦的願望と、父親に對する非常な蔑視に促がされたのである。それは人類史上特異な願望と蔑視だといはねばならぬ。

十七、父親に對する無限の輕蔑

ナポレオンが母親を慕ふ當途のないこの巡歷で、父親の映像、すなはちヨーロッパ諸國の各元首に對して感じた憎惡と輕蔑を詳細に語らうと思つたら、こゝで當時の歷史を復誦せねばならなくなる。故にこゝではオーストリイのフランツ皇帝、プロシア國王フリードリッヒ・ヴィルヘルム三世、スペイン、ポルチュガル、ナポリの諸國王、ドイツの諸國王及聯邦諸侯、並びに法王ピウス七世などに對する彼の態度を簡單に述べるに止めて置く。彼は彼等を打負かした後で、どれほど彼等を挑發し、苦しめ、侮辱し、卑屈にさせ、墮落させたであらうか。どれほど彼等に彼等の位置が從屬的であることを感じさせた

であらうか。次にそれに關する若干の例をいろ〳〵な傳記から擧げて見る。

フルニエはかう述べてゐる。

ライン聯邦の諸侯は、このコルシカ人に敬意を表するためにドレスデンに會合した。彼のライン諸侯支配は絕對的であつて、ドイツ人の神聖ローマ皇帝でも、彼ほど絕對的に支配した者は久しくなかつた。最後のローマ帝國皇帝、オーストリーのフランツ一世もこの席に列した。ナポレオンが舅とこの席で會合を望んだのは、自分の價値を高める手段として、この世界最古の王家との親族關係を利用するにあつたゞらうか？彼はこの席上で、フランツ一世に彼の遠征に參加をもとめた。この交渉は成功しなかつたが、とにかくオーストリイ皇帝は、この婿と極めて親密であつたにかゝはらず、この成上りの全能者の命を唯々諾々と甘受する侍者である點では、プロシャ國王や小國の諸侯と毫も變りがなかつた。

G・キルハイゼンは、チルシットの會見について次のごとくいつてゐる。このチルシットの會見は、プロシャ軍が大敗を喫したフリードランド會戰の直後に行はれたものである。

事實その翌日、一八〇七年六月二十五日、ニエメン河の浮臺で佛露兩皇帝の會見が行はれた。プロシャ王はナポレオンが招かなかつたから、仕方なく岸で待つてゐた。……次にナポレオン、ツァー、プロシャ王はチルシットで會見した。……ナポレオンはフリードリッヒ・ヴィルヘルムと懸案を論ずるのを避け、彼を重要でない人物として扱つた。彼がプロシャ王との話題に選んだのは詰らないことばかりで、軍服のボタンの話だとか、軍帽のことなどであつた。そしてあらゆる機會を摑んでは、プロシャ王を嘲弄することを忘れなかつた。

ザックス・ワイマール公夫人ルキズの手紙には次のごとくある。（同じくキルハイゼンによる）

……エルフルトに來た四人の國王に、ナポレオンがどんな磊落な態度で應接したかは貴方には御想像ができぬと存じます。それが確かに見物する價値がありました。例へば昨日のことですが、ナポレオンは食事前に國王たちをたつぷり一時間廊下で待たせました。

だが、ナポレオンに嫌惡された點では、ルキ十六世の家門、すなはちブルボン家よりも甚だしい王家はなかつた。彼は既に司令官でしかなかつた時、ブルボン家の素晴らしい申出を素氣なく拒絕したのであつた。彼はブルボン家について、「もしブルボンが王位に復するならば、私は直ちにまたそれを剝奪してやつたであらう」といつ

てゐる。アウステルリッツの大勝の後、彼は簡單な軍事命令で「ブルボン家はナポリを支配することを止められたり」と布告し、仰天したヨーロッパの眼前でこの王家の末裔で何も知らぬアンギアン公を銃殺したのである。

更に一八〇四年に發せられた宣告は、彼がいかなる父親の存在も絕對に許さぬこと、すべて自分がそれに代る意のあることを明かにしてゐる。「ヨーロッパの平寧は、ヨーロッパが一個の元首、皇帝の下に結合されぬかぎり望んで得られない」とそれはいつてゐるのである。この言は、皇帝の行爲の眞實の、また最深の動機をよく示してゐるといはねばならぬ。

一見孤高に見えるこの魂、大野心の好例證と見られるこの魂の中には、リビドォ的本能の姿が、ハッキリと見られるのである。そしてこの世界の最も不思議な宿命も、終局に於ては性的動機の昇華によつて決定されたことが分るのである。

ナポレオンの行動を普通の人間の誰にも見られる典型的本能に還元して見ることは、決して彼の偉大と重要さを減ずるものではないことを私はいつて置きたい。ナポレオンは要するに比類のない自然現象であつて、ウォルスリイの「彼は大人物中の最大人物である」といふ言は、私の同感を禁じ得ないところである。

次のヴィクトル・ユーゴーの言葉も、我々の見方と毫も矛盾するものではない。

彼はすべてを持ち、彼は完全であつた。彼はその頭腦の中に六乘冪まで達した人間能力の立法を持つてゐた。彼はジュスティニアンと同じく自ら法律を編纂し、シーザーと同じく命令した。彼の談話にはパスカルの稻妻とタキッスの雷撃が交つてゐた。……チルシットでは、彼は歷史を作り、そしてまた歷史を書いた。彼は皇帝たちに尊嚴の何ものなるかを敎へ、科學學士院ではラプラースに應酬した。

分析上の結論として、私は次のことを言添へて置きたい。それはこの大人物が我々に常に崇拜の念を起させ、興味をいだかせるのは、結局に於て彼の力強い、また極めて明瞭なエディポス・コムプレクスが、我々の各々の中に喚起する强烈な反響によるといふことである。我々は誰でも、多かれ少かれ抑壓された同一の鬪爭に惱んでゐるのである。

エルフルトで國王たちを前にしてヴォルテールのエディポスが演ぜられた時、ロシアのアレキサンダー皇帝が席を立つてナポレオンを抱擁し、滿場の喝采をあびたのは、フルニエの考へてゐるやうに打算からのみの行動ではないと思ふ。私はアレキサンダーもその時、我々と同じ感情に捕へられたのだと思ふのである。（終り）

教育者の爲の精神分析概論（アナ・フロイド）

宮田齊譯

尙ほ皆樣方は、私の講話の極く最初のところで、兒童が斯樣な初期のコムプレックスを、殊に兩親との間の關聯（に於けるそれ）を、體驗する仕方が彼の後年の體驗全般の雛型になるものだといふことを御承知になつたわけですが、此等の幼兒期に體驗した愛と憎惡、反抗と服從、不實と信實と云ふやうなものを後になつてからもその頃と同じ型で反覆したいといふ强迫的な衝動が兒童の內部に起つて來るのであります。兒童が斯かる內部的衝動に驅られて、その愛情のつながりや交友關係或は職業的環境などを迄すでに下積みになつた筈の幼兒期の體驗と可及的に同樣な新版として實現されるやうな仕方で選擇するといふことは、彼の後半生にとつて決して無意義なことではありません。先に、生徒と教師との交涉の實例を御話した際御覽になつたやうに、兒童は此樣にして過去の感情的態度（Gefühlseinstellung）を現在の人物に轉嫁する（über-trägt）のであります。その場合、謂ふ所の感情轉嫁を可能ならしめる爲に、彼が此の現實なるものを屢々見誤り、都合よく解釋し、或は之を無理に歪曲するといふやうなことは申す迄もありません。

さて世上には、精神分析は性的といふ概念を從來用ゐられてゐる限界以上に擴充してしまつて、全然無害な、性的などとは思ひも寄らないと考へられてゐた幼兒の活動にすら性的なる名を與へる、と評する人が尠くありませんが、これ迄の私の御話を御聽取りになつた所によれば此の批評は裏書をされるわけになります。人間の性の本能は十三歲から十五歲の頃、卽ち所謂青春期に突然醒るといふやうな今日迄皆樣方が親しんで來られた學說に對抗して、精神分析は此の本能が總ての發育の開始期にある兒童のうちにすでに働くものであつて、一つの型態から他の型態へと漸次移行し、一つの段階から次の段階

へと進展をつゞけ、永年に亘る發展過程を辿り辿つた揚句成人の性生活になつて現れるのであると主張いたします。しかも、此等の種々相の全體を通じて働く性本能のエネルギーはその性質に於て恒常不變であり、たゞその時々に應じて量的に變化するに過ぎません。此のエネルギーを精神分析の術語でリビドー(Libido)と申して居ります。兒童の本能發展に關する此の學說こそは、新興科學たる精神分析の最も重要な部分をなすものであると同時に、それが唱へられ出した當初から多くの論敵を得るやうな結果にも導いたのであります。皆樣方のうち大多數の方々が今日迄分析の學說を危險視して敬遠して居られたのも此處に理由があつたわけであります。

まづ此の程度で皆樣が御學びになつた精神分析の原理的知識の概括を了へてよからうかと思ひます。これで精神分析の根本的な概念と、其等に與へられた名稱の多くを大體御承知になつたわけであります。無意識、抑壓、反動形成、昇華等の概念、轉嫁の現象、エディポス・コムプレクスとカストラチオーンス・コムプレクス、リビドーの概念、幼兒期の性本能の發展の說等、斯樣に展開されて來た諸々の概念はこれから私共が手をつけようとする兒童生活の第二の時期の探究に大いに役にたつてくれることゝ思はれます。

さて此の邊で再び兒童生活のことに戻つて、前回の終りにあたり、つまり五歲から六歲の頃を振出しに御話しして參ることにいたしませう。此の年頃になると子供は公の教育機關に預けられることになりますから、從つて大いに皆樣の御關心を促す時期といふわけであります。

自分達の所に集る子供達は皆出來あがつた人間になつてゐると幼稚園や學校の先生方が訴へられることは最初に申した通りですが、此の不平は一體どういふ意味をもつのか、これを今迄得た知識を土臺にして調べて見ますと、兒童の內部情勢といふものが分つて見れば此のやうな感じが起るのは蓋し當然なのであります。幼稚園乃至は學校に入つて來る兒童はそれ迄の間にすでに深刻な感情的體驗を澤山に積んで來て居ります。性來の自己本位(エゴイスムス)性は、特定の人物への愛情、此の人物を所有したいといふ激しい慾求、また死の願望(競爭者の死を願望すること、譯者)と嫉妬の爆發とによる(愛する人への)所有權の擁護、によつて矯められて來てゐます。また彼は對父親の關係に於て尊敬とか讚美とかいふやうな感情を知り、自分よりも強力な競爭者と爭ふ苦しみを感じ、或はまた愛を喪つた者のやるせなさを味はつて居ります。その上に彼は此頃迄に複雜した本能發展の過程を經て來て居り、自分自身のうちに起る葛藤に直面しなければならな

いときの辛さをよく承知して來て居るのであります。そして教育の壓力の下に非常な不安を悩み、自己のうちに種々の大きな變化を完成して參つたのでありますから、斯様に過去の重荷を負つてゐる以上兒童は決して白紙どころの沙汰ではないと申さねばなりません。實際、彼の內部に起つた變化といふものは驚くべきもので、動物同様の、一人立ちのできない、周圍の人々にとつては堪え得ないやうな（不潔な）代物が、兎も角多少理性的な人間になつたわけなのであります。

そんな次第で、いよ／＼教室へ入つて來る頃の學童は、自分は、もはや多勢のうちの一人に過ぎないのだから、これからは何の特別な取扱ひをも期待することは出來ないのだと覺悟して來る、つまり、聊か社會に順應する性質を學んで來るのであります。以前のやうに絕えず自分の慾求を滿たさうとつとめる代りに彼は自分に要求される事をしようとし、たゞ許された自由な時間の間だけ快樂を追求しようと心掛けるやうになります。また、何でも彼でも見たがつたり、自己の環境の奧の奧の秘密迄さぐり出さうとする興味は知識慾と學習慾に代り、啓示と說明を求めてやまなかつたものが文字や數字を覺えやうとする努力に代つて參ります。

斯う申すと皆様ホルトの先生方は、私が兒童の大人しさを餘り誇張して居りはしないか、ちやうど先達ての御話のなかでその惡戯性を極端に强張したやうにあまり仰山にお話し申して居るのではないか、とお考へになるかも知れません。そんな良い子供には會つたことがないとお感じになるかも知れません。が、現在の狀態では兒童ホルトに收容される子供達といふものは、內部的或は外部的の何かの原因のために幼兒期の教育を完全に了へてゐないものばかりだといふことをお忘れにならないで頂きたい、普通の學校の先生方ならば、大部分の生徒が私の申した通りの子供であつて別に誇張でも何でも無いことを充分認めて下さることゝ思ひます。

これこそ實に教育活動の實際の可能性と影響力の有力な證明にならうと思はれます。一般に、幼兒期の教育に效果を擧げることの出來る兩親、つまり泣蟲で、世話の燒ける、汚らしい赤坊を行儀よく教室の座席に坐る學童に育てあげることに成功した親達は自分達の手柄も誇りとして差支ないわけであります。全く廣い世間のうちでも、これ程の變化が完成される場面と云ふものは極く少いのですから。

併しながら、此の兩親の教育の結果といふものを評價する際に、若し次に述べるやうな二つの考慮が必要とされることがなかつたなら、私共は恐らくその功績をなほ

一層讃美することが出來たかも知れません。その二つの考慮すべき事柄のうち第一のものは、觀察を進めて行くと諒解されます。三歲から四歲位の子供達と交つて一緒に遊んでやつたりする機會をもつ人ならば、誰しも、彼等兒童の幻想力の豊かさ、視野の廣さ、理解力の鮮明なこと、そして質問をしたり結論をしたりする場合の確かな論理、等に驚かされるのですが、その同じ子供達が學齡に達すると、彼等に接する大人達の眼から見て、何となく間が拔けてゐて、平板で、あまり興味を惹かないやうに見受けられるやうになる、そこで人々は一體あの幼い頃の怜悧な、獨創的な性質はどこへ行つて了つたのだらうかと不審を抱くのであります。が、精神分析の教へるところによれば、兒童の此等の才能は、彼に向つてなされる要求に對抗することが出來なかつたのであつて、五歲を過ぎる頃には殆んど消え失せて了つたも同樣になるのであります。(未完)

前號正誤表

頁	行	誤	正
六	二	數程	數種
一二	一二	斷定です	斷定を下す
一七	上 三	何か勉强しようといふ	何か勉强しようといふ
同	下 六	(三十八年簡十四)	(三十八年書簡)
同	下二一	書いた　とさへ	書いた——とさへ
二〇	上一二	世長ヶ閑にし	世を長閑にし
同	下 九	彼	捨
二二	上一四	くらすすいふ事	くらすといふ事
同	上一五	何分一分か	何分一か
二七	上一七	指すのがあつて	指すのであつて
二八	下一四	普通。漱石的	普通、漱石的
同	上二二	許	訐
同	上二二	死む	死ぬ
二九	下二〇	超	起
三一	上二一	冒驗	冒險
同	下 六	ませうか」これは	ませうか」と。これは
同	下一六	見へ	見え
三二	下一二	ない。漱石の	ない。(漱石の
三三	上一五	ですよ。	です。
同	上二二	たのです。	たのです。」

五九頁下段へ續く

文藝學と精神分析（ムッシュク）（6）

武田忠哉譯

フロイドは、彼が精神分析大學の觀念を暗示した他の場合に、今日の醫者からは緣の遠い部門、すなはち、文化史・神話學・宗教心理學・文藝學をも精神分析のスケデュールに組み入れようとした。しかしながら、彼がそれによつて非精神分析的な文學研究の代用を計畫したやうには信じられないのである。

同じ論文「非醫者による精神分析の問題」（一九二六）*の中につぎのやうな言葉がある。

「一つの科學によつて他の科學を壓倒することは一つの背理である。私はかやうなことに何らの興味を持たうと思はない。眞に、物理學は化學を無價値なものにはしない。前者は後者の代用になり得ないが、しかし、それはまた後者によつて代表されることが出來ない。勿論、精神分析は、精神的に無意識的なものの學として全く特に一面的なのである。」

*「この小さい論文の標題は、すぐそのまゝには理解されやすくない。したがつて、私はそれに註を加へよう。局外者とは、すなはち、非醫者といふのにひとしい。そして、目下のテーマは、精神分析の行使が非醫者にとつても許されるべきものか否かを指してゐるのである。」（フロイド）

　フロイド自身は、結論において、この種の精神分析的な試みの可能性を容認したのであつた。

しかしながら、この觀點の下に、精神分析と文藝學の間における一つの和解の可能性が示されたやうに思はれる。その上に、いまや勿論このことも同じやうに詳しく證明されねばならないであらうが、文藝學においても、しばしばかやうな接近に有利な傾向が見られるのである。一般に、藝術創造の心理學的・精神的問題へますます深く沒入する一つの意志以外に、果してこの近代文藝學の發展過程――（それはディルタイによれば「象徴的」

なものとして記されねばならない）――は何によつて規定されてゐるのであらうか。

例へば、ヨーゼフ・ナードラーの、政治地理學的*な方向をもつ血統文學史のやうに、「公式に」認可されてゐない考察原理さへも、精神分析の方法の結果に對しておどろくべき原則的な接觸を示すのである。すなはち、それは、無數の平凡な代表者たち――（そこでは、以前の文學史における少數のいはゆる不滅な人々が殆んど消え去らうとしてゐる）――を過去の文學のスクリーンへ氾濫させながら、同じやうな破壞的方法によつて、個々の例外現象を相對的なものにしてしまふ。この過程は、つぎのグリルパルツァーの言葉に適應し、現に、そこではこの云ひ方がモットーにまで高められてゐるのである。

「われ〳〵は先づ無名の人々を感知し得なければ、有名な人々を理解することが出來ない。」

* スェーデンの政治家・法學史家・地理學者ルードルフ・チェレーン（一八六四―一九二二）によつて命名され、地理學的觀點の下に政治的な狀勢と力と過程を考察する地理學の一部門。

かやうな確信の根據にはかならずしも疑惑がないわけではない。しかしながら、それを一概に不可能あるひは非合法的なものとして拒否することは困難であらう。眞に、近代文藝學それ自身もやはり人間の個性を新しく、より深く認識するために戰つてゐる。それは、もしこの點において實驗がそれ自身の强化を約束するやうにみえるときには、けつしてそれを回避しないのである。

この文藝學はそれ自身の研究を長く持續するにつれて、單に一人の文學者と彼の作品との一元性を强く決定するだけではます〳〵不滿に感じられるやうになる。何故なら、それは、かやうなコースにおいて一つの極度の機械化を認めるからである。

つひに文藝學は――これは最近數十年にわたるそれ自身の努力であるが――、その、創造的個人の本質に對する洞察を、最後的に可能なものにいたるまで精密に示すことを欲する。それによつて、最後的に不可能なものを、ます〳〵深い敬意の下に放任することを目的としてゐる。このコースにおいて、文學者は、政治家・哲學者・心理學者・宗教創始者――かうして最近には神經病者――として順次に刻印されるにいたつた。

世界觀・體驗・血統、最後に、トラウマー、あるひは、コムプレックス、これらの概念は、相かはらず到達されえない獲物、創造的精神、に對して投げられる常に新しい網なのである。

つぎのやうな云ひ方が精神分析に對して表明されてゐ

る。

「文學史家の取上げるテーマーは、多かれ少なかれ人間が相互に類似してゐる精神生活の層ではなしに、彼等がそれ〴〵各自に相異する他の精神生活の層なのである。」

しかしながら、この批難は、今まで記したすべての叙述によれば、決定的な點の傍らを通過してゐる。一般に、天才といふ特性を全然一回的であるやうにいふのは正當であり得ない。何故なら、もしそれが成立すれば、彼の生長と彼の影響は不可能になるであらうから。

天才もまたいちじるしく强力な關係によつて人類とタイ・アップしてゐる。彼が非凡に形づくられてゐるといふ理由の下に單純に彼を拒否するやうなことは幼稚といふべきであらう。まさに彼の例外的な性格において、人間的なものそれ自身が壓倒的に包含されてゐなければならない。したがつて、創造的人格の内部にいたる一つのコースは心理學によつて明白に提示されるのである。

しかしながら、それ自身の全過去によつて、文藝學は、今日、その補助概念の心理學的な强化を容認するための、きはめて良好なコンディションに置かれてゐる。例へば、それが、「人間の内部に偉大な創造衝動があるときには、必ず同じやうに强い破壞癖が認められる」といふことを心理學から敎へられても、それによつて文藝學自身の最も收穫の多い努力は少しも損はれないのである。

――「私がいままで犯罪について聞いたかぎりでは、常に、あるひは自分もそれを犯すかもしれないものばかりであつた。」（ゲーテ）

かうして、藝術家もまた一つの非常に高い意味において、法則性から演繹され得なければならない。勿論、それは平凡な宿命論と混同されるべきではない。そして、この見解への反對は、あらゆる點から超個人的規準の下位に立つことを苦痛に感じた一つの時代に屬してゐるのである。

すでにわれ〳〵の時代は不可抗的にかやうな浪曼派をノッカウトするにいたつた。

かうして、「假令われ〳〵は絕對的な天才性に對する信念を犧牲にしても、われ〳〵を普遍的に結ぶ法則性に對する確信を拋棄することはできない」といふ見地は、われ〳〵の時代の最も極端な、しかし、また最も理解しやすいキャメラ・アングルに屬してゐるのである。

結局、すでに引用したフロイドの言葉からも類推されるやうに、これらの局外者の企劃は、文藝學に對して存在の問題を發したのでは決してない。やゝもすれば、近代的・文學史的研究方法の分化狀態、その問題提出と代

表的勞作のレヴェルの高さ、それらを充分に理解しない性急な人々だけがかやうに主張する恐れを持つてゐるのである。實際、この分野に對立する多くのエネルギーの關係は、現在よりも甚しく書き變へられねばならないであらう。

今日、相かはらず非精神分析的な文學研究によつてのみ解決へ近づけられる文學形成の根本的なテーマーが充分に存在する。さらに、あの反對者たちの引用するいくつかの結果は、假令その成立においては別としてもその內容において、從來の精神科學的研究の結果から（一見示されるほどには）甚しく遠ざかつてゐないのである。

しかしながら、勿論この瞬間には、いづれの側においても競爭といふ問題は重要ではない。文學を取上げる精神分析の文獻には、（文學史家の感情を害する）表面の下部に一つの目的が生きてゐる。すなはち、現代の專門研究においても一般に知られ、そこで多くの人々によつて解放的に感じられる一つの目的。それは、文學史における單純な時間的・空間的配列を克服することに外ならない。實際、かやうな配列は、最も大膽な心理主義よりも遙かに侮蔑的に天才を抑壓するからである。

精神分析もまたこの相續された歷史の局面を充塡する。しかし、その際に、同じ方向をもつ精神科學の變革とは全く他の方法が用ひられる。かうして、そこに殘る最後的な偉大さは、個人の外部において一つの沒時間的存在をつゞける精神的葛藤それ自身である。そこでは、時間と空間のカテゴリーは、抑壓・昇華・退行の種々の段階によつて代用され、術語のやうに呼ばれるであらう。

これらの概念を內容的に承認するか否か、それは、精神分析そのものを承認あるひは拒否することによつて左右されるのである。もつとも、精神分析は單に文藝學の圈にのみ屬するものではないが。

こゝでは、この可能な懷疑論の彼方に、局外者の研究に對して、種々の、自覺のためのチャンスが提供されてゐる。それに對して、私はなほ一つの最後の例を引きたいと思ふ。

いま私はこれらの研究における烈しい決疑論的な夾雜物を考へてゐるのである。それは、精神分析による文學研究家が、彼等の文學における發見を、常に彼等の醫療の實地の場合と比較することに本づいてゐる。さらに、この夾雜物は、それがいかに一般の文學史家の意識にとつて奇異に映じるとしても、彼（文學史家）を無意識的な嫉妬によつて充たすに相異ないのである。

かやうに現代の生活と明快に——いな、素朴に——結

びつくことは、すでに久しい以前に彼の教科から失はれた。しかしながら、以前の時代には、勿論全く他の方法によつてゞはあるが、彼の教科もまたかやうな結びつきを持つてゐた。そして、實際それらの時代は必ずしも價値の低い時代ではなかつたのである。

　恐らくこゝでは、近代文藝學の最も弱い側面が、一つの最も强力な、否、冒瀆的な方法によつて觸れられる。この研究をある種の要素においてリードしてゐるやうに見える最大の危險は、それ自身がその時代の生活から內的に疎遠な一點に外ならないのである。

　いまや文藝學は、假令生々しい現代の聲がそれ自身の耳に不快を訴へるにしても、最早單純にこの聲のかたはらをパスしてはならない。特に、この學がそれ自身の最も固有な土地においてかやうな聲を聽取する場合はなほさらである。

　眞に、文藝學の競爭者は、彼自身にとつて內的に疎遠な區域にあるといふ不利なコンディションの下に戰つてゐる。一方、今日、文學との精神的親和性において眞の優秀さが何處に見いだされ得るか、といふ點については全く疑を挿むことができない。

　この理由、さらになほ二三の他の理由から、いまや文藝學が敬意をもつてそれ自身の强化のために、この競爭者、精神分析と共に論議を交へることを最早拋棄してはならない時のサィレンが響いてゐるやうに思はれるのである。(完)

前號正誤表（五四より續く）

頁	行	誤	正
三四	上三	虞美人草	『虞美人草』
同	上四	母とは丸緣	母とは丸で緣
三五	上一二	あつた。己は	あつた。『己は
同	下一〇	僕の父	「僕の父
三六	上一七	着きて	盡きて
同	下一〇	る母が	る。母が
同	下一八	見る。	見る。
三七	下一〇	であり、彼の	であり、「彼の
三八	上一二	母聖女、	母、聖女
同	下一三	である彼は偉大	である。彼は、偉大
四〇	上四	俗う	俗了
同	上九	石漱	漱石
同	下一二	sorrows buried	sorrows, baried
四一	上一〇	遁世文學とを創めた	遁世文學を創め、他方に於ては道德主義文學を創めた。
五八	上一一	寳に	實に
九五	下一八	考案	考察
九七	上一四	構神分析が	精神分析は
同	一五	やうな抗議を受け	抗議を提出せ

シェイクスピア『ソネット集』の性心理分析（ヤング）

岩倉具榮譯

第二章

以上、私は縷々として述べ立てゝ來たが、そんなことの總てよりも更に一層強い證明力を持つてゐるのは、或る心理學的及び生物學的原理をほんの一寸ばかり適用することである。吾々は退化と云ふことを説明するためには、必ずしも幼兒性への復歸といふ考へ方を持ち出すには及ばない。生物的進化は常に前進的で、よくも惡くも常に一方へ向ひ、而も常に前進的である。個體でも種族でも八十年か一億年か前に出發した同じ水準に到達したと思はれる場合にも、それは前進的進歩をしてゐるのであり、丘の向ふ側を下つてゐるのであり、決して越し方に戻ることはない。生物は前へ前へと進化して行くものであり、決して逆轉することはない。たゞ外觀上逆轉するやうに見えることはある。鯨がその哺乳動物の親類を捨てゝ水に歸つた時でも、魚とは成らなかつた。蛇も爬蟲類の祖先の足を捨てた時でも、蚯蚓とはならなかつた。退化的過程を一億年も前に退轉するものとして説明しようとするのは、鯨をヨナや凡ての乘組員等と一緒に飮込むべく吾々に求めることに過ぎないのである。

否、同性愛は新しいものであり、胚種的根據によつて説明さるべきではなく――食人種の間には見出されない、文明人の病氣である。本當に同性愛的の個人は萎縮した幼兒性を示すよりも、むしろ早熟的老耗の現象を呈する。彼は種々の逃避的機制を持ち、その一つは「女性恐怖」である。シェイクスピアは確かにこの樣な恐怖を持つてゐなかつた。彼は一人の女を狂熱的に愛してゐた。彼はその女に對する愛が如何なる性質のものなるかを非常に正直に示してゐる。それは肉慾的惑溺であつた。シェイクスピアが肉慾を表現してゐる凡てのソネッ

トは彼女に宛てられてゐる（百二十七から終りまで）。愛の最高の理想主義を表現してゐるソネットは男性に宛てられてゐる。二種の詩の群の間のこの調子の差違が重大な點である。實際、性心理學の見地から見ればそれは根本的で決定的である。肉慾に關するソネット（百二十九）は女に宛てられたものゝ一つである。

——百二十九——

恥づべき濫費によりて靈の力を消盡することに外ならず、淫慾(ラスト)を實行することは。實行の以前に於ても、淫慾は僞誓なり、虐殺なり、殘忍なり、大汚辱なり、蠻行なり、過激なり、粗野なり、酷薄なり、不信なり。そは、享樂し了るや、すなはち、忽ち賤蔑を感ぜしむ。超理性的に追求す、然れども得る、やがて、忽ち超理性的に厭惡す（譬へば）そを呑まむものを狂苦せしめむとて掛けおかれたる生餌を（野獸などの）嚥下したらむ時の如し。追求の間も狂なり、領有したる後もまた狂なり。育ちて後も、育つ間際も、育たむと欲する最中も過激なり。未だ實證せざるや天福にして、實證するや禍ひ其者なり。前には企圖せられたる愉悦なり。後には惡夢なり。
此理は世擧りて之を知れり、しかも一人の善く知るなし。
かゝる地獄に人を導く彼の天堂（樂園）を忌避すべきことを

シェイクスピアが「此理は世擧りて之を知れり」と云ふ時、彼は確かに世界中がそれを知つてゐるといふことを意味してゐる。それ故彼は一般人類の經驗であることを語つてゐるので、美的感覺者の小さい、選ばれた仲間に限られた極めて例外の經驗ではないのである。その上、このソネットは全然月並なものである。それは單に古典的ローマの時代からある。ちやんときまつてゐる文學的傳統を反映してゐるに過ぎないのだ。人間ばかりでなく凡ゆる動物とても、歡樂極まりたる後には哀情多しといふ意味のラテンの諺がある。同じ考へは、キーツの『ギリシヤの壺に寄する賦』の中にも表はされてゐる。

このソネットに關する唯一の月並ならぬ事は、如何なる人でも彼の情婦に宛てゝソネットを送るとき、右のソネットをその中に含めておく程厚かましくなるに相違ないことである。併し乍ら、忘れてならないことは、シェイクスピアは彼女と戰つてゐたといふことだ。彼女が自分を若い貴族に盗み去られるにまかしてゐたのを彼は激怒してゐた。このソネットの第二の群は、第一の群と同じく、二つの群が同時的に書かれたのであるといふことを認めてかゝる時にのみ、讀んで判然と分るのである。彼女に對するシェイクスピアの非難は、男に宛てたものと同じ意味のものである。それ等は共に同じ氣持から書かれたのであつた。

かく考へる事に依つて、これ等のソネットが世俗的で

あり且つ皮肉でさへあると解釋されるといふ事實の說明がつく。それ等は當時の一般のソネット作者たちへのあてこすりではあるまいかといはれてゐる。シェイクスピアの愛する女は月並の金髪白皙の美人ではなくて淺黑い女である。彼女の息は大蒜(にんにく)や酒の香がする。（せめて酒の匂ひ位であつたらいゝと思ふ。）彼女が步く時は地上をのつし〳〵と踏付ける。併しそれ等凡てに拘らず、シェイクスピアは首つたけであつたのである。彼の熱心は、彼女が煽つた嫉妬によつて白熱化せられたとの事實を隱さうと云ふやうな了見は、彼にはなかつた。彼女に宛てたソネットの內には次の二行の樣な句で終つてゐるものがある。

あゝ、狡猾なる「愛」や！汝は涙もてわれを盲ひたらしむ。
善く見る目に汝の穢さを見てめざらむ爲に。

（百四十八）とか或は――

あゝ、君は黑からず、行爲ならぬ限りの何事も、醜してふ彼の譏りは、われは思ふ(君が)行爲に因すと。

（百三十一）、或は（百四十七）の――

われは汝を美しとも誓ひ、煌(きら)かとも思へりしが、實は地獄の樣に醜く、夜の樣に暗ければなり。

この凡てに於て、シェイクスピアは確かに極めて人間的な感情を表現してゐた。之等のソネットは他の詩人たちの如何なるソネットとも同樣、心臟を直接に吐露したものである。彼女は詩人よりも遙かに若かつた。そして既に結婚した女であつた。丁度シェイクスピアが結婚した男であつた樣に。詩人の友達と共に彼女が非行を敢てせんとし、そのために事情は愈々面倒なものとなつたが、その以前に彼等二人の立場は既に相當苦しいものであつた。で、彼がその憤懣を表現するに、屢々嘲弄的であり皮肉でさへある句を以てしたことに、何の不思議があらうか。

彼の感情の微妙さはソネット百三十三に示されてゐる。

あゝわが友に、又、われに痛手を負はせて、わが心を苦悶さする其心こそは憎けれ！
われを苦ますのみにては尙ほ足らで、わが愛する友をさへ賤役の奴とならしむるか？
殘忍なる君の目はわれを我身より奪ひつるが、今又、第二のわれをも更に手強く籠絡し了んぬ。
われは、彼にも、われにも、君にも捨てられて、七重に八重に苛責をば受けむとはすなり。
よしやわが心を君が鋼鐵なす胸に押込むるも、せめて友の心はわが貧しき心をもて保釋させよ。
何物がわれを監守すとも、彼を護らむには、君も苛酷なる能はざらむ、わが獄にては。
とはいへ、酷く扱はれなむ、われは君の囚はれにて、わが

有たる總ては君の心のまゝなればなり。

それから又、百三十九

あゝ、斯くもつれなく振舞ひてわれを苦しめつゝ、それをしも僻事ならず思へとはわりなけれ。
せめて目もてわれを傷くるな、舌もてせよ、力づくにてせよ、手管もてわれを殺す勿れ。
餘所に愛する人ありといへ。さはれ、わが前にては、あゝ、なつかし人よ。流し目して脇見することを忍べ。
何の必要ありてか、たくらみてわれを傷けむとはするぞ、君が偉いなる魅力は、わが防ぎ得る限りならぬに?
否、われ君の爲に分疏せむ。按ふに、わが愛人は、その可憐なる目のわが仇敵たるを知れるならむ。
かるが故に、其敵をわが面前より遠ざけつ、毒矢を餘所に射させむとはするならむ。
さもあれ、それは措け。われは殆ど殺されたり。
寧ろすぐに目をもて殺して此苦を免れしめよ。

又、百四十

君よ、殘忍なるが如くに賢明にもあれかし、餘りに甚だしく侮蔑して忍默せるわれに迫る勿れ。
憂悶が遂に語を供給するに至らば、語が、憫みを缺けるわが苦惱をさながらに公表せむ。
君よ。智を授けんか、よしわれを愛せざるも、口にてはわれは愛すと言へかし。
譬へば、焦れ易き病人は、死期の迫れる時にだけ、健かなりといふことを醫師の口より聞かむと欲す。
正に其如く、われ絶望せば、狂人ともなりぬべし、若し狂人とならば、恐らく君をあしざまに言ひ觸さむ。
さらぬだに曲解を好む世が今は末となりにたれば、狂人の誣ひごとも狂人の耳には信とせられむ。
われも狂はず、君も誣ひられざらむ爲に、君よ、眞直に見よ、驕れる心の的はそこにあらずとも。

併し彼女は彼に頓着なく、自分勝手に振舞はうとする。

——百 四 十 二——

戀ふはわが罪にして、嫌ふは君のいみじき德なり。わが罪(戀)を君の嫌ふは、罪深き戀(不義の戀)なるが故なり。
あゝ、されど、わが上を君みづからの上と比べ見よ、しからば敢て難ずるに當らざることを覺らむ。
しからざるも、君の唇をもてしては難じがたからむ、既に幾たびも其猩紅色の飾りを褻瀆し。
われのにひとしき僞證文に捺印して、他し臥床の使用料を横取りせし唇をもてしては。
あはれ、わが戀ふるをも正しとせよ、君が彼等を戀ふるにひとしく、わが目の君にせがむは君の目が彼等に言ひ寄るにひとしきをや。
君よ、心に憫みを植ゑ附けよ、そがそこに生ひ立たば、君の

哀れさをも、げにもとて他(ひと)の憫れまむ。
　おのれの押隱す物（他には與へぬ憐愍）をおのれ得むとせ
　ば、おのれが範となりて、そを得ることを拒まれむ。

この凡ては「女性恐怖」に犯された男の白狀の樣に聞えるであらうか。そこには普通の男が女の魅力、微妙さ、欺瞞と不實とに對して抱く恐れはあるが、女の魅力を恐れることは「女性恐怖」の內には入らない。全く反對である。人は自分の感ずることの出來ない魅力を恐れるものではない。

こゝでは病的な性心理のあらゆる現象を論ずる必要はない。それは廣汎な問題で、專門家の間にさへ完全な一致はないのである。併しこの事は絕對的の確實さで云へる。卽ち、肉體的意味に於て愛する男に對して吾々の言葉が持つ愛の最高極致の表現を書く程にまで達してゐる成人の男が、女を所有することに對してその男又はその他の男と論じ合ふやうな事をしようとは考へられない。そんな時期は、ずつと前に過して了つてゐることであらう。その樣な同性愛の男が女を批難したり、女に對する嫉妬で身を引裂く思ひをしたりすると考へることは、更にまた、そのやうに折角自分で見付けた男を失ふために、まづ第一に女と結婚したり、女をたしなめてよくしてその結婚を確實にしたりすると云ふやうな風に考へることは、あまりにも出鱈目である。それは生物學上の怪現象である。それは心理學上の道化狂言である。詩人は正氣を失つてゐるとさへ考へられないことはないであらう。これほど狂氣じみた道化芝居はかつてこの世にあつたためしはない。（此章完）

小説『若い人』に於ける處女性問題

大槻憲二

近頃、小説に映畫に評判の高い『若い人』（石坂洋次郎氏作）は心理小説としてなかなか興味ある作であり、且つ我等の只今の主題たる處女性心理研究のためにも甚だ適當な材料であるから、こゝにその方面からこの作を批判して見たい。

×

先日、精神分析者や精神病學者たちの集つた或る席で『若い人』が話題に上つた時、居合せた或る女學校の先生がつくづく述懐してゐた。——「全くあの年頃の女學生からあの勢でリビドーを纒綿せられたら、つひ卷込まれてしまひますよ。僕等だつて精神分析を知らなかつたらどんなことになつたか分らなかつたと思ふやうな事件がありますからね。」と。人間の心理の城廓には大手門（意識）方面の防備は嚴重だが搦手門（無意識）方面の防備はすつかり怠つてあるのだから、——否、この方面では寧ろ陥落したがつてゐるのだから——この方面から攻め寄せるならば先生でも何でもわけなく陥落するだらう。分析は搦手に防禦を築くことであり、後頭に心眼を具へることであると、常々私は主張してゐる。

×

作者は精神分析に就いて多少の知識を持つてゐる人らしく、その記述や描寫には分析的な鋭い閃きが處々に見えるが、我々には固より物足りないものである。

話は北海道のとあるミッション・スクールに於ける先生と生徒との間の愛慾葛藤であつて、主題は文藝に、即ち人生に、永遠の問題たるべき三角關係を取扱つてゐる。三角關係は、精神分析では、エディポス・コムプレクスから、即ち幼兒期の親子關係から由來するものとの結論に到達してゐる。江波惠子が間崎先生に傾倒して行つたのは、その父の面影を求めてゞあつたと云ふことは、作

中に判然と描寫せられてゐる。またもし間崎に橋本先生と云ふ愛人がなかつたならば、惠子の間崎に對する興味と情熱とはあれほどには燃上らなかつたであらう。橋本は惠子のためには、フロイドの所謂「憤る第三者」(拙譯『分析戀愛論』四頁參照)としての役割を果したのである。卽ち意識的には戀の邪魔者でありながら、無意識的には刺戟劑としての役割を果したのである。惠子のあの典型的なヒステリー性格、分裂してゐる人格、母親及び間崎への愛憎並存、娼婦的な生活をしてゐる母親に自己を同一化してゐる時には見知らぬ父を通じて男一般に憎惡を寄せ、母親を輕蔑してゐる時には男を思慕する。

「私は男を知りたい。その男を通じて私の父を感じたい。父の肌を、父の血の匂ひを、父の口臭を、父の慾情を、さうすれば神は神の祝福に惠まれない一人の私生兒が何故この世に生れ出たかを正しく知ることが出來るだらう」云々。

と惠子は間崎に見せる作文の中で云つてゐる。これは體のよい戀文である。間崎の同情心にからんで行つた無意識的な誘惑の手管である。間崎は美事それに引かゝつたのである。彼は良心の名に於いて救助願望を發動させた。これが併し、彼自身の墮落願望が良心の假面を被つて彼をそゝのかしてゐる心理的自己欺瞞であるとまで自覺出來るのは餘程分析を體得してゐる人にして始めてなし得るところである。作者は橋本をして鋭くその心理の虛を衝かせてはゐる。そんなに惠子を救つてやりたいなら、彼女と結婚するより外はないと云ふ意味の言葉がそれだ。併し分析者ならぬ橋本に間崎の心理の錯綜と葛藤とを十分に分析調整してやる力のないのは當然である。彼女自身がやはり錯綜した心理の暗夜を模索して右往左往してゐる一人に外ならないから……。

やがて惠子は橋本先生を押除けて間崎と肉體の關係を結ぶ。少くとも肉體關係の方面では、橋本への凱歌は彼女に擧つたのだ。その凱歌を奏した後少時の惠子の得意さ、有頂天さは、作中に於いて甚だ躍如と描かれてゐる。臆面もなく惠子が敎員室へ間崎を訪ねて大した用事もないのに何度でも押掛けて來る。講堂での卒業式豫行演習では、脊延びしたりして傍若無人に間崎への關心と執着を披瀝する。間崎は甚だ照れてゐるのであるが、併しその羞恥の被虐をなほこの上にも嗜まうとするやうな自己懲罰的な病的心理も見える。

然るに橋本への凱歌が單に肉體的なものに止まり、精神的なものに於いては結局自分の敗北に終つたと自覺した瞬間に於いて、彼女の態度は一變した。間崎は惠子に向つて、二人の關係の今後の確立と幸福とのために橋本

の惠子に與へた言葉を眷々服膺すべきことを云つてきかせる。

「――君は覺えてゐるね、橋本先生が君に言つた言葉を。『江波さんはしやはせ？ 一生懸命になつて下さいね、きつとですよ』つて君に念を押された……。さうだつたね、もしも僕達が一生懸命になつて幸福を築けなかつたら橋本先生に對して顏向けがならない譯だ。……いゝね、そこん所がよく分るだらうと思ふが………」云々と。その時、惠子の態度は一變した。「室がきしむやうな烈げしい勢ひで間崎の方に向き直り、大きい氣力のこもつた眼で間崎をぢつと見まもつた。」さうして次のやうに叫ぶ。「……せんせい、ほんとのことを云つて！ もうなにもかも駄目なのね、いゝえ、はじめつから駄目だつたんだわ、もうおしまひなの……。私、でもせんせいを恨んだりなんかしないわ、せんせいに御禮を云ふわ……さあ、もうみんなおしまひなのね……。」

なほも追縋る間崎の横面に平手打ちを喰はして「間崎先生、さようなら」の一言を殘して走り去つて行く。

この瞬間の心理の轉變は非常に意味深長であると思ふのだ。惠子の間崎に對する愛慾心理が非常に判然と出てゐる。惠子は始めから間崎をそんなに愛してはゐなかつたのだ。たゞ橋本と云ふ競爭者――「憤る第三者」が存在したゝめに彼女のエディポス的原始感情が異常に強く煽られたに過ぎなかつたのだ。が併し、橋本がゐなかつたら惠子は間崎に全然興味を持たなかつたであらうと私は云はふとしてゐるのではないのだ。彼女は自分で告白してゐるやうに、「父の面影」としての男を求めてはゐたのだ。その「面影」に該當するものとして、とにかく間崎に白羽の矢は立てられてはゐたのだ。併しその白羽の矢が如何なる程度にまで深く執念く突刺さるかは別問題である。それが深く執念く突刺さると考へたのは間崎の自惚であり、突刺さるべきだと考へたのは、彼の道徳であつたのだが、その道徳が如何に薄弱であるかを間崎自身自覺してゐたが故に、その薄弱な道徳への強化として、助勢として橋本への道徳を引合ひに出して來たのだ。そこに於いて惠子は本能的に間崎の心理的トリックを直觀して、寧ろ屈辱を感じて、間崎への別離の宣言となつたのだ。して見ると、間崎も惠子も共に本當の戀愛をしてゐたわけではなかつたのだ。共に肉體的の火遊びをしたに過ぎなかつたのだ。間崎はまァそれでも處女性の試喰をして甘いことをしたとも云へないことはないが、惠子は一生を捧げる相手でもないのにどうして處女唯一の（或は第一の）財寶たるところの處女性をむざむ

ざと間崎に提供したのであらうかと云ふことが問題になる。が、讀者の或る人は云はれるであらう。惠子は間崎を自分の一生を捧げる相手として處女性を提供したのだが、全部的に間崎を占領することが出來ない位ならば、寧ろ「總てか無か」の論法で、間崎を放棄したに過ぎなかつたのであらう……と。併し私は主張する、さう考へることは惠子への讀者の夢ではなからうかと。もし惠子にそれほどの精神的な愛着があつたとするならば、あの瞬間に於いて間崎を斷念することがあまりに唐突であり過ぎると云ひたい。間崎と肉體的關係を結ぶまでは、橋本への競爭心があれほど熾烈であつたのに、肉體的關係を結んでしまつた後に於いては、橋本への競爭心が殆どなくなり、極めて容易に旗を捲いて敗走し、あとから間崎が追蒐けても寧ろその手を遁れるかのやうに去つて行つたと云ふことは、彼女の間崎に對する關心がたゞ肉體的に止まつてゐたゝめと、もう橋本への凱歌は彼女に於いて完全に奏せられてしまつたのであつて、それ以上には精神的にまで競爭するには及ばなかつたゝめとであらう。否、その方面での闘爭にかけては彼女に於いて始めから自信もなく興味もなかつたのであらう。彼女は寧ろ自分の喰べ滓を橋本先生に呉れてやることに依つて別種の勝利感を滿喫してゐたとも解せられるのである。何となれば、彼女は、間崎との別れ際に、實に次のやうに叫んでゐるからである。

「間崎先生、私はこんな慘めなことを云はずにお別れしたかつたの。でも先生があまりしつこくつけまとふものだから……。たうとう云つてしまつたわ、私でも先生を恨んだりなんかしませんわ、第一私、先生のことなんかすぐ忘れてしまふと思ふの、『男』と云ふ概念だけを弱く疲れた肺活量でゼイ〳〵と呼吸してゐるだけで個々の人間に對しては一切無差別なの。ママのさう云ふ生活を私も間もなく受け繼ぐことになるんだわ、……間崎先生、さよなら、私これからとても樂しい生活に入るみたいな氣がしてるの……」

これで見ると、いつかは別れることを始めから豫想してゐたことが分る。永續の希望もない男に初夜權行使の機會を供すると云ふことは、少くとも本人(並びにこの場合その母親が)處女性を財寶として見ず、寧ろ一種のタブーとして、忌むべき荷厄介なものとして、考へてゐたと云ふことを證するものでなければならない。さう考へることに依つて、彼女が間崎への感謝の言葉(「私でも先生を恨んだりなんかしませんわ」)や今後の生活への希望(「私これからとても樂しい生活に入るみたいな氣がしてるの……」)などを理解することが出來るので

ある。

×

このやうにして二人の關係は絶たれる。橋本からも惠子から平手打ちを喰はせられて晏如としてゐる間崎は、作者も云つてゐる通り嗜虐的（マゾヒスチック）な性格者である。

少女はその處女性を捧げた男に對して愛慾並存の矛盾心理を持つものであるが、併し處女性が女の重大な、殆ど唯一の財産となつてゐるかの觀ある現代に於いて、その財産をむざ／＼與へてそのまゝ別れ去る心理は常識判斷の彼岸にある。處女性は現代に於いては、少女等の意識面に於いては、財産となつてはゐるが、その無意識面に於いては今なほ古代人や野蠻人の場合に於ける如く、タブーとしての面を強く保有してゐる場合の多いことを、フロイドと共に、私自身も多少の觀察に依つて承認せざるを得ないのである。

タブーとは非常に神聖なものであると共に、他面に於いて非常に忌まはしいとされてゐるものである。北海道から東京への修學旅行の間に、上野驛前の某旅館で、宿泊中の女學生等に向ひ、食後の徒然を醫する閑話中に、間崎は「恐くて臭くて甘いものは」何かと云ふ謎を出してゐる。

女生徒たちが分らぬと云ふと、それは「鬼が便所でお饅頭を喰つてゐるのだ」と云つて一同を笑はせる場面がある。かう云ふ謎は必ずしも間崎や作者が考案したものではなく、多分昔から云ひ古るされて來てゐるものであらうと思ふ。もし間崎になつたモデル先生又は作者の考案とすれば一層面白いわけになつて來る。何となれば、鬼が便所で饅頭を喰つたとても、必ずしも「恐くて臭くて甘い」とは限らないからである。「恐い」のは鬼自身に非ず人間である（鬼が鬼自身を恐れると云ふことはないから）が、「甘い」のは人間に非ず、鬼だけである。たゞ「臭い」のだけは鬼と人間とに共通してゐる。して見ると、この謎の解釋は極めて不完全である。このやうな不完全な解釋で滿足して笑ひこけると云ふのは、どうもそこに何か眞劍な、シーリアスなものが別にあつて、それに聯想が觸れんとして觸れずに抑壓されてゐるからではなからうか。本當にそれ自身が「恐くて臭くて甘い」ものは處女性を試喰するに際しての男性の心理であらう。もしさうだとすれば、この作中に於いて男主人公が女學生等（その内には勿論惠子も含まれてゐる）を前にして、かゝる謎を提出して興じたと云ふことは、作者の無意識意圖に於いて極めて深遠なものがあるらしく察せられるのである。

惠子の間崎に對する感情が愛憎並存的であつたのであ

るから、愛する間崎には神聖なる面の處女性を捧げ、憎むべき間崎には忌まはしい面の處女性を捧げたと云ふわけかも知れない。惠子の橋本に對する態度も愛憎並存的であつたから（現に惠子は間崎が橋本を秘に愛することを知つてゐるが故に自分も橋本を愛するのだと間崎に告白してゐるところがある、その點に於いては彼女は橋本にも自己を同一化してゐるのだ）、惠子はその處女性を間崎に與へることに（或は間崎の童貞を奪ふことに）先鞭をつけることに依つて凱歌を奏したと共に、他面に於いて、橋本を克服したことに就いての罪障感を持つたであらうと云ふことは否定すべくもない。彼女が間崎の横面を打つた時、その心理の中には、女一般の名に於いてのみならず、橋本の名に於いてさへ、打つたのであつたかも知れない。實際、さう考へられる筋がないではない。

　とにかくこのやうな事情に依つて二人は別れ、それから、惠子が豫言したやうに、間崎と橋本との生活が始まつたのである。何だか三人が、惠子の處女性解消を契機として、それ〴〵に進むべき途を打開したやうな觀さへないではない。間崎も惠子も共に處女性を毒見した、そのタブー性を拂ひ清めたやうな氣もする。西洋には『毒見』と云ふ小説があつて、それは或る處女が愛する男と結婚する前に、いやな男に處女性の毒見をさせると云ふ筋のもので、フロイドの『分析戀愛論』の中に詳しく紹介せられてある。『若い人』も一種の毒見小説であると云へるかも知れない。さう云ふ解釋の下し得られる理由の一つは、間崎が惠子との關係に就いてあまり甚だしい道德的苦悶を示さず、惠子に於いても、何ら貞操觀念をその場合に持合せてゐないからである。寧ろこれを契機として「とても樂しい生活（墮落生活）に入れるみたいな氣がしてゐる」。からである。間崎には道德上の苦悶があつたと人々は云ふかも知れない。教室に於いて、女生徒たちの前に立つて連りに赤面したり苦悶したりするのはそのためだと人々は云ふかも知れない。併しあれ等は彼がたゞ照れてゐるだけであつて、惠子の將來に對する教師としての道德的苦悶ではないやうに思はれる。併し假りに苦悶してゐるとしてもよい。それならば、後で苦悶しなければならないやうなことをするのは抑々道德的苦悶を知らぬからだと云ふ逆の論法も成立つであらう。少くとも、タブー解消者としての責任を果したと云ふやうな無意識的信念が、彼をして比較的無良心的に晏如たらしめてゐるのではないかと云ふ氣がしてならないのである。

　間崎にはともかく多少の道德的苦悶があつたとしても、惠子の方は、右に引用した彼女自身の言葉に就いて

見ても分るやうに、何の苦悶もなく寧ろ厄介拂ひをしたかのやうに、喜び勇んで母親の如き肉の生活、「樂しい生活」に入り浸らうとしてゐる。惠子は云はゞ不良少女であるが、この種の不良性は、何らかの程度に於いて、大抵の思春期の少女等の共有してゐるところであると云つても必ずしも過言でないやうである。少くとも、かゝる不良性の全然ないと云ふことが、果してその少女の精神的健康を、或は道德的高尙さを證明する所以になるとは輕率に斷言し得ないのである。人間の心理はあまりにも複雜微妙なものである。とにかく、惠子の生々とした不良性がその自然性の故に、この作をして「若い人」の間に人氣あらしめてゐるのであらう。

惠子が女の娼婦性の缺陷と魅力とを代表するものならば、橋本は家婦性の缺陷と魅力とを代表するものであらう。その中間に立つて間崎が肉感的には惠子に牽かされ、精神的には橋本にリードせられ、あちこち「迷ひ箸」してゐるのはあまり慾張つてゐるにもせよ、男性の自然として同情すべきものもないではないかも知れない。併し兩方の女からこつき廻されて面喰つてゐるマゾヒスト振りは正に現代知識階級の代表であつて、これまたこの作をして現今の「若い人」の間に人氣あらしめてゐる所以の一つであらう。

×

最後に、私は何故に、嘗てあれほど完全にタブー（神聖にして忌まはしきもの）であつた處女性が、近代に入るに從つて財寶視せられるに至つたかと云ふことに一考を費して見たい。これは併し、單に思辨的な方法で結論を導き出して見ても仕方のない問題であるが、これを完全に調査するには生理學的、社會學的、經濟學的など綜合的な研究方法に待たねばならないが、さう云ふことは多くの方面の學徒の理解ある協力を待たねばならないことで、一朝一夕に爲し遂げ得べきことではない。我々が只今思辨的に考察して差支へない限りを盡して見るならば、處女性のタブーは、タブーそれ自身に尊敬感が內包せられてあるので、その尊敬感が嫌惡感から遊離して獨立存在となり得べき可能性があると云ふことだけは何人も否定し得ないところであらう。一切の現象は文明の發展と共にその綜合性を失つて分化して行くのが必然的な過程であるからである。たゞこの場合、分化した嫌惡感の行衛はどうなつたかと云ふことが問題だ。それは無意識裡に抑壓せられて一層の根強い反撥力となつてゐるのではあるまいか。

また第二に、我々の倫理觀の發展――と云つても我等は必ずしも道德價値觀の進步を意味するのではない――

のため、に處女性の廢棄を或る第三者に委すると云ふことと並びに第三者がそれを引受けると云ふことに、嫌惡を感ずるやうになつたと云ふことは極めて自然なことでなければならないと思ふ。

第三に、一見生理的に血の純粹を尊重する個人主義の發展をその理由として擧げることが出來よう。我々は他人のお古では滿足しない。自分の配偶者は完全に自分との交渉のみに終始したものでなければならないと云ふのは、個人主義の發達した現代人の要求としては尤であるが、フロイドの言葉を假りれば、個人が妻に對する所有權をその過去にまで及ぼさうとするのは尤であるが、併し血の純粹は昔時に於いても必ずしも亂されたのではなかつたのだ。破瓜者はたゞ膜の破棄のみがその任務であつて、射精は許されてなかつたからである。それ故にこの場合の個人主義は血の純粹と云ふ生理上の問題ではなく、やはり心理的な問題であらう。心理的に個人はその配偶を全的に、過去にまで溯つて所有しなければならない。それ故にこれは或は、その外觀の如何に立派であるに拘らず、內實は現代人の幼兒的退行性を意味するものであるかも知れない。幼兒時代に空想せられたる「處女なる母親」を獨占せんとしてなし遂げ得なかつた夢を、成人後にその妻に於いて實現せんとするものであるかも知れない。が、只今はとにかく斷定を與へず、假定して學界に問題を提供するに止めておく。（完）

逃げ込み（防禦）とイデオロギー
―萩原朔太郎氏の不安神經症―

延島英一

一、女の洋装の攻撃

二月十八日の東京朝日新聞「槍騎兵」欄に「女の洋裝」と題する萩原朔太郎氏の文章が載つた。その大意は次のごとくである。

洋服を着た男が、洋裝の女を非國民呼ばはりすることの矛盾は、しばしば人々に指摘される。だがその矛盾の心理を解剖した人は一人もない。男の洋服は兵士の軍服と同じく實用品であるが、女の洋裝はまだ實用品になつてゐない。女の洋裝は一種の見榮であり、ハイカラ意識の産物である。國粹主義者が怒るのは、洋裝が悪いといふのではなく、西洋崇拜の心根が悪いといふのである。彼等は小學生や女學生の洋裝は決して批難しない。バスの女車掌や、エレベーターガールの洋裝については沈默を守つてゐる。彼等が批難するのは、實務の必要がないのに、おしやれのために洋裝する女に限られてゐる。この一つの心理は、今の日本のあらゆる文明原理を説明するものである。

二、女性の洋裝と國民

この萩原氏の論旨に對して、高倉共平氏が「現代新聞批判」の三月一日號

現代羽衣文學

不老院泉主

昭和十二年の春頃に日本に輸入せられたオーースタリーの分析學的映畫『春の調べ』（原名『エクスタシー』法悅）は、云はゞ現代化せられたる羽衣傳説の文藝映畫であつた。精しい筋は忘れたが、女主人公が馬に乘つて水邊に來り脱衣して衣類を馬背にく丶りつけて水浴してゐる間に馬は何かに驚いて何處へともなく驅け去つて了ふ。女主人公は慌てて、勿論全裸のまゝで、それを追蒐けて森林中に至り、

で正面から反駁を加へてゐる。高倉氏は、小學校や女學校に洋裝で通學し、職業婦人として洋裝で活動してゐる現代日本の女性にとつては、洋裝こそ生活に必須のものであつて、和裝はむしろおしやれと見榮の產物だといふのである。

次いで高倉氏は萩原氏の洋裝婦人非國民說に對して、次のやうにいつてゐる。

畏れ多い例だが、現代日本の國民の中、昭憲皇太后、皇太后、皇后三陛下の御洋裝でないお姿を拜した者が一體幾人あるか？　また各宮妃殿下の御寫眞で、洋裝を召さずにお撮りあそばされたものを我々は一體幾枚拜せるか？

現代の日本國民の中には、洋裝の女性といふものを皇后陛下の御寫眞ではじめて見た者が頗る多いのである。そして現代の日本國民には、皇后陛下の御姿を御洋裝でなく御想ひ申し上げることは絕對に不可能である。

この高倉氏の反駁は、精神分析の立場から見て關心に値ひする點がある。日本國民は滿六歲になれば、誰でも必らず洋裝の皇后陛下の御眞影を學校で嚴肅に禮拜し奉る。子供の大部分は、學校に行かぬ中からも、大抵皇后陛下の洋裝の御姿を繪本などで拜してゐる。そして彼等は、皆この皇后陛下こそ、國民のひとしく仰ぎ奉る最高の女性、共に慕ひまつる理想の婦人、國民が生涯その御慈しみを蒙り、慕ひ、懷き、侍づき奉る御方と膽に銘じて信じてゐるのである。

三、洋裝に對する反感の動機

そこに馬を留めて手綱を手にしてゐる男主人公に相遇し、それから物語りは發展すると云ふ趣向であつた。たゞ女主人公は兩親の命で一度年齡のかけ離れた男と婚し、男に元氣なきため別れてゐてその間に右の場面を生ずるのであつた。處女ではないかも知れぬが、とにかく女との關係の生ずる契機を象徵的に表はしてるのだ。本誌の表紙に揭げたのはその女主人公が水浴中の姿であり、口繪裏面に揭げたるは、女主人が男主人公に相遇してゐる美しい場面である。二人の間に初めて性的な交涉が成立つ場面は極めて象徵的に、白百合の蕾からバラの花瓣の中に水滴がポタリと落入るところを以て表現せられてあつた。

この映畫の筋に於いて一つの新しい技法は、女主人がその衣裳（羽衣）を喪失する仕方である。傳說に於いては（高木氏の精しい研究に見られるやうに）男主人公が秘かに羽衣を奪ふのであるが、この映畫に於いては偶然それを拾ふことになつてゐる。而もその拾ひ方が彼自身その羽衣に近付いて行くのではなく、羽衣

ところが萩原氏によると、いはゆる國粋主義者といふ連中は、洋裝の女を見るとすぐ非國民と感じ、國賊と思ひ込まざるを得ないらしい。彼等のこの洋裝に對する强烈な憎惡は一體どこから來るのであらうか？

萩原氏は、それは西洋崇拜に對する反感、見榮やハイカラ意識に對する憎惡だと說明し、「この一つの心理は、今の日本のあらゆる文明原理を說明してゐる」といふ。しかし婦人の洋裝には皇后陛下の御姿ではじめて接し、國母の觀念と洋裝とは切離せないのが、日本國民の殆んど全部が全部の心的狀態である。そして皇后陛下は、國民が幼兒時代に、母を除いては最も深くその心に印象を受け奉つてゐる唯一の女性であらせられるのである。

精神分析は、幼兒時代に受けた强烈な刺戟、力强い印象は、その人の心內に於て無意識のコムプレクスとなり、成人後の心的傾向を支配するといふことを立證した。だから萩原氏等自稱國粋主義者が、洋裝の女性を見れば直ちに敵意を感じ、非國民、國賊と思はずにはゐられぬとすれば、我々は次の質問を彼等に發せずにはゐられないのである。

諸君等の幼年時代に最も深い、强い、烈しい印象を得た洋裝の婦人といへば、皇后陛下を措き奉つてはほかにない筈である。しかりとすれば、諸君が洋裝の婦人に敵意を感じ、彼女等を仇敵視せざるを得ぬといふその心的傾向は、諸君がはじめて皇后陛下の御姿を拜した時得た印象と何か根本的に繫りがあるに違ひない。諸君は西洋崇拜が惡いとか、ハイカラ意識がいけないとか、非實用的だとかいつて洋裝を批難するが、その點で諸君の言分より高倉氏の言分が正しいことは常識ある者には明白である。從つて諸君のさういふ洋裝排斥の理由は後からつけた理窟（合理化）に過ぎない。

の方から彼の前に、馬に乘つて、運ばれて來ると云ふのであるから、觀客は男主人公に對して何ら道德的反感や嫉妬心を起さないで濟むやうになつてゐる。そこにこの映畫の現代的な抑壓性が見られるわけである。謠曲『羽衣』よりも一層自然らしく見えて、巧みである。殊に馬と云ふ象徵を用ゐたのは甚だ氣が利いてゐると云ふべきである。

この映畫に就いてはまた一つの面白い後日譚がある、女主人公に扮したヘディ・キースラー孃と云ふはヴィンの富有な銀行家の愛孃で、一九三二年未婚時代にプラーグに於いて製作したものであつた。さうしてこの映畫は藝術的價値の優秀の故に賞を獲得したものであると云ふ。然るにその後に至つて、彼女はオースタリのヒルテンベルグに於ける軍需工業會社の社長マンドル氏の夫人となつた。その夫君が、既に世界中に擴がつてゐたこの映畫のフィルムやスティール寫眞を懸命になつて買集め、既に二十八萬ドルを消費し、なほそのために追加豫算の計上を辭さないと云ふ次第であつたさうであ

我々はそんな理窟づけに骨を折るよりも、諸君が幼兒時代に兩陛下の御眞影を拜していかなる印象を得たか、それを先づ正直に語られんことを望むものである。

四、いはゆる觀念過剩症

高倉共平氏は、萩原氏の洋裝女性に對する反感は階級的反感であつて、萩原氏はこの階級的反感を國粹主義の衣裳を借りて露出させたのだと斷定し、萩原氏を附燒刄の國粹主義者だとやつつけてゐる。

この高倉氏の見方も一理ないとはいへない。だが問題の「女の洋裝」の前に「槍騎兵」欄に掲載された萩原氏の「觀念過剩症」(二月十五日)、「大衆の無邪氣さ」(二月二日)などを併せ讀んで見ると、萩原朔太郎といふ人にそんな深い内的過程があると豫期するのは間違ひであることが分るのである。

「大衆の無邪氣さ」といふ文章は、明治神宮に參拜して「大衆と僕等インテリ階級との距離懸隔に驚いた」ことを記したものである。

日本歷史に見る大和民族の特色は、この無邪氣らしさ、子供らしさ、天眞爛漫さといふ點にあつた。たゞ僕等文學者とインテリ階級だけが、この無邪氣さを失ふやうに誤つた文化教養によつて傷つけられた。

「觀念過剩症」では次のごとくいつてゐる。

政治に於ても文藝に於ても、現實を無視したイデーの觀念過剩症は、常に最も危險である。明治以來の日本文學が今日清算されつゝあるのも、やはりその觀念過剩症の爲であるが、最近ではむしろ或る一部の日本の爲政家が、その同じ病氣にとり憑かれてゐるやうに思はれる。民衆の現實生活

る。それは自分の愛妻の全裸の寫眞が世界中の人の目に曝らされるに忍びず、それは專ら自分の眼にのみ許さるべきものでなければならないと云ふ理由に因るのださうである。マンドル氏がこのやうないさゝか偏執狂的な行動に出るやうになつた心理契機の中には、やはり精神的な處女性を、或は視覺上の處女性を、その妻に期待したことが重大な要素となつてゐなければならない。果してさうとすれば、この映畫の内容と彼の心理との間には必然的な關係があるやうに思はれる。因みに、この記事の材料は昭和十二年新年號『カレント・オヴ・ザ・ワールド』誌に依つたもので、二葉の寫眞も同社から借用したことをこゝに斷つて感謝の意を表しておく。

天女丸の話

江戸時代の戯作者として有名な式亭三馬はその本業たる文筆の傍、賣藥化粧品の製造販賣をもやつてゐて、「天女丸」と云ふ產兒調節劑を製造販賣してゐたと云ふことである。(佐藤紅霞氏著『貞操帶秘

から遊離した觀念政治——民衆の感じてる事、惱んでる事を無關心に無視してイデーに盲進するやうな政治——は、決してよい政治ではないだらう。

以上二つの拔萃だけでは、萩原朔太郎氏が何をいつてゐるのかはよく分らない。だが「女の洋裝」の中で「女の洋裝は、今日まだ實用品になつてゐない。彼女等はそれを一種の見榮から、ハイカラ意識から着てゐるのである」といふ句に接すると、それが皆女の洋裝よりむしろ遙かに萩原氏等の作る詩や文學に該當する言葉であることがよく分るのである。

五、不安の轉嫁と別自我

「現實を無視した觀念過剩症は、常に最も危險である」といふ言葉が、文藝にとつて危險だといふ風に使はれてゐるのも面白い。實際は文藝よりも、御本人にとつてそれは一番「常に最も危險」なのである。

「女の洋裝」の「この矛盾の心理を解剖した人は一人もない」といふ句は、讀者に滑稽と憐憫の情を起させる。これは萩原氏の不安「觀念過剩症」が書かせた言葉である。彼は彼の「觀念詩」に比すれば遙かに實用的、大衆的な洋裝女郎國賊論に先鞭をつけたやうな顏をすることによつて、自分が非國民、非國粹主義者でなかつたことを證明したかつたのである。すなはち女の洋裝を攻擊するやうな風をして、彼は自分の防禦を圖つてゐるのである。そして萩原氏が洋裝の女を攻擊の對象に選んだのは、一つにはそれが弱くてどこからも尻を持つて來られる恐れがないからなのである。

「槍騎兵」に出た三つの文章で判斷すれば、萩原朔太郎といふ男は、俗にいふ鼻持のならぬ野郎である。自分は詰らぬ氣取つた詩など作つて、無邪氣さ

聞』に依る。）

その天女丸なるもの丶成分や效果に就いては私は何も知らないが、それにしても產兒調節劑に名づくるに「天女丸」の稱を以てすることは、なか〳〵面白い思ひつきと申さねばならぬ。つまり、子を生むなど丶云ふことは、當然性的交涉を豫想することであるから、あまりにも人間的なことでなければならない。天女は性的交涉などは持たない筈であるから（白鳥傳說の天女は墮天女だからこの限りでないが）從つて子も持たないわけである。そこで產兒制限をする女は自分が一種の子殺しをすると云ふ罪障感と劣等感とを帳消しにするために、自分を天女に同一化することが出來れば甚だ幸だと云ふ願望を持つてゐたことであらう。その無意識心理にうまくつけ入らうとしたのが商賣に拔目のない、流石に文士的な勘の銳い式亭三馬の考案であつたのであらう。

羽衣と戾橋

羽衣傳說と戾橋傳說との間には何か深

を失つてしまつたといへばいゝところを、「誤つた文化教養によつて傷つけられた僕等文學者とインテリ階級」などゝいふ言葉を用ひて、下らぬ氣取つた詩を作つてゐたのは自分ではないやうな顔、少くとも自分だけではないやうな顔をする。

「彼等モダン支那人は、現實を無視し、西洋心酔の觀念過剰症に取り憑かれ、光輝ある文化や傳統さへも輕辱し、自ら亡國の因を招いた」などゝ鹿爪らしい言葉を並べて、自分にはそんなことは嘗つてなかつたやうな顔をしてゐる。この言葉は、萩原氏がこの御時勢で自分が人に指摘されたらどうしやうかと苦に惱んでゐることを、モダン支那人といふ影法師（別自我）をつくり、それに投げかけた氣休めに過ぎないのである。

六、逃げ込みのための「主義」

私が高倉共平氏の萩原氏反駁を援用してこゝに稍詳しく「エセ國粹主義」の解剖を行つたのは、人間が現實の不都合を避けたがる時、いかに高次なイデオロギイに逃げ込むことが多いかの例にするためである。

萩原氏の主張も文章面だけ讀めば、國を憂へ、西洋心酔を慨し、國粹精神の發揮に邁進し、日本的文明原理の闡明にひたすら努めてゐるやうに見える。だが少し注意して讀むと、萩原氏があるひは攻撃し、あるひは强調してゐる點は、結局同氏が他から攻撃され、批難されはせぬかと恐れ、苦に惱んでゐる點に關することだけだといふことが分るのである。

だから萩原氏の國粹主義は、極めて不安神經症的である。典型的に反動形成的である。その主張し、强調することは一種の逃げ込みであり防禦であつ

い關係がありさうな氣がしてならない。

戻橋の話と云ふのは、渡邊の綱が羅生門で鬼の腕を切り取つて自宅に引籠つてその腕を大切に守つてゐると、或る夜、綱の育ての叔母が來訪してその珍らしい腕を一見させてくれと云ひ、一旦は斷つたが、是非にとせがまれ已むなく白木の箱の蓋をとつて一見させると、その叔母は忽ち鬼女となつてその腕を取戻し、破風を蹴破つて昇天したと云ふ筋である。腕をペニスの象徵と公式的に解することが許されるならば、それを切取られ（去勢せられて（羽衣の方では衣を奪はれて）再びそれを取戻さずば已まないとの一念已み難く、遂にそれを取戻すと昇天して行くと云ふのであるから、心理的實質に於いては極めて酷似したものである。何人かこれに就いて示敎せられるば幸甚である。

鬼の褌の昇天

私はかつて大津繪に鬼が入浴中に褌が雲に載つて昇天して了つて鬼は大いに面喰つてゐると云ふ圖を見たことがある。

て、さういふ逃げ込みによつて不安の解消をはかつてゐるのである。この萩原氏のやうな例は極端だが、しかし主義とかイデオロギイとかいふものが人世で珍重されるのは、それが大抵逃げ込み（防禦）に便利にできてゐるといふ理由が大いにあることを我々は注意せねばならぬのである。

新映畫「東洋平和の道」を觀て

三月三十日、帝劇に試寫を見る。これは一面北支名勝案內映畫であると共に、他面に於いて日支提契の宣傳畫である。主人公が戰禍を避けて北支をあちこち旅行し廻る。その間、大同石佛や、萬里の長城や明の十三陵の石獸や北京の萬壽山などを見物して夢心地に醉ふことが出來る。宣傳はあまり露骨でなく、これならば第三國人が見ても反感は起すまいと思つた。併し萬壽山の修築に就いて西太后を批評する條は滿洲國から抗議が出たと云ふことだが、如何にも尤な次第だ。これはいさゝか失言の形だ。萬壽山の修築は國家的にはどんな罪過があつたにしても、美術史的には大きな功德を遺してゐるものだ。まるでこの世の極樂のやうに胎內的な空氣ではないだらうか。彫刻としては大同の石佛も大したものだが、十三陵の石獸の方が一層優秀な出來のやうに私には思はれた。とにかくかう云ふ美術品の鑑賞が居ながら出來るだけでもこの映畫は一覽の價値がある。たゞ、この上に映畫文藝としての筋らしい筋があつたら、一層この作の價値は高められるのであらうが、筋があまり簡單に過ぎるのが缺點といへば缺點だ。（一記者）

これは羽衣傳說のカリカツリーレンであるやうな氣がしてならない。天女と鬼、男女の別こそあれ、共に天界の超人、鬼は、雷神としての鬼のことであらうと思ふ。それが褌を失ふと云ふのだから、天女が腰卷（羽衣）を失ふと云ふのと同じではあるが、併し天女は腰卷を奪はれて處女性を失ふであらうが、鬼は褌を失つても童貞性を失つてもその通力を並せ失ふと云ふことは考へられぬ。否、愈々益々その通力を發揮しさうな氣がする。何となれば、羽衣は處女性タブーの象徵であるが、鬼の褌は本能力への抑壓の象徵に外ならぬからだ。雷樣が臍をとる話のエロチシズムは、私いづれその內、分析研究をまとめて發表するであらう。

氷河の花嫁

結婚をいとうて氷河の中に投身し己が處女性を不朽化すると云ふ多分北歐の傳說を、私かつて何處かで讀んだやうな氣がする。西洋の竹取物語とも云ふべきものであらう。これに就いて誰か詳しい報

（八三頁下段へ續く）

精神分析學入門講話（三）

シグムント・フロイド（K・O・生譯）

同樣に諸君にとつて思ひも寄らぬことは、精神分析のこの第一の大膽な學說がこれから述べる第二の大膽な學說と、如何に內的に密接な關係があるかと云ふことである。この第二の命題を精神分析はその研究結論の一つとして聲明したのであるが、その命題の中には、つまり本能的亢奮（それは狹い意味に於いても、廣い意味に於いても、性的なものとしてのみ說明することが出來る）なるものが神經病及び精神病の原因構成の中に異常に大きな、これまでは未だ曾て十分に評量せられたことのないほどに重い役割を果してゐると云ふ主張も含まれてゐるのだ。否、それのみに止まらない。この同じ性的亢奮がやはり、人間精神の最高の文化的、藝術的、並びに社會的業績に對して馬鹿にならない寄與をなしてゐると云ふことも主張せられるのである。

私の經驗によれば、精神分析的硏究のこの結論に對する反感は、分析法が逢着する反感の最も重大な根源である。それに對する我々の方の說明如何と問はれるならば、かく答へよう。我々の信ずるところでは、文明とは生活の必要に迫まられ本能の滿足を犧牲にして作られたものであつて、さうしてその文明は新たに人間社會に登場して來た個人が全體の福祉のために自分の本能滿足の犧牲を反復することに依つて、常に新たに作り加へられて行くのである。かくの如くに利用せられる本能力の內には、性的亢奮の本能力が重要な役割を果してゐるのである。卽ち、その場合に性的亢奮の力は昇華せられてゐるのである。換言すれば、その性的目的から離脫して社會的により高級なる、既に性的ならざる目的の方に轉向せしめられてゐるのである。併しながらこの構築は脆弱である。性本能の制御はなかなか完全には行かない。文明的な仕事に携る人々に於いても、その性本能が文明的

に利用せられるのを肯んぜざる危險が存してゐる。性本能が解放せられてそれの本來の目的に復歸せんとすることほど、社會にとつてその文化の危機を感ずることはない。このやうに、社會はその基礎に於けるこの急所を脅かされることを好まない。社會は性本能の威力が承認せられ、各個人に對する性生活の重要さの闡明せられることに何らの關心を示さない。社會はむしろ、教育的意圖の下に、かゝる分野の全體から注意をそらせるやうな方法を講じたのである。そのために社會は精神分析的研究の結論と云はれるものに對して我慢がならないのである。美的には堪え難い、道德的には許し難い、或は危險なものだとの烙印を押しつけることを最も好んだのである。併しながらそのやうな批難を以てしては、科學的研究の僭越ながら客觀的業績に對しては一指をだに加へることは出來ないのである。公明正大な反對をするなら、知力の分野に出て來なければならない。然るに人間と云ふものは自分の好まぬものは正しくないと考へる傾きがあるので、それに對してケチをつけることも極めて容易である。このやうにして社會はその好まざるものを正しからざるものとなし、精神分析の眞理に對して形式論理的な、外面的な理窟で反對してゐるのであるが、その理窟は本能感情的な源泉から出てゐるのであつて、いろいろ反駁を試みても頑としてこれ等の抗議に固執してゐるのである。

　併しながら、諸君よ、我々はこのやうな人々に反對せられる種々の命題を確立するに際して、何ら曲學阿世するところなかつたと斷言することが出來る。我々はたゞ一つの事實――孜々たる勞作の結果認識したと我々の信じてゐる一事實――を云つておきたいと思つた。我々はまた、そのやうな實際的見地から學的研究に干渉して來るのを絕對的に拒否する權利を今や要求する。そのやうな見地からして我々に指圖する心配が果して正しいか否かを調べるのは、それから後でもよいと思ふ。

　諸君が精神分析を研究せられるに就いて直面せられる困難の內、以上述べたところはその一二に過ぎない。始めに當つてこれだけ云つておけば、まづ十分であらう。これだけ聽いて參つて了はれないならば、講義を續けて行きたいと思ふ。(此章終)

精神分析學語彙 (三二)

一、外出恐怖症 (Agoraphobie) 打開けたる場所、狹い、或は廣い街路上などに出ると、當該患者の個人的條件に基き不安に襲はれると云ふ。外出恐怖症患者は重症の場合には何人かに附添つて貰つたり、或は街上や打開けた場所を避けることに

依つて、この不安に對して自己防衞をしようとする。最も重症の場合には、抑々家を出ることさへ不可能になる。附添人は誰でもいゝと云ふ場合もあるが、嚴重にその選擇範圍の限定せられてゐる場合もある。後者の場合に於いては、それは本人にとつて近しく親しい人（例へば、夫、妻、子供、兄弟姉妹、兩親）である。附添人が居なくなると云ふやうな事情になると、不安は大抵最も甚だしくなり、屢々失神を伴ひ、その絶頂に於いては死ぬに相違ないと云ふやうな激しい恐怖を感ずるやうになる。

臨床上、外出恐怖症は不安ヒステリーの一種として數へられる。街路上又は戸外に於いては誘惑が待伏せしてゐると云ふのが、この病氣の條件である。この誘惑は不安の信號に依つて防禦せられる。その信號は危險な場所を避けるやうにと强ふるのである。不安信號が警告する危險それ自身は幼兒的なものであり、大抵は去勢又はそれに等しいものである。ヘレーネ・ドイチは附添人の役割を仔細に研究し、それがエディポス・コムプレクスに於いて憎まれた兩親の何れか片方であると云ふことを發見した。患者のお伴をしなければならないと云ふことは、附添人にとつては非常に不快であり苦痛である場合があるから、その事は一方に於いては患者が附添人に對する憎惡又は加虐慾の表現であり、他方に於いては、附添人の世話や介抱を助勢し、患者に對する憎惡を抑制し、その際附添つてゐてくれないと云ふことは愛情の喪失として感ぜられ、憎惡を我慢のならないものにまで强める。附添人に對する愛憎並存の葛藤は强迫神經症の相反並存葛藤と酷似してゐるので、外出恐怖症は臨床上ではヒステリーから强迫神經症への橋渡しとなるのである。

（ヘレーネ・ドイチ稿「外出恐怖症の源因」參照。）

一、アクメ（Akme）—語義としては、切點又は頂點の意。性行爲に於ける快樂の頂點をアクメと呼ぶのである。性器前期の本能の流れはつまりアクメのないのがその特徴であると云ふことが出來る。

一、行爲（Akt）—精神的裝置の動作にして、その中に對象への志向が首尾よくなされるものを心理的行爲と呼ぶ。精神分析以前には總て意識的の心理過程はこれを心理的行爲と呼んだ。フロイドの研究以來、完全に心理的行爲と呼ばれるべきものゝ數は非常に增加した。何となれば、以前の考へ方に反し、夢、行り損ひ、神經症候、なども心理的行爲と呼ばれることになつたからである。それ等も亦、精神分析に依つて十分に意味のあるものだと云ふことが分つたからである。

一、行動（Aktion）— 一つの所業（Handlung）又は所業群にしてそこに無意識動機が異常に判然と認識されるものを無意識的行動と呼ぶ。そのやうな所業は現實的關係への洞察がありながら、或はそれへの顧慮なしに、なされる。それ等の行動に本人に依つて一見現實的らしい動機から説明せられることも稀ではない。これを「理窟付け」と云ふ。また分析治療の間に分析者が思ひ出を語れと云ふに對しそれの代りに轉嫁を以て反應するのをも、行動と呼ぶ。（「行動化」の條參照。）

一、能動・受動（Aktiv-passiv）―心理學的規準としては、男性的とは能動的本能目的を目指すものであり、女性的とは受動的本能に向ふものである。それ故に能動受動の對立は、男性女性の對立に相當する。能動か受動かの規準はたゞ本能がその目的を果す仕方にあるのであつて、本能はそれ自身は常に能動的である。（能動性の條參照。）

一、能動法（Aktive Technik）―フェレンチーは分析の能動的態度を擴大して戒律と禁斷とを組織的に施すやうにした。それはつまり、今まで抑壓せられてゐた衝動を本能的亢奮として完全に意識化させ體驗させると云ふ意味である。この新方法に對して彼自身「能動法」の名稱を與へた。彼の著『精神分析原論』("Baustein zur Psychoanalyse" Bd. II, S. 68) に出てゐる一例を紹介するならば、或る婦人患者が分析中に或る街上の流し歌を想起したので、本人が非常に抵抗したに拘らずこれを想起せしめ、本文や曲のみならず遂には身振までも、嘗て姉のところで見たまゝを完全に再現せしめることに幾時間かの後に成功した。やがて本人が段々それを再現し、自分で演じて見ることに面白味を感ずるやうになつた時に、分析者は再びそれを禁じてしまつた。患者の症候への分析的觀察はこの患者に就いてはこのやうな方法に依つて非常に促進せられ、そのためそれ以前にはかつて想起せられた事のない記憶が言葉に出るやうになつた。

能動技法は自我の多くの抵抗を誘發し、「行動化」への好機會を供するやうになり易いから、フェレンチー自身によつて大部分は再び放棄せられ、たゞ補足的に利用せられるに過ぎないやうになつた。（未完）

――（七九頁下段より續く）――

告を與へらるれば幸甚である。日本の現代某作家（廣津和郎氏か）が『氷詰めの花嫁』と云ふ題の小説を書いてゐるのを見たことがある。多分、冷感症的傾向の女の話であつたやうに記憶する。

眞珠と處女

川端龍子の作に「眞珠」と題する二曲一双の大作がある。海女が眞珠をとる圖柄であるが、明かに處女性の象徴となつてゐる。一曲の方では一海女が佛像のやうに端座して、臍の下に眞珠の一粒を恭々しく指間に挾んで持してゐるポーズは相當明白に眞珠の象徴的意義を暗示してゐるものとして私は記憶してゐる。菊池寛の通俗小説に『眞珠夫人』と云ふのがあつた、その名は女主人公の永遠の處女性を象徴してゐるやうであつた。筋をきいたところでは、この作は外國作の飜案のやうな臭ひがするやうに思はれた。

内外彙報

ホワイト博士の死

米國分析學界の重鎭としてわが國にもその名を傳へられてゐたヰリアム・ホワイト博士(Dr. W. A. White)は一九三七年三月七日、ワシントンに於いて長逝した。精神病學出身の人であるが、精神分析を病院內で實施して十餘年に亙つてゐた。興味の廣汎な人で史學、哲學、社會學、生物學、人類學等も博士が讀書の範圍であつた。ジェリフ博士と共に米國の雜誌『精神分析評論』を創刊し、また米國精神分析學會を創立して自ら長くその會長の職にあつた。わが國にはその文獻はあまり多く紹介せられなかつたが、かつて久野豐彥氏に依つてその通俗書『人は何故に失敗するか』が飜譯せられ、偕成社から出版せられ、本誌上でもそれを紹介批評したことがあつた。

『國際精神分析學雜誌』 昨年度第三册

一、『現代精神分析學的神經病學說に於ける外傷の概念』オットー・フェニヘル稿。
一、『犯罪的精神病者のリビドー構成』フリッツ・ウイッテルス稿。
一、『街上不安症に於ける轉位の役割』アニ・カタン・アンゲル稿。
一、『臨場恐怖及びその他の神經症的不安狀態に就いて』エドアルト・ヒッチマン稿。
一、『女性に於ける超自我構成の道程』エディト・ヤコブスゾーン稿。
一、『祟物症に就いて』ミカエル・バリント稿。
一、『少年犯の一場合の分析觀察』キイルホルツ稿。
一、『慢性アルコール患者の治療』ロバート・ナイト稿。
一、新刊批評數件。

『精神分析季刊誌』 昨年度第四册

一、『汚穢感の空想的要素』ロレンス・クビー稿。
一、『精神分析治療の實驗的調査』コフシァロファ稿。
一、『ヂオヴンニ・セガンチーニの精神分析』カール・アブラハム稿(ドロテア・タウンシェンド・カリウ譯)
一、『無意味なる落書きの分析實驗』エリクスン稿。
一、『兒童期の不安』ヰリアム・バレット稿。
一、新刊批評數件。
一、分析學關係文獻紹介。(本誌の內容も獨英兩文で紹介せられてある。)

『シカゴ分析學研究所報』

一九三二年十月一日より一九三七年九月三十日に至るまでの米國シカゴ精神分析學研究所の事業報告及び案內であつて、所長アレキサンダ博士編纂のパンフレットである。內容は(一)講

習案内（二）研究報告（三）他の方面との協力事業報告（四）諸事業の統計報告（五）會計、報告の諸項に分れてゐる。

最近國內關係時事

▼『孤獨』ジルボールグ稿――『カレント・オウ・ザ・ワールド』四月號。

▼『政治の侵略・フロイド逮捕事件』安田德太郎稿――都新聞三月二十日。

▼『女性の自己戀愛症』太田三郎稿――『文藝春秋』四月號。

▼『ボッティチェリの春』岩倉具榮稿――『オール女性』四月號。

▼『支那秘譚・明笛魔曲』高橋鐵作――『オール讀物』五月號。

▼『精神分析醫のノート』木村廉吉稿――『臨床醫學』三月號。

▼『買春心理の分析處置』大槻憲二稿――『人生創造』四月號。

▼『フロイドの逮捕事件』大槻憲二稿――信濃毎日、大分新聞北海タイムス各紙三月二十四日。

▼『健康法としての分析療法』及び『小心恐人症者との分析問答』大槻憲二稿――『人生創造』四月五日發行臨時增刊。

▼『春愁の精神分析』大槻憲二談――『都新聞』家庭欄、四月七日。

▼本誌三月發行正誌『精神分析』及び四月發行、パンフレット『精神分析』內容に關してはそれ〴〵の廣告面を參照ありたし

本研究所研究會例會

三月例會は二十三日（水）午後五時半からアメリカン・ベーカリ階上で催された。食前大槻氏は本誌六巻二號所載フロイドの入門講話を朗讀註釋せられた。本夕研究主題は處女性問題であつたが、宮田戊子氏が一茶の性格研究を發表せられることになつたので、食後新來者としての宮田氏の紹介が終つて後に、同氏の談話があつた。一茶は一般にはたゞ善良愚直な人物のやうに思はれ、その繼母や異母弟が奸惡なやうに（一茶自身の記述を鵜飲みにして）信ぜられてゐたが、彼自身の行動とその矛盾とを仔細に研究して見ると、甚だ信じ難いものがある。彼の臆病なくせに過激な性格に就いては、富田義介氏これを死の本能より說明せんとし、高橋氏はエディポス・コムプレクスから說明せんとせられた。倉橋久雄氏も一茶の弟がわざ〴〵江戸まで出掛けて兄に禮を盡してゐることを附言せられた。とにかく一茶觀は今後の宮田氏の研究に依つて恐らく歴史的變革を來すことであらう。それは丁度北山隆氏の漱石論の歴史的意義と同じであらう。

續いて大槻氏は本號巻頭所載ベルグラー稿中の二小說の引用部分を朗讀せられ處々に註釋を付せられ、二三の人々の質問に答へられた。時間の關係上、全部の研究には至らなかつたのは殘念であつた。

出席者は右言及諸氏の他に、立川玄一郎、秋山尙雄、吉田靜枝、大槻岐美、藤田由美、田中虎男、北垣照雄、大久保眞太郎、長崎文治の諸氏であつた。なほ田內長太郎、塚崎茂明、土屋秋實、內藤梅子、宮田齊、小山良修の諸氏からは丁寧なる缺席挨拶があつた。

本研究所講習會例會

三月例會は八日夜、研究所にて催され、『分析戀愛論』中の『ナルチスムス概論』第二論文『依憑型と自己戀慕型』を精讀研究す。戀愛の二種の型は判然と確立せられてゐる。その後、高橋氏は自作『浦島になつた男』(水底妄想)を、土屋秋實氏は「砂漠の花園の分析」を、延島氏は「萩原朔太郎論」を、それ〲に朗讀して人々の批評を乞はれた。延島氏の論文は本號時評欄に發表せられてゐる。

出席者は、北山、北垣、高橋、延島、藤田、黒澤、塚崎、吳、倉橋、田中、土屋、大槻夫妻の諸氏であつた。

×

四月例會は四日夜、同所にて開かれ、前月の續論『理想我と自己戀慕』を精讀した。超自我とナルチスムスとの關係に就いて、フロイドは轉位關係を說いてゐる。また神經症に於ける理想我の役割を明かにしてゐる。朗讀後、延島氏の日本歷史論や高橋氏のロスの社會學の話があつた。

出席者は倉橋、塚崎、延島、藤田、吳、田中、大槻夫妻、高橋、北山、北垣の諸氏であつた。

研究所だより

▼フロイド博士檢擧の報傳はるや、篠原政雄、毛利一郎、瓶子喜己の諸氏始め在外會員諸賢から、懇篤なる見舞を頂きました。本研究所からも、直接フロイド博士に見舞を出しても到底手許に屆くまいと存じ、ベルグラー博士宛に手紙を出して問合せましたが、勿論まだ返事は來ません。ベルグラーもフロイド門下としてどんな目にあつてゐるか分りませんので、委細は不明です。何か分り次第誌上で報告します。

▼三月二十八日、名古屋醫科大學精神病學教室の堀要氏が來訪せられました。氏は杉田博士門下の逸材にて殊に小兒精神神經科に興味を持たれ、最近も「夜尿症の研究」や「神經症の生活逃避欲求に就て」などの好研究を發表せられ、本研究所にも寄贈の榮を得たが、何れ誌上で紹介の機會を持ちたいと思つてゐる。氏は臨床經驗をいろ〱披瀝せられて、精神病學と精神分析との提契の必要に就いて語られた。氏は近く渡獨せられる由にて、その事務準備のために上京せられたとの事であつた。學嚢を豐かにして健かに御歸朝の日を心からお待ち申上げる。

▼岩倉具榮氏令夫人は盲腸炎のために赤阪前田病院に入院せられたが、三月初め無事退院せられましたが、令妹濶子樣は心臟病のために三月中築地聖ルカ病院に入院せられ、四月八日遂に逝去せられました。濶子さんは、本誌にも屢々執筆せられ、讀者にも馴染深い方でしたが殘念なことです。心からお悔み申上げます。

▼田內長太郎氏夫人も、久しく御病氣で臥床せられてゐましたが、漸く快方に向はれ、田內氏も今後は續けて研究會に出席せられます由。

▼研究所は目下改築中にて、その間當分(約二ケ月)近所(區

内林町一五四番地）へ假移轉いたしましたが、移轉通知は出しません。郵便物は元のまゝでも來ます。

通信

近況一報

奥本島田

謹啓、偶數月發行の册子拜受致しました、學術雜誌は毎月頁數の多いものを發行するよりも、隔月にかういふ小册を發行して下さることは骨休めと、他には斯學研究心を繼續する上に適當なことだと思ひました。

×

私は二月十六日から三月三十一日まで大阪へ出張してゐましたので、精神分析學の研究はをろそかにしてゐましたが、都會へ來たのを幸に精神分析關係の著書をあさつてゐました。やうやくにして「精神分析入門」及び「愛の精神分析」、丸井氏の「精神分析療法」、久保氏「精神分析法」、大槻氏「精神分析讀本」などをさがし出しました。精神分析の本は最近では非常によく賣れるさうです、私も大阪の本屋を大分にさがしてやつと探しあてた位です。三月三十一日所定の日を終へて歸省しましたので、多少とも暇があるので、斯學の研究を續けます。

（四月二日）

（附　　錄）

Die Geschlechtskälte der Frau

Ihr Wesen und ihre Behandlung

von

Dr. Eduard Hitschmann und Dr. Emund Bergler

冷感症とその治療

ヒッチマン博士・ベルグラー博士・共著

高水力太郎譯

——（六）——

—目　次—

總てこれ等の婦人が外見的に男性的な態度を持つてゐると考へるならば、それは誤りであらう。種々な意味で、これ等の婦人は徹頭徹尾女性的な印象を與へるのである。男性化的願望は全然無意識的である。

二十三歳の婦人、結婚生活三年、その冷感症を自慰に辿つて行つた。幾年もの間彼女は一日に二十度も、たゞ兩脚を組合せて腰掛けたまゝで、オルガスムスに達する事が出來た。夫が近付いても彼女は亢奮することは出來なかつた。彼女はその夫をあまり高く買つてゐなかつた。併し交りに達する可能性なくして媚びを呈することが出來た時には、亢奮と濕潤とを覺えた。男に對する反感からして、彼女はその結婚以前は既に、その夫を少くとも一度は裏切つてやらうと決心してゐた。さうして實際その通りにやつてのけたが、その時には彼女は冷感であつた。彼女は窓から飛出さうとか、高壓電線を摑んで見ようとか、或はガス自殺をしようとか云ふ强迫觀念を持つた。

この患者に於いて分析中に非常に判然と觀察せられるのは、ペニス願望が放棄せられ、男性的傾向が斷念せられてゐると云ふことである。或る日その患者は、その當時既に回復しつゝあつたのであるが、次のやうな症候的な行爲をなした。即ち、彼女は自分の着物の下腹の眞中の邊に垂れ下がつてゐるバンド（當時は金色の條の這入つた革製のバンドが流行してゐた）を、丁度××の前のあたりを剪刀で切つた。また治療を受けてゐる間の彼女の夢にも、ペニスへの斷念の認識に於いて同じ方向を示したものが見えてゐる。例へば、（一）彼女は病院で、子宮の故障のために手術を受ける、それはペニスの如くワギナの中から隆起してゐる。（二）彼女は齒に塡物をして貰ふために齒醫者の許に行く。醫者は下顎から四五本の齒を拔きとる。患者は驚いて眼をあけて見上げると、それは分析者であつた。（ずつと以前の夢に於いては、患者は男の齒よりももつと大きな齒を誇りかに示すのであつた。）*

註* 精神分析の病歷中からこのやうな短い拔粹をすることは、分析者が分析の後に時々書き留めておく短い覺え書きに相當する。分析中に覺え書きをするのは不適當である。

神經症者は個々の器關をペニスの代償として過大に評價するものである。それは「下方より上方へ」の轉位に依るものであつて、鼻、眼などがこのやうな機能を引受けるのである。

第四章に報告せられてゐるB患者の場合に於いては、就中、眼がまたペニスの意義を帶びてゐるのである。

男は屢々生物學的必然として比較的大目に見られるが、女に對してはさうでない。處女出產の空想は「女は一人で

何事でも出來る」と云ふ方法をとつて築き上げられる。このやうにして人々は屢々、子供への女の願望が全然男に關係なしに立てられるのを見るのである。男はこのやうに生殖行爲にも、肉體上に閉出されるのである。

この種の病氣には、分析治療の見込は十分にある。

第三、エディポス定着型に去勢復讐型の附加したるもの。

この型には二つの無意識的な傾向が目立つ。卽ち、男性への復讐慾と、彼のペニスを暴力的に奪ひ取りたいとの慾望とである。

この型に屬する四十二歲の或る婦人患者、憂欝症と仕事の障害と自殺觀念その他のために分析を受けに來たのであるが、彼女の主張するところに依ると、一切の男子は不能症であると、かゝる主張はあまりに極端であると分析者が云ふと、患者は立ちどころに彼女が關係した男たちの名簿表を擧げた。總てこれ等の男たちは、二つの條件を具へてゐた。――不能であると共に、他方何らかの點で病氣であつた。分析して見て判つたところに依ると、彼女は本能的な正確さを以て、不能にして病氣なる男を選擇し、それと關係を結んだのであつて、彼等が不能であり病氣であると云ふことは、彼女の去勢への無意識的復讐心を滿たすものであつた。

これ等の婦人は意識的にも男性に對してさまざまな形で非常に大きな憤怒と攻擊慾とを持ち、男のことを引下げて物云ふことを好むのである。例へば或る婦人患者が街の一角に立ち、非常に繁華な交叉點を交通する人々に對して交通巡査が信號を與へるのを待つてゐる時に、彼女の前に立つてゐる男が巡査の信號に直ちに從はなかつたので、彼女はその男の背中を小刀で突刺してやりたい衝動を覺えた。この婦人の大好きな空想は、ヴヰン全體が空中に爆破してしまふことだ、さうなれば一切の男性が「くたばつてしまふ」からである。

さう云ふ加虐的な婦人たちが四肢を切斷せられた、或は何らかの點で病氣の男に對して好んで親切を盡すのは、右のやうな事情のためである。

第四章に於いて引合ひに出してある患者Bはトルラーの『ヒンケマン』(Tollers „Hinkemann")を讀んで非常に

感動を受けた。それは主人公が性器に於いて不具になつてゐたからである。

このやうな婦人等の無意識にとつては「傷ついた」男は去勢された男として考へられるのだ。他方に於いて、無意識的に自分自身の去勢の外傷は他人の去勢に依つて帳消しになるのだ。つまり、「發散(アブレアギーレン)」せられるのだ。このやうな婦人はとかく病人や、切斷手術を受けた者や、その他に惚込むやうになる。同じことはまたアーリアン民族の女たちのユダヤの男たちに對する偏好に於いて起ることが屢々である。ユダヤの男たちの割禮がアーリアン民族の女たちには去勢として感ぜられるのだ。

同樣なことはまた、攻擊的・冷感的のヒステリー女たちが受動的・女性的の弱い男を選ぶと云ふ事實に就いても云はれ得る。これ等の婦人たちはその心理の最深部に於いては、加虐的傾向ある男として無意識的に空想せられてゐる父親に執着してゐるのであるが、併し無意識的な罪障感からして、また意識的な警戒心からして、精力的・活動的な男を避けて、これを遇するには憎惡と輕蔑とを以てするのである。下積になつた母親の運命を自分自身も繰返して辿ると云ふことは、彼女等の肯んぜざるところである。*

註* バハオーフェンの『母權制度』(Bachofen. „Mutterrecht") に、「婦人を淫婦として引下げた時代の後に、男性的な戰爭好きのアマゾンの時代が來た」と說いてあるのを參照のこと。

一例を擧げれば三十歲の女、結婚生活七年間、神經質で極端な喫煙癖。夫と患者とは本人の性的冷感に惱んでゐる。彼女は何の說明もされずに結婚生活に這入つたが、結婚の始めには二三回は滿足を感じたやうに思ふ。併し今では何でもなくなつた。それどころか、××に對して非常な嫌惡を持つてをり、殆ど嘔吐を催さんばかりなので、中絕コイトスの後には手洗場に行つてそれを洗ひ落して來なければならないほどであつた。彼女は不眠症に惱み、不安の夢をよく見た。性的交涉のない結婚を願望してゐた。夕方によく寢床に行つて眠つたふりすることが屢々であつたが、それはさう云ふ行爲を回避するためであつた。彼女はその行爲の反復を拒んだ。彼女の姉は離婚になつてゐた。父親は患者の生れた時に、男の子であればよかつたと云つた話を幼い頃に聞いた。彼女の苛酷で野蠻な父親が思春期に彼女等の自慰してゐるのを發見した時、二人を睡眠袋の中にほり込んだ。自慰は決してオルガ

スムスに導きはしなかつた。その當時、父親は大袈裟な場面を演じ、兩兒を鞭で打擲し、そんなことをしてゐると病氣になると云つた。で、彼女は兩手を夜着の外に出し、決して再び自分の××に觸れることはなかつた。彼女の父は家庭全體を甚だ粗野に支配してゐたので、患者は夫として特に靜かな、忍耐强い、親切な男を選んだ。夫が始めて自分の乳房に觸れた時に、彼女は强い性的亢奮を覺えた。併しながら彼女の空想に於いては、自分が支配せられ壓伏せられることを望んでゐた。夫は自分を征服すべきである。自分は防禦すべきである。「もしもあなたが力づくで私を物にするやうならば!」と彼女は思つたが、無駄であつた。同時に彼女はその行爲を恥ぢて、面を掩ふのであつた。夫はとかく引込思案で、意志の弱い方であつた。父は引込思案ではなく、加虐的であつた。外的理由のために分析處置は中斷せられることになつたが、處置のよい結果は見えた。處置の終り頃に面白い出來事が起きた。彼女は自分の夫の健康保險の醫長を訪問して、支拂の一部を自分の處置費に廻して貰ふやうに賴まなければならないことになつてゐた。醫長は道樂者だと云ふ評判が立つてゐたので、患者は彼の家を訪ふのに不安な期待があつた。併し醫長は金の提供を體よく併し判然と斷つた。併し患者が部屋を去り行く前に、醫長は彼女を引寄せて接吻した。このために彼女は激しい亢奮を覺え、ワギナの××とクリトリスの××とを感じた。醫長は彼女の父親の型であつた、彼女の無意識にとつては理想の男性型であつた。今では老人のくせに年甲斐もなく卑猥なことを云つたりするので、全然いやであつた。彼女の母親は粗暴な父親の奴隷であつたので、彼女は自分の結婚に於いては支配者になりたいと思つた。今や彼女は自分が夫に滿足を與へなかつたと云ふことを認識した。時々は夫に嚙みついた。或る時、自分にとつては全く何でもなかつた行爲の後に、夫が滿足を表明した時には、彼女は「彼から一切をちよんぎつてやりたい」願望を覺えた。行爲の間に彼女は空氣×××××か、××が××するとか、あまり×××××が止まりさうだとか、鬚が××××するとか、いろ〱いやな感じを持つことが多かつた。

また別の患者に於いては、彼女等の能動的な去勢願望が止め度なき性的欲求となつて現れることがある。それは彼女等が滿足してゐないことを示すばかりでなく、就中、相手を「參らせ」てしまふ、つまり不能にしてしまはうとするものである。更に一歩を進めたものとしては、相手を亢奮させておいてあとは立往生させると云ふ手がある。また間接的な衝動としては、夫を打つたり嚙付いたり(口唇加虐性)するのがある。このやうな去勢願望を實施する今一つの

無意識的技法としては、性行爲を卑しいとして拒ける手である。このやうな神經症的な性拒否は相手に對して快樂減少の效果を及ぼす。何となれば、男性の性能力も女性の良感と同じやうに、心理的影響を被るものであるからである。

かくて男子の性能力の障害は生ずるのである。

多くの冷感症婦人にとつては、彼女等の對男性加虐慾は單に結婚不安又は性行爲不安として意識せられる。「もし私に失望させるやうならば、夫を殺すであらう」と云ふのが、この種の婦人の口癖である。その背後に、就中、夫に對する加虐的衝動の防禦が隱れてゐる。或は「夫を失望させる」との不安が前景に押しやられて出て來てゐる。このやうな婦人は受動的、女性的な男たちの大勢に交渉を持ち、何れに對しても、コイトスの後に、彼等が女に滿足を與へることの出來ないことに就いて一々槍玉に上げられる。

冷感症の婦人たちは、迅かにその愛人を取換へる。何となれば、彼女等の意見に依れば、自分の方に手應へのないのは、自分のせいではなく、男の方のせいであるからである。彼女等は最近に出來た相手に對して、コイトスの後に、いつもきまつて云ふ「あなたは他の男たちと同樣に、やはり女に滿足を與へることが出來ない」と。偶然、彼女が劣等感を持つてゐる男に出會して、右の言葉を本當だと云ふやうなことがあるならば、患者は復讐の快感を覺えるのである。

この復讐傾向はまた性格的な形で現れることがある。夫に莫大な金を使はせ、その「財産」(無意識的には性能力)を彼から引離してしまはうとする女が多い。また多くの女たちの時間を守つたりすることの不正確さは手のつけられない場合があるが、それはやはり右の類に屬するのである。女が性行爲に際して待つてゐる態度に強ひられるのは、この事實の裏返しである。日常生活の多くの機會に於いて、女は夫を待たしておく。或はコイトスを出來るだけ長く斷つてゐることがある。それからその行爲を全く事務的に行ふのである。或る女は夫に對して「もう濟んだの?」と極めて皮肉に尋ね、また別の女はわざとらしく家事上の相談を持出したりする。

コイトスの間にもその後にも、これ等の婦人には一切の感傷愛が缺けてゐる。屢々男たちは不當にも、その「野獸

性と無遠慮」とを難ぜられ、「始終あんなこと」(と云ふのは勿論分つてゐるが)を要求すると責められる。一切の豫備快感や種々な愛撫行爲は拒けられ、そんなことは賣春婦のすることですと一蹴せられる。

屢々また、生れながら肉體上の缺陷があつて、それが彼女のナルチスムスを傷けてゐると、それが夫のせいだとせられることがある。

或る患者は結婚前に、大學教育を受けた男と情事があつた。併し彼女は氣のいゝ、粗野な、且つ首都には住つてゐない或る商人を夫として選ぶことになつた。この結婚に依つて、田舍の富有な商人が、戰爭中に破産してしまつた父親を助けてくれることになるわけであつた。敬愛する父親のためのこの犧牲は、極めて自然なことに思はれたが、併し現實は復讐に依つてこの事の不自然なりしを證明した。患者の青春期は父親への定着に滿ちてゐた。彼女の最初の求愛者を拒け、一切の戀愛關係の途上に立塞つたこの粗野な男は、やはり彼女の無意識理想であつたのだ。確に、彼女は一切の性愛は罪惡だと感じてゐた。殊に料理用のスプーンの柄でなした少女期の惡戲は罪惡感をあとに殘してゐた。彼女は結婚に於いてたゞ感傷愛をのみ求めてゐたのだ。ペニスを持たない男をのみ求めてゐたのだ。ペニスはまた排尿にも資すべきものであると云ふことは、彼女は考へたくなかつたのだ。彼女はたゞ自分の身體にのみ惚れ込んでゐた。その身體は子供を生んだために、老け、且つ駄目になつてゐた。就中いけないことは、彼女の乳房がだらりとなつてゐることであつた。彼女の內にある何物かゞ出產のために破懷せられた。その時以來、彼女は屢々、自分が再び少女に返つたと云ふ樂しい夢を見た。目が覺めて夫が側に寢てゐるのを見ると、全世界が見知らぬところのやうに思はれ(非人格化)、夫は嫌惡の對象となる。夜中の活動を想ひ出して、彼女は「何か或る力(父親?)が自分に乘り移つてゐたかのやうに」思ふ。お產の苦を味つて以來、彼女は夫から氣持が離れた。コイトスの後に彼女はたゞ復讐と憎惡の感情を持つた。時として思ふことは、自分の結婚生活に缺けてゐるものは、自分を始終打擲してゐたつらい父親の缺けてゐることであると思ふ。父親が「外套に乘つて飛行し」この結婚生活から自分を救ひ出しに來てくれるやうに空想する。彼女の結婚の幸福はたゞ二ケ月續いたゞけであつた。崇拜的に夫が取扱つてくれるならば、彼女は滿足したが、姙娠させられた時には夫を敵視した。要するに、冷感症によるこの不幸なる結婚の場合は、次のやうに說明することが出來る。——

Wir sehen demnach: die psychische Welt hört auch beim Virginitätsproblem nicht bei der phallischen Stufe auf. Je tiefer die Regressionsstufe, desto komplizierter die psychischen Verhältnisse. Dabei ist gerade beim Weibe die Aufhellung dieser Schichten heute noch keineswegs völlig gesichert und harrt vielfach der Enträtselung. Die unerschöpfliche Mannigfaltigkeit psychischen Geschehens garantiert auch dem uns folgenden Generationen von Analytikern genügende Betätigungsmöglichkeiten.

—:o:—

tiert wurde. Als sie dem Deflorator die Wahrheit sagte, brach er in herzliches Lachen aus. Eine dritte Patientin wieder „verliebte" sich in einen jungen Mann, der einmal sagte, Jungfrauen interessierten ihn nicht. Daraufhin gab sie sich einem sozial tief unter ihr stehenden Manne hin: die Defloration war „gleichgültig", am Schluß bekam sie einen hysterischen Anfall.

Das Desinteressement dieser Oralen ist bezüglich des Genitales deshalb so groß, weil sie die Vagina innerlich nicht als Vagina perzipieren, sondern an der psychologischen Mundbedeutung derselben festhalten. Das ist aus den neurotischen Ängsten dieser Patientinnen feststellbar: die letztgenannte Kranke fragte fast regelmäßig ihren Freund nach dem Koitus, ob er sich in der Vagina *verletzt* hätte. Die Analyse ergab, daß sie eigene aggressive Tendenzen aus der Zeit: säugende Mutter — saugendes Kind abwehrte. Da *sie* mit ihrem Mund die Brust beißen wollte, meinte sie, die Vagina (=Mund) werde den Penis (= Brust) verletzen (*M. Klein*). Wir sehen hier die Identifizierung der genitalen Koitussituation mit der *oralen* Babyzeit.

Hier ergeben sich komplizierte Zusammenhänge mit Vaginismus, der in manchen Fällen nicht bloß phallische, sondern auch orale Zuflüsse hat.

Das Zentrum der Erregung bei *oralen* Frauen ist übrigens weder die Vagina noch die Klitoris, sondern die *Harnröhrenmündung*. Wie kompliziert in manchen Fällen die Verhältnisse liegen, zeigt die bloße Beschreibung des Koitus einer solchen Kranken: sie war absolut frigid, verkehrte meistens a tergo, war für den Penis völlig anästhetisch, unterbrach häufig den Koitus, um urinieren zu können. Zum Orgasmus kam sie bloß durch Massierung der Harnröhrenmündung, resp. durch Zusammenpressen der Schenkel. Die Analyse ergab, daß das Nicht-Fühlen des Penis einerseits eine Abwehr aggressiver Impulse in der Identifizierung Vagina = Mund, Penis = Brust darstellte. Andererseits war das häufige Urinieren während des Koitus ein Zeichen der Autarkie: ich brauche die mütterliche Brust nicht, habe in der Harnblase selbst eine, ich bin also von der versagenden Mutter unabhängig. (Milch = Urin).

soll wenigstens der Mann leiden“. Der schwächliche Mann beklagte sich auch dauernd über eine Reihe hypochondrischer Beschwerden, als deren Ursache er den allzuhäufigen Verkehr ansah.

Bezeichnenderweise produzierte die sehr männliche, bösartige und überaus aggressive Frau ein interessantes Symptom im Zusammenhang mit der Defloration, resp. Menstruation. Sie hatte die *Angst, sie könnte durch Reste der anal perzipierten Menstruationsblutung den Mann mit Lues infizieren. Besondere Angst* hatte sie vor der *Deflorationsblutung.* Diese sah sie als besonders schädigend an. Obwohl sie rational genau über das Unsinnige ihrer Angst aufgeklärt war, kam aus affektiven Gründen die Befürchtung immer wieder an die Oberfläche. Der unbewußte Wunsch lautete: ich will den Mann durch das Blut bei der Defloration, resp. Menstruation schädigen. Es ergab sich sogar der abstruse Tatbesand, daß sie den Koitus auch deshalb so häufig vom Mann verlangte, weil sie sich überzeugen wollte, den Mann *nicht* geschädigt zu haben; die Folge der Lues-Infektion stellte sie sich nämlich so vor, als würde der Penis abfaulen. Wie dies typisch ist, schmuggelte die Patientin natürlich in die Abwehr das Abgewehrte, die Aggression, ein: mit dem häufigen Koitus quälte sie den Mann, der im Wesentlichen „Ruhe“ haben wollte. Endlich war in der Schädigungsidee mittels Blut auch eine Umkehrung der supponierten Schädigung der Patientin seitens des Mannes feststellbar.

Gehen wir *oralen* Fällen über. Es ist auffallend, mit welcher inneren Gleichgültigkeit diese Frauen — soweit nicht Reste der phallischen Stufe nachweisbar sind — der Defloration gegenüberstehen. Einige Beispiele: eine oral regredierende Patientin beschloß eines Tages, nicht mehr die „lächerliche Bürde der Virginität“ zu tragen (ipsissima verba) und ließ sich von einem wildfremden Mann, den ihr eine Cousine zuführte, deflorieren. Nachweisbare psychische Spuren blieben von diesem „langweiligen Akt“ nicht zurück. Eine andere Frau mit schwerer oraler Charakterneurose und Zügen von Moral insanity benahm sich als neunzehnjähriges Mädchen derart auffallend auf der Straße, daß sie von einem Mann als Prostituierte angesehen, in ein Hotel mitgenommen und dort als Dirne gegen Bezahlung koi-

ersten Mal. Plötzlich fiel sie nach vorn auf ihn nieder, ihre Hände zogen ihn an sich. „Liebling“ stöhnte sie schluchzend, „was hab ich getan? Vergib mir, vergib mir......“

II. Der psychische Überbau des Virginitätsproblems bei prägenitaler Fixierung.

Die Art der Reaktion der neurotischen Frau, die der letztzitierte Schriftsteller schildert — zweimaliges *Beißen* des Deflorators — bildet einen zwanglosen Übergang zur Virginitätsproblematik prägenital fixierter oder regredierter Frauen. Grob schematisiert könnte man sagen: die anale Frau faßt unbewußt die Vagina als *Anus*, die orale Frau die Vagina als *Mund* auf. Also müßte man eine andere Reaktion prägenital fixierter Frauen auf die Defloration als die bei Hysterikerinnen übliche erwarten. Die Erwartung trifft tatsächlich zu, nur darf man sich das Bild nicht isoliert vorstellen. Auch bei Prägenitalen sind starke Spuren von Phallizität nachweisbar.

Ich beginne mit einem klinischen Beispiel: Eine zwangsneurotische Frau erzählte von ihrer Defloration, sie hätte die entsetzliche Angst gehabt, sie werde dabei innerlich derart beschädigt werden, daß sie in der Folge den Stuhl nicht mehr werde zurückhalten können und für ihr übriges Leben incontinent bleiben müsse. Den Einwand, daß sich die Defloration in der Vagina und nicht im Anus abspiele, lehnte sie noch in der Analyse ab: „all das gehört zusammen“. Wir sehen also, daß die Patientin an der Kloakentheorie festhielt. Als sie bei der Defloration vom Mann aufgefordert wurde, „unten nicht so zu pressen“, dachte sie erschreckt: „wenn ich nicht presse, werde ich das Bett mit Stuhl beschmutzen“. Als bei der Defloration das Bettlaken mit Blut beschmutzt wurde, wusch sie es eigenhändig aus mit der Begründung, die Leute würden sie wegen ihrer „Unreinlichkeit“ (sie meinte Faeces) auslachen.

Die Patientin — sie kam nach halbjähriger Ehe wegen eines Waschzwangs, der seit der Pubertät persistierte, in Behandlung — war in den folgenden Monaten voller Wut und Haß gegen den Mann und versuchte ihn durch ständige Koitusforderungen zu schädigen. Ganz bewußt war ihr, daß sie genital völlig desinteressiert war: „da

digsten brauche." Darauf Elsa: „An der Brust aufgepäppelt werden, das täte dir not. Bis zur Entwöhnung bringst du's überhaupt nicht."

Er preßte ihr die eine Hand auf den Mund und packte sie mit der andern im Genick. Seine Finger krallten sich ihr tief ins Fleisch und machten jede Bewegung unmöglich. Sie schloß die Kinnladen und *biß zu.* Mitten in die Hand, die sie knebelte. Er schrie auf: „Du Vieh!" und fuhr unwillkürlich mit der Hand an die Lippen, um an der Wunde zu saugen. Blutig war sie nicht. Er spürte den Abdruck ihrer Zähne, aber es floß kein Blut. Sie legte den Arm um ihn und klagte: „Verzeih, Liebling. Bitte, verzeih!"

Einige Stunden später wirft John seiner Frau vor, sie messe ständig alle seine Handlungen an ihrem Vater, und fragt sie höhnisch: „*Warum hast du denn nicht deinen Papa geheiratet, solange Gelegenheit dazu war?*" Es entspinnt sich wieder ein Kampf:

Sie sprang in die Höhe, packte das Handtuch mit der einen und seinen Hals mit der anderen Hand. Er fiel auf die Ruderbank zurück. Das Boot schwankte. Sie stürzte zur Seite gegen den Bordrand. Sein Hinterkopf schlug auf den Kielbrettern auf. Sie hielt erschrocken inne: hatte er sich vielleicht verletzt? „Du Vieh!" keuchte er und packte ihre Arme dicht über den Knöcheln. Sie sträubte sich, wollte loskommen und *stopfte ihm das Handtuch in den Mund,* um ihn nicht weitersprechen zu lassen. Um ihm den Mund zu stopfen, daß er schwieg. Er zog sie herunter, ganz über sich. Sie machte sich im Niederfallen so schwer wie möglich und hoffte, ihn dadurch außer Atem zu bringen. Er preßte ihre Arme links und rechts an seinen Leib, so daß sie wehrlos war.

Johns Haut sah weiß aus, ganz weiß, dort wo der Hemdkragen verrutscht war, gegen die Schulter zu. *Sie neigte sich vor und biß ihn am Hals ins Fleisch,* so stark sie nur konnte. Er schrie auf und ließ ihre Handgelenke los. Die Zähne saßen fest im Fleisch. Sein Körper war steif vor Anspannung, das Gesicht verzerrt vor Schmerz. Er mühte sich ab, einen Arm hochzubekommen, um ihr einen Schlag zu versetzen. Die Zähne lösten sich aus dem Biß; der Kopf fuhr zurück; Augen starrten hinab auf die tiefen Kerben im Fleisch, die sich stellenweise mit Blut füllten. Sie strich mit der Zunge über die Lippen. Verspürte Blutgeschmack im Mund. Er wandte keinen Blick von ihr. Sie sah seine starren Augen, die dreinblickten, als sahen sie zum

Dann rudert der Ehemann sinnloserweise weit hinaus, wieder offenbar aus Aggression. Die Frau revanchiert sich, indem sie sich über das Mißgeschick des Mannes beim Baden aggressiv freut und ihn dann *am Genitale verletzt.*

„Geh ins Wasser“, sagte sie. „Ich komme dir nach.“ „Also gib acht. Ich will vorn beim Bug hineinspringen.“ Er kletterte hinauf, balancierte unter Gefahr, verlor das Gleichgewicht und fiel klatschend auf den Bauch. Elsa lachte, als er in die Höhe kam, das Haar wirr über der Stirn...... John kehrte um und schwamm ihr entgegen. Sie glaubte, er würde sie tauchen und spritzte nach ihm. Aber er spritzte zurück, kam an sie heran, fing sie bei den Armen und preßte sie an sich. Sie versanken beide zusammen, ihre Gegenwehr schwand, weil sie seinen Körper an dem ihren fühlte. Sie hatte sich vorm Tauchen gefürchtet; und jetzt ließ sie sich freiwillig sinken, seine Hände hielten ihre Ellbogen umklammert. Dann öffnete sie die Augen und sah seine Augen durchs Wasser hindurch, die sie anstarrten mit einer unpersönlichen Spannung. *So, stellte sie sich vor, mochte er in der Finsternis ausgesehen haben, im Bett, als er sie nahm.* Er war ein anderer Mensch — ein Toller. *Furcht packte sie.* Glucksend quoll ihr die Luft aus dem Mund. Sie versuchte die Arme loszuwinden *und stieß unwillkürlich mit ihrem Knie nach oben gegen sein Geschlecht.* Er ließ sie los, Luftblasen stiegen von ihm auf, der Kopf sank ihm zwischen die Beine. Sie stieß ab und schwamm mühsam aufwärts, die Lungen zersprengt von Atemnot. Sie keuchte in der frischen Luft. John kam nicht herauf. Seine Schuld...... Dann tauchte er auf und platschte matt. Sein Gesicht war dunkelrot, die seitlichen Halsadern angeschwollen. Er würgte, als wäre er gedrosselt worden — gedrosselt vom Wasser. Er gluckste, hustete, spuckte. *Sie konnte das Gefühl nicht verwinden, daß es komisch war,* wie er aussah, japsend und rot im Gesicht......

Im weiteren Verlaufe der Handlung zeigt sich deutlich, daß das verlorene Ruder symbolische Bedeutung hat und offenbar durch die unbewußte Absicht der Frau verloren wurde. Der *orale Unterbau* der Aggression der Frau äußert sich darin, daß die Frau in ihrer Wut den Mann *beißt*:

„Schweig um Himmelswillen!“ sagte John. „Es sieht dir ähnlich, daß du dich gegen mich stellst im Augenblick, da ich dich am notwen-

sorgsam geheimhielt? Woher kam es, daß die meisten Ehen, die sie kannte, at den verschiedensten Formen des Unglücklichsein zerfielen und daß die meisten Romane, die sie gelesen hatte, das menschliche Leben in seiner ganzen Kraßheit schildern und unter schönen Kleidern und hinter schönen Worten die menschliche Seele stets in ihrer Roheit zum Vorschein kommt? Wer war dieser Mensch neben ihr, wo hatte er sich herumgetrieben, mit was für Schmutz war er in Berührung gekommen, bevor er zu ihr gelangt ist? Was harrte ihrer in den kommenden Tagen, Monaten und Jahren? Was für unbekannte Qualen würden ihren Leib zerwühlen, wenn sie ein Kind zur Welt bringen sollte? Was für bittere Enttäuschungen, was für Kompromisse und schwere Entsagungen werden ihr Herz noch zermürben und elend machen......? All das zu wissen und dem mit offenen Augen entgegenzusehen......! So ist schon das Leben und es gibt keine Hoffnung, daß gerade das ihrige eine Ausnahme bilden sollte. „Warum habe ich keine Mutter?!......" weinte es in ihr. Es fiel ihr plötzlich ein, wie furchtbar es sei, daß sie nie eine Mutter gekannt hatte. Wenn ein Herz von Schmerz und Verzweiflung übervoll ist, dann wird auch wach, was sonst auf tiefstem Grunde schlummert. Der Gedanke, mutterlos zu sein, der Miette nur in schwersten Stunden schmerzte, zerriß ihr jetzt das Herz.

In *Marshalls* Roman wird folgende Situation geschildert: ein jungvermähltes Paar, das *aus Liebe* gegen den Willen der Eltern geheiratet hat, macht am Tage nach der Hochzeitsnacht einen Bootausflug am Meeresufer, wagt sich weit von der Küste weg in die See hinaus und verliert beim Baden ein Ruder. Infolge der Gegenströmung kommt das Boot durch bloßes Paddeln mit einem Ruder nicht von der Stelle und die jungen Leute verbringen einen Tag und eine Nacht auf offener See, ehe sie gerettet werden. Der Roman schildert meisterhaft die aggressiven Gedanken der Jung-Vermählten. So beginnt z.B. der Roman damit, daß der Ehemann aus Aggression ein beschädigtes Boot mietet, offenbar bloß deshalb, weil es den gleichen Namen trägt, wie die Ehefrau:

Die Boote waren, förmlich büschelweise, an Eisenhaken befestigt. Eines hieß ‚Elsa'. „Das nehmen wir." „Gut", sagte sie, „aber ein Kompliment ist es nicht". Der Kahn war schäbig und ziemlich altersschwach.

erblickte sich in der geneigten Spiegelfläche, wie sie mit zerzaustem Harr bleich im Bett saß, ihr dünnes Seidenhemd war ihn von der Schulter geglitten und wie Papier zerknittert. Auf ihrer Schulter war ein nußgroßer roter Fleck, von dem sie nicht wußte, wovon er herrührte. Und wie sie um sich herumblickte, sah sie die Spuren des nächtlichen Erlebnisses auf dem zerwühlten Bett. Das Leintuch war ganz zerdrückt und verschoben, so daß die alte dunkelrote Matratze sichtbar war und das Roßhaar aus dem an manchen Stellen geplatzten Stoff in widerwärtiger Weise herauschaute. Ihr Blick fiel auf den Spiegelrahmen, wo eine Libelle mit blauen Flügeln wie auf einem goldenen Baumstamm saß. Vielleicht war sie schon gestern ins Zimmer geflogen und so in Gefangenschaft geraten. Sie bemerkte, daß unter der anderen Bettdecke ein Fuß von Peter bis zum Knöchel vorschaute, wie ein *lebloser Körperteil*, der zu niemandem gehörte, lag er da. Und all das in dieser grausamen grauen Morgenbeleuchtung, die höhnisch wie mit Fingern auf die Dinge hinzuweisen schien: Siehe! das ist die Wirklichkeit! Sie fiel in die Kissen zurück und weinte leise. Der dumpfe bedrückende Schmerz in ihrem Kopf und das stechende, eigentümliche Gefühl in ihrem Körper ließen es sie *grauenvoll empfinden*, was mit ihr geschehen war.

Warum war sie jetzt hier? In einem fremden Land, einem fremden Hotel......und im Bett neben sich einen fremden schlafenden Mann! Ein fremder Mann, ja, ein fremder Mann, denn *in diesem Augenblick erschien ihr Peter hassenswert in seiner Fremdheit.* Wer ist dieser Mensch, den sie vor einem Jahr nicht einmal gekannt hat, von dem sie nicht wußte, daß er auf der Welt sei und der jetzt so von ihr Besitz ergriffen hat? Ihr Herz zog sich vor Schmerz zusammen und sie *haßte ihn mit dem Urinstinkt des Weibes, das sich gegen den Mann auflehnt, der es der Jungfräulichkeit beraubt hat.* „Wer ist dieser Mensch?“ fragte sie sich wieder und hatte das Gefühl, als wiche alles Blut aus ihrem Herzen. Was für verborgene Fehler, was für körperliche und seelische Mängel werden bei ihm noch aufscheinen, wenn der Alltag ihr gemeinsames Leben dessen berauben wird, was sie noch wie ein Festgewand trugen und Liebe, Zärtlichkeit, Zartgefühl und Höflichkeit hieß? Was für dunkle Leidenschaften mochten sich in seinem Herzen verbergen, die einmal hervorbrechen könnten? Wie würde es sein, wenn er in Wirklichkeit grob und unerträglich wäre oder wenn er widerliche abstoßende Gewohnheiten hätte, die er bisher

Stockwerk sie gestiegen waren, das wußte sie schon nicht mehr. Wieder dachte sie an den pfeifenden Herrn im Frack, sah genau die Form seines brillantenen Hemdknopfes vor sich, doch wie er aussah, ob groß oder klein, ob er dick oder dünn war, wußte sie nicht. Unbedeutende Einzelheiten waren ihr mit haarscharfer Deutlichkeit im Gedächtnis geblieben, an wichtige Dinge aber erinnerte sie sich überhaupt nicht. Dabei gab es Dinge, von denen sie nicht einmal sicher war, ob sie sie wirklich erlebt oder nur geträumt hatte. Und der Korridor! Auch einen langen Korridor hatte sie gesehen, als sie hinaufgingen. Und er hatte kein Ende, vor den Türen standen Schuhe wie Lebewesen und schienen Wache zu halten. Sicher bellten sie einen an, wenn man vorbeiging......Sie erineerte sich, daß sie stehengeblieben war und den Kopf auf seine Schulter sinken ließ. „Warum hast du mich so viel Wein trinken lassen?" „Ich bringe dich gleich ins Bett und es wird alles wieder gut sein." „Du hast mich lieb?" „Natürlich habe ich dich lieb!" Sie umschlang Peters Hals. „Hast du mich sehr lieb?" „Sehr lieb!" Auch daran erinnerte sie sich, sie dann ins Zimmer gegangen waren und Peter die Türe von innen zugesperrt hatte. Im Zimmer brannte nur über der Kommode eine Lampe mit einem großen Schirm. Bunte gedämpfte Lichter und tiefe warme Schatten lagen auf den Möbeln. Sie wußte auch, daß sie gelächelt hatte, es aber ein lebloses Lächeln war, das ihre Mundwinkel gewaltsam verzerrte. Sie konnte es nicht loswerden, es war so wie wenn ein fremdes Ding an ihren Lippen klebte. Sie war betrunken. Sie saß am Bettrand, konnte den Kopf nicht mehr aufrecht halten und ließ die Füße hinunterbaumeln. Peter kniete vor ihr und löste ihre Schuhbänder. Sie hörte noch seine Stimme: „Gib mir dein Füßchen, nicht dieses, das andere". Sie fiel angekleidet aufs Bett zurück, schwang die Arme und summte eine Tanzmelodie. „Setz dich schön auf, ich will dir die Bluse aufknöpfen!" „Warum hast du mich nicht lieb?" „Ich habe dich lieb, aber setz dich auf!" Und da sie sich nicht rührte, legte Peter sie zart von einer Seite auf die andere, bis er sie entkleidet hatte. „Du...... wirst mich jetzt sehen?" „Keine Spur! ...... ich mache die Augen zu und schaue nicht hin. Also setz dich schön auf!"

Oh wie verworren und unsinnig war alles, als sie jetzt, im fahlen Morgenlicht, ernüchtert an die Geschehnisse zurückdachte! Ekel würgte sie und sie verabscheute sich selbst. Erschrocken setzte sie sich im Bette auf bei dem Gedanken, was weiter geschehen war. Sie

ihrem Bett, die Wassergläser und Wasserflasche auf der Kommode...... alles, alles war traumhaft und erschreckend fremd. Dann bemerkte sie, daß auf einem Sessel Männerkleider lagen. Der sorgfältig über die Rückenlehne gehängte graue Rock und die Weste sahen aus wie der Rumpf eines Menschen. — *In dem Bett neben ihr schlief ein fremder Mann!* In ihren weit aufgerissenen Augen spiegelten sich verworren die Erinnerungen an all das, was auf sie eingestürmt war. Der tiefe Schlaf hatte die Kette ihrer Gedanken unterbrochen. Dieser Zustand dauerte bloß einige Augenblicke. Langsam kam es ihr zu Bewußtsein, daß dies ihre Brautnacht gewesen war. Sie wußte schon, wo sie sich befand und daß es Peter war, der neben ihr schlief. Sie schaute auf das andere Bett, wo er mit abgewendetem Gesicht, den Kopf tief in die Kissen versenkt, dalag. Sein Kopf zeichnete sich dunkel vom Kissen ab, seine Haare fielen in braunen glänzenden Wellen über die Stirne und sein Nacken sah so lieb aus wie der eines kleinen Jungen. Schwer und langsam kamen Miette wieder die Gedanken. Sie war wie betäubt. Am Abend hatte sie einen dunklen süßen Wein getrunken und jetzt spürte sie im Kopf einen dumpfen Druck, als hätte sie einen eisernen Reifen um die Stirne. Sie fühlte einen brennenden Durst, setzte sich im Bett auf und streckte ihre Hand nach dem Wasserglas aus, aber ein schneidender Schmerz durchzuckte sie so heftig, daß sie in ihrer Bewegung innehielt und sich mit einem leisen Stöhnen in die Oberlippe biß. „Was war das?“ Plötzlich war ihr der Durst vergangen. Sie sank zurück in die Kissen und begann, sich angsterfüllt selbst zu beobachten. Ihr Bewußtsein wurde langsam klarer und ihre Erinnerungen allmählich wieder lebendig. Ja, jetzt erinnerte sie sich! Sie hatten im Speisesaal soupiert, ihnen gegenüber saß eine dicke Dame in blauem Kleide und ein Herr mit hoher Stirne, der beim Lachen seine großen gelben Zähne zeigte...... Alles war so wirr, woran sie sich zu erinnern versuchte! Nach dem Abendessen war sie, auf Peters Arm gestützt, die Treppen hinaufgegangen, sie konnte sich kaum schleppen, in ihrem Kopf brauste es vom süßen, schweren Wein. Ein Herr im Frack kam ihnen pfeifend auf der Treppe entgegen, und sie pfiff die Melodie laut weiter. „Sei still, mein Engel......“, flüsterte ihr Peter zärtlich zu. Beim Treppenabsatz stand eine fackeltragende Bronzefigur, an deren Armhaltung sie sich genau erinnerte. Auf den Armmuskeln spiegelte sich das Licht. Deutlich hörte sie das Geräusch des Aufzuges, der gerade an ihnen vorbeifuhr. Aber in welches

3) Verleugnung des elterlichen Koitus.

Sadger hat im Anschluß an *Freuds* frühe Erkenntnisse in seiner Hebbel-Arbeit 1912 darauf aufmerksam gemacht, daß es eine der Resultanten der kindlichen Phantasie sein könne, den sexuellen Verkehr der Eltern derart zu verleugnen, daß die Mutter zur unberührten Jungfrau avanciere. Die Erfahrung bestätigt diese Annahme, wenn auch — fast könnte man hinzufügen: groteskerweise — häufig gerade das Gegenteil vorkommt: die bekannte Herabsetzung der Mutter zur Dirne zum Zwecke der inneren *Angstersparnis*: wenn viele Männer mit der Mutter Umgang haben, ist es scheinbar doch nicht so verboten.

Wie lebendig und unerledigt das Virginitätsproblem im Denken und Fühlen der Menschen ist, will ich an zwei literarischen Produkten der letzten Monate zeigen, an den Romanen des Ungarn Lajos *Zilahy* „Zwei Gefangen“ und des Engländers Arthur Calder-*Marshall* „Wir haben gestern geheiratet“ (beide in deutscher Übersetzung im Zsolnay-Verlag Wien 1937 erschienen). In *Zilahys* Roman findet sich folgende Schilderung des Seelenzustandes der jungen Frau, *die aus Liebe geheiratet hatte*, nach der Hochzeitsnacht:

> Nach langem und tiefem Schlaf öffnete Miette die Augen. Im Zimmer war es schon hell. Verwirrt schaute sie zur Decke empor und glaubte, sie wäre zu Hause. Doch als der Schlaf von ihren Augen wich, kam ihr die Stelle, auf die sie blickte, eigentümlich fremd vor. Langsam und mechanisch schaute sie von einem Punkt der Zimmerdecke zum andern, ohne es zu wagen, sich im ganzen Zimmer unzusehen. „Wo bin ich denn?“ fragte sie sich angsterfüllt. Ihr Blick fiel nun auf die Wand gegenüber, wo über einer Kommode ein goldgerahmter Spiegel vorgeneigt aufgehängt war. In seiner schiefen Spiegelfläche sah sie ihr Bett senkrecht stehen. Vor dem Fenster hing ein dunkelroter Vorhang in weichen Falten herab. Der trübe Himmel, über den rasch die Walken zogen, schien auffallend nah. Das Bett war ungewöhnlich hoch und in dem engen kleinen Zimmer sah alles so erschreckend fremd aus. Die Form der Sessellehnen, die Messingbeschläge am Schloß des Schrankes, die Farbe des Teppichs neben

Bezeichnend ist die Angabe dieser Männer, daß sie „sonderbarerweise“ bei ihrer Liebeswahl ständig „Pech“ haben und, trotzdem sie den Virgines ausweichen — die Erfahrung hat sie ja gelehrt, daß sie bei diesen impotent sind —, ständig auf solche stoßen. Es handelt sich natürlich um ein *unbewußtes* Suchen der für sie unerreichbaren Virgo als Objekt. (S. 46 ff.)

Ich führte diesen Typus unter „Spezifische Bedingungen“ bei hysterischen Potenzstörungen an. Unter „Spezifischen Bedingungen“ verstand ich eine Reihe von „conditiones sine quibus non“, die von manchen Neurotikern beim Koitus, bezw. bei der Liebeswahl gestellt werden und die so starr und unelastisch sind, daß trotz bestehender Potenz beim Festhalten an diesen Bedingungen, infolge weitgehender Einengung des Aktionsradius der Persönlichkeit von einer Potenzstörung gesprochen werden kann.

Weitere Determinanten ergeben sich, wenn man sich die „absoluten“ Anhänger der Virginität als Sexualobjekt analytisch näher ansieht. Ich finde, daß drei Typen sich sondern lassen.

1) *Angst vor Vergleichen.*

Diese Gruppe von Neurotikern flüchtet zur Virgo, weil sie fürchtet, die erfahrene Frau könnte Vergleiche mit früheren Liebesobjekten anstellen. Diese Neurotiker wissen um ihre schwache oder launische Potenz und bemänteln diese Unsicherheit durch die Wahl der unerfahrenen Virgo.

2) *Abwehr der unbewußten Homosexualität.*

Diese Gruppe von Neurotikern ist wieder auf der Flucht vor starken unbewußten homosexuellen Tendenzen. Jede erfahrene Frau (Witwe, geschiedene Frau, Mädchen mit „Vergangenheit“) ist für sie eine Verlockungsgefahr nach dem bekannten von *Freud* erstmalig aufgezeigten Typus „Frau als Brücke zum Mann“. Die Virgo erscheint diesen Neurotikern unbewußt als gelungenste Widerlegung des unbewußten Gewissensvorwurfs: „Du suchst gar nicht die Frau, sondern den Mann“. Hier wird also die Virgo als unbewußter Abwehrmechanismus verwendet.

Arbeit *Freuds* wird mit Recht die Rolle betont, die die psychische Bindung masochistischer Tönung gerade dem Deflorator im Unbewußten des Weibes reserviert. *Freud* sagt: „Auf höheren Stufen ist die Schätzung dieser Gefahr (Aggression der Virgo. D. Verf.) gegen die Verheißung der Hörigkeit und gewiß auch gegen *andere Motive* und Verlockungen zurückgetreten; die *Virginität wird als Gut betrachtet,* auf welches der Mann nicht verzichten will". Welches sind nun diese anderen Motive?

Soziologische und soziale Momente spielen dabei gewiß eine regional wechselnde Rolle und dürften in verschiedenen Kulturkreisen verschiedene Bedeutung haben — ich betone, daß meine Ausführungen sich lediglich auf europäisches und nordamerikanisches Patientenmaterial beziehen. Gewiß spielen rationale Motive, wie Gewißheit bezüglich der Nachkommenschaft, eine Rolle (Pater semper incertus). Doch sind diese rationalen Motive gegenüber den irrationalen keineswegs entscheidend, da es eine große Gruppe von Männern gibt, die unter verschiedenen Rationalisierungen mit Virgines nichts zu schaffen haben will. (Angst vor Schwängerung, größerer Verantwortung, Angst zur Ehe gezwungen zu werden, vor Erpressung etc.) In Wirklichkeit kann man im Unbewußten dieser Männer eine latente Angst vor der Defloration finden, die *irrational* begründet ist. In meinem Buch über Impotenz (Medizinischer Verlag Huber, Bern 1937) findet sich darüber folgende Stelle:

Impotenz bei der Defloration. Die spezifische Bedingung der Potenz bei diesem (hysterischen) Typus lautet: das Sexualobjekt darf *keine* Jungfrau sein. Die Angst des Mannes vor der Defloration kann verschiedene unbewußte Ursachen haben:

Angst vor der eigenen Aggression: man findet unbewußte Phantasien des Durchstoßens der Vagina und Herstellung einer Kommunikation mit dem After;

Schuldgefühlsentlastung: die „Verantwortung" hat der Deflorator;

Neurotische Blutscheu: Wiederholung verdrängter infantiler sadistischer Wünsche auf die Mutter;

all dies natürlich neben der von *Freud* hervorgehobenen unbewußten Angst vor der Rache des Weibes, das die Defloration als neuerliche Kastration und narbißtische Kränkung auffaßt.

seits begreiflicherweise keine bloße Wiedergabe der zitierten Ausführungen *Freuds* bringen wollte, entschloß ich mich, in einer inneren Revue meine weiblichen Patienten passieren zu lassen, um sie quoad Psychologie der Virginität nochmals zu untersuchen. Ich kam zum Resultat, daß einige — wahrscheinlich unwichtige — Ergänzungen immerhin möglich seien; dies umsomehr, als vielfach die Fortschritte, die *Freud* selbst und seinen Schülern seit 1914 zu verdanken sind, in die Virginitätsfrage noch nicht eingebaut sind.

I. Der psychische Überbau des Virginitätsproblems bei phallischer Fixierung.

Vorerst: die großartigen Ausführungen *Freuds* beziehen sich auf die *phallische* Stufe: im Unbewußten der Virgo sei aus der Ödipuszeit der Peniswunsch dynamisch wirksam und deshalb empfinde sie die Zerstörung des Hymens als neuerliche Kastration. Diese supponierte Kastration führe zu unbewußten Rachereaktionen der Virgo gegen den Mann. So sei es erklärlich, daß viele Völker die Entjungferung nicht durch den Ehemann, sondern teils instrumentell von alten Frauen, teils unmittelbar von Priestern oder sonstigen Vaterimagines vornehmen lassen. Dadurch schütze sich der Mann unbewußt gegen den unbewußten Haß des Weibes. Dafür spricht auch die von *Freud* hervorgehobene Tatsache, daß zweite Ehen bei manchen Frauen besser sind als die erste: die Haßreaktion wegen der supponierten Kastration habe sich am ersten Objekt erschöpft. Ein weiterer Beweis seien die Träume entjungferter Frauen: sie zeigen deutliche Kastrationswünsche gerichtet gegen den Ehemann.

Nähere Details der Ausführungen *Freuds* müssen im Original nachgelesen werden. Dank der imponierenden Arbeitsleistung des japanischen Freud-Übersetzers, des Kollegen *Kenji Ohtski*, liegt ja dieser Teil bereits ins Japanische übersetzt vor: im IX. Band der japanischen Ausgabe ist er enthalten.

Hier ergibt sich vorerst das Problem, weshalb bei Bestehen der Gefahr der unbewußt motivierten Aggression der Virgo, es *trotzdem* Männer gibt, die auf die Virginität der Frau Wert legen, resp. welches die unbewußten Motive dieser Männer sein mögen. In der

Beiträge zum Problem der Virginität

von

DR. EDMUND BERGLER

Assistent am Wiener Psychoanalytischen Ambulatorium

Mit Vergnügen komme ich der ehrenvollen Aufforderung der Redaktion der Tokyoer „Zeitschrift für Psychoanalyse" nach, einen Beitrag zum Problem der Virginität für japanische, an der Analyse interessierte Leser zu schreiben.

Überblickt man die analytische Literatur zum Problem der Virginität, so fällt auf, daß seit der berühmten Untersuchung *Freuds* über „Das Tabu der Virginität" keine weiteren wesentlichen Beobachtungen publiziert wurden. Das ist bemerkenswert: obwohl in vielen Tausenden von Analysen weiblicher Patienten immer auch das Problem der Virginität zur Sprache kommen *mußte*, ist offenbar nichts Neues beobachtet worden, obwohl Hunderte von Analytikern aus aller Herren Ländern die Beobachtungen kontrollierten. Das heißt: *Freuds* Befund wurde immer wieder verifiziert und offenbar für erschöpfend angesehen. Tatsächlich war gerade die Aufdeckung der Ursachen des Tabus der Virginität ein „Schuß ins Schwarze". Gerade bei dieser Arbeit *Freuds* sehen wir immer wieder mit staunender Bewunderung, wie groß und einfach zugleich die Lösung von Problemen ist — wenn sie eben ein Genie vom Range des Gründers der Psychoanalyse unternimmt.

Auch mein subjektiver Eindruck beim Erhalt des Briefes des hochgeschätzten Kollegen *Kenji Ohtski*, der u. A. die Aufforderung enthielt, über Virginität zu schreiben, war vorerst: „Darüber gibt es nichts mehr zu sagen, alles Wesentliche hat ja bereits *Freud* 1914 gesagt". Da ich aber annahm, daß die Redaktion den Aufsatz in einer bestimmten Gruppierung von Themen benötigte und ich ander-

編輯後記

「處女性の問題」特輯號は御覽の通り相當がつちりした內容のものとなつたと信じますからせい〲御精讀の程願上げます。ベルグラー氏の寄稿は豫想以上に面白いもので、我々はこの論文を始めて本誌上で世界的に公表することを誇りとするものであります。そのためにも特に原文を卷末に添へておきました。卷頭大槻氏の譯文と照合して御精讀下さるならば、ドイツ文の讀める方々には一層御勉强になるであらうと存じます。

×

「羽衣型傳說」の精神分析が實に意想外な結論に到達してゐることは人々の驚きであらうと存じますが、併し含蓄ある結論と申さねばなりません。大槻氏の「若い人に於ける處女性問題」は「日本讀書新聞」に書かれたものを敷衍せられたもので、約三倍の長論となり、讀みごたえのあるものとなりました。日本讀書新聞編輯主任木下氏はあの記事は「お蔭樣にて稀有のヒット、近頃であの位反響のあつた記事はございませんでした。傳へ聞くところに依ると、改造山本氏もひどく記事の內容に感じてゐたさうですが、精神分析參考書を知らせてくれと云つて來た質問ハガキも山積しました」と便りを寄せられました。併しこの事は必ずしも筆者の名譽と云ふよりは一般の人々が精神分析と云ふ絕大の興味ある學問の價値を知らなすぎることを意味するに外ならないのであります。

北山氏の漱石研究はいよ〲面白くなり、探偵心理の剔抉は極めて鋭いものであります。次號をお待ち下さい。延島氏の「ナポレオン」も愈々完結し、近く一大改訂を加へた上單行本となつて現れるでせうから、その節には更めて御愛讀の程願上げます。

×

四月一日には豫報の通り「冊子精神分析」としての第一號を、(號數は「正誌精神分析」と連續的に數へることにして第六卷第三號として）發行いたしました。從つて本號は第六卷第四號となりました。今後この調子にして數へて行きますから御諒承下さい。

「冊子精神分析」は特別誌友諸氏には無代配布いたしますが、一般讀者諸氏には誌代を別に五錢お送り下されば御送り申上げます。（郵稅は當方で負擔いたしておきます。）併し正誌精神分析のみをお讀みになつて、それで意味が通じなくなると云ふやうなことはせぬつもりでありますから、一般讀者におかれてもその點は安心して御愛讀下さい。

×

第六卷第三號の內容は「東洋醫學と精神分析」（大槻憲二）「內外彙報」の外に通信として久下貞夫、松本綠兩氏の感想が載つてをります。次からも少し柔味を加へて編輯します。

×

その後の特別誌友加盟者名簿は次の通りであります。御支援を深謝します。

▲深川區……………飯塚英男氏
▲釧路市……………戸田勝久氏
▲靜岡縣……………小出春樹氏
▲小樽市……………石栗榮次郎氏
▲大阪市……………二宮多郎氏

▲芝　區…………………山口　滋氏
▲足利市…………………穴原陸郎氏
▲本郷區…………………伊勢田甫氏
▲千葉縣…………………澤田雅男氏
▲瀧野川區………………鈴木雄平氏

なほその他繼續誌代をお送り下さつた多くの舊來の特別誌友の方々にも深く感謝いたします。

×

不老泉院主氏（大槻氏の雅名）の「アプフウブ」は毎號本誌の呼物となつてをりまして好評を博してをりますが、岡倉書房主遂にこれに目をつけて單行本として上梓せられることになりました。新に書かれた原稿も澤山にありますから、この際是非御購讀の程願上げます。本の題名は『分析家の手帖』、定價は一圓八十錢との事です。岡倉書房の本ですから、いづれ氣の利いたものになりませう。

大槻氏の「傳說研究」は前號本欄で豫報しましたが、なほ書き足さねばならぬ原稿が多いので、何れこの秋あたりになりませうと存じます。

★

次號特輯は『**貞操の問題**』といたします。實は本號が『處女性と貞操』となる筈でしたが、やつて見ると處女性だけでも澤山に問題がありましたので、貞操問題は別に次號で獨立的に取上げることにいたしました。

「貞操の意義及び價値」、「貞操帶の精神分析」、「或る不貞者の論理」、「男子の幼兒性と貞操への要求」などの諸論文が用意せられつゝあります。

また宮田氏の「教育者のための精神分析概論」や岩倉氏の「ソネット」研究は續きますが、大槻氏の「ハムレット」は岩倉氏の「ソネット」が終つてから揭げます。あまり沙翁ものが重複しても或る種の讀者にはお氣の毒ですから。宮田戊子氏「一茶の性格」その他、いろ〳〵の準備もありますことゆゑ、精々御期待あらむことを希望します。

★

▼昭和十三年四月廿五日印刷
▼昭和十三年五月一日發行
（月刊）定價五十錢
（外地定價）五十五錢
東京市本郷區駒込動坂町三二七
編輯兼發行人　大槻憲二
千葉市長洲町二ノ七
印刷所　千葉印刷株式會社

定價一部　五十錢
半年分　一圓五十錢（送料共）
一年分　三圓（送料共）

御註文規定
・本誌の御注文は一切前金に御願ひ致します。
・御送金はなるべく安全至便なる振替を御利用下され度く、**振替口座東京七八八一七番**へ御拂込み下さい。
・郵券代用の場合は一割增に願ひます。
・本誌廣告に關しては、御照會次第部員を伺はせます。

東京市本郷區駒込動坂町三二七
發行所　**東京精神分析學研究所**
振替口座東京七八八一七番

大賣捌所　東京堂・東海堂・大東館・北隆館・（大阪）福音社

研究所事業案内

一、分析部

・神經症治療（ヒステリー、强迫症、恐怖症、妄症想、その他）

・性格改造（惡癖、奇習など現實生活に不適當なる性向にして無意識病根に基くもの）

・客員の診察（分析的又は醫術的）希望の方には、紹介の勞をとるべし

二、通信分析部

・分析法は每日、患者が分析者の許に通ひて、處置を受けるが正當なれど、遠隔の地に居られたり、その他、經濟上、健康上、それの出來にくい人々のために、この部を設く。

・希望者は、その姓名、年齡、病歷、手記、感想、夢の記述などに、料金（十圓）を添へて當研究所にお送り下され度。分析診斷明細書を相當期日の後に送る。手記その他は絕對に他に洩らすことはなし。文字は明瞭に書かれたし。

・擔當者は研究所に御一任ありたし。それ〳〵適當の人々にふり向ける。

三、敎育部

・當研究所主催の講演會、公開講習會、演劇、その他。

・所員並に客員に對して他より依賴の講演又は講習會。

四、出版部

精神分析に關する雜誌及び圖書の出版。

五、研究會

・研究の發表とその討議を目的とす。每月一回、第三月曜夕、　　にて開催その都度通知、

出席希望者に對しては別に資格制限を設けず。會費は食費、會場費、通信費とも出席の都度、六十錢。（但し誌代を申受く。雜誌購讀は會員の義務とす。）

・雜誌のみに依りて研究の發表又は諸般の事業に參與せんと欲する向は特別誌友（直接購讀者）となるべし。

六、講習會

每月一回、第一月曜夜、於研究所開催。當分主としてフロイド著書の精讀。會費二十錢。

特別誌友規約

一、本研究所在外研究會員を特別誌友と稱す。

一、特別誌友は本誌の豫約購讀者として半年分（一圓五十錢）又は一年分（三圓）前納の義務を有す。

一、特別誌友はその研究、感想、報告を、編輯部の了解を得て本誌上に發表することを得。

一、特別誌友は司會者の承諾を得て研究會、講習會に出席することを得。

一、希望者は購讀料金と共に、なるべく左記體裁の申込書を送られたし。（御迷惑の箇所には記入を要せず。）

特別誌友申込書

住所

姓名

年齡

職業

經歷

感想

Le Dr. René ALLENDY　櫻澤如一譯

西洋醫學の新傾向

四六判函入　三六〇頁　定價一圓八十錢　送料二十錢

西洋醫學には「原論」がない治療學がない。即ちそれは指導原理を欠いてゐる。

本書は其の欠點を痛烈に剔出し新しき醫學の方向を示してゐる。

フランス精神分析學の權威アランヂイの言を聞け

『毒素とか抗毒素とかいろ〳〵大げさな名をつけてはゐるが、何れも皆空想で實物を見たものは一人もない……コッホのツベルクリーンの如きは醫學史に拭ふべからざる汚點を殘したのである。

現代醫學は沒落した。その治療法は放棄された。醫者は全ての信頼すべき方法を失ひ、名譽を失ひ信用を失ひ、更にパンを失つてしまつた。醫學の不正確と不安さは至る處に暴露されてゐるのだ！』

食物なき處生命現象なし。故に一切の生命現象異常は食物異常より來る！

櫻澤如一著

食養學序論　一卷
食養學原論　五卷
食養料理法　二卷
食養療法　四卷

一千六百頁　全十二卷　金拾五圓　送料四十五錢

家庭食療讀本　金七拾錢　送料（九錢）
—食物であらゆる病氣を治す法—

肺結核の食物療法　同第八篇　十三錢（送料共）

身土不二の原則　同第六篇　二十三錢（送料共）

正しい食物について　生命と食物叢書第一篇　十三錢（送料共）

本會出版物案內

月刊　食養　第三十一年　一部二十五錢　一年三圓

月刊　むすび　一部五錢　一年五十錢　（見本無代進呈）

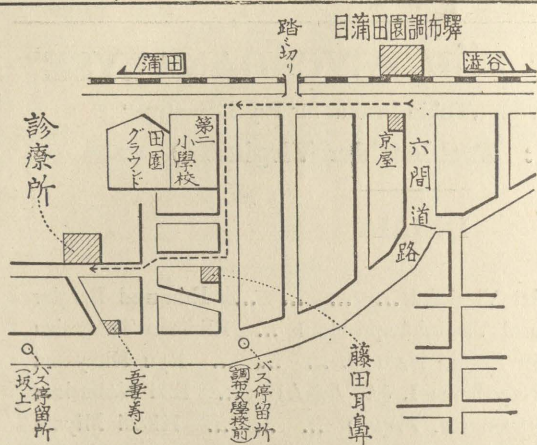
幸福は健康より！　健康は食養より！

東京麻布霞町一九（電話赤坂三六二六）

社團法人食養會發行（振替東京一四三八四番）

待望の科學的新養生訓、遂に完成！

性的に變態なる者は爾餘一切の生活に於いて變態である。まづ性生活と戀愛生活とを分析合理化せよ。然らざれば其の人は遂に現實生活の敗北者たらん。

本郷區動坂町三二七・(振替)東京七八八一七番
東京精神分析學研究所出版部

VI. Jahrgang, Heft 3–4. Mai — Juni, 1938. Erscheint zweimonatlich.

ZEITSCHRIFT FÜR PSYCHOANALYSE

Herausgegeben vom „Tokio Institut für Psychoanalyse“

(Hefttitel: Problem der Virginität)

INHALT

Preis des Einzelheftes, 50 sen

Tokio Psychoanalytischer Verlag

327, Dozakacho, Hongoku Tokio Nippon

精神分析

第6卷第5號

昭和13年6月

目次

昭和十三年五月廿五日印刷納本・昭和十三年六月一日發行・每月一回一日發行・

斷種法と優生學

大槻憲二

斷種法審議會が連りに催されて、この問題は只今世間の耳目を聳たしめてゐるが、これは多く優生學的見地、又は遺傳學的見地からのみ研究論議せられてゐるやうである。けれどもこれは單にさう云ふ生理學的醫學的方面からのみでなく、社會學的又は心理學的方面からも論ぜられなければならない面を含んでゐる問題であると云ふことを注意しておきたい。

四月廿二日厚生省內で行はれた民族優生協議會の同法制定可否の瀨踏みの會では、癩病や早發性痴呆症は遺傳であるかどうか、と云ふやうな事が大眞面目に論ぜられてゐたが、遺傳であるにせよないにせよ、劣種であるにせよないにせよ、彼等が只今現實生活を正常に送り得ない存在であることは否定すべからざる事實である。現實生活を正常に營み得ざるものに子供が出來ては本人も苦痛（もし苦痛を感じ得る能力ありとせば）であるし、子供も迷惑であるし、他人にも惡影響が及ぶことは明かなのだから、さう云ふ人々に對しては斷然適當の處置を講じてやるべきが人道的である。斷種は去勢ではないのだから、その處置に就いて「法律的見地から患者治療の範圍を越え傷害罪を構成しないか」と云ふやうな心配まですする必要はない筈であるが、實際に於いてさう云ふ罪障感と不安とを實施者たちが感ずるのは極めて自然である。何となれば、何人にも自ら去勢不安のないものはないから。つまりそれ等の罪障感を覺える人々が、他人の斷種に尻込みする

心理の中には、自分自身の被斷種の可能に對する不安が大きな無意識的裏付けをなしてゐることを悟らねばならない。

また「本人が希望しても避姙目的などに行はれては公安良俗を紊す虞れあり」と云ふ意見の見えてゐるのは、如何にも尤もな不安であるが、併し避姙目的に就いての心配ならば、どうせ他にも方法のあること故、そこまで心配するのはいさゝか病的の譏りを免れぬやうに思はれる。併し勿論、一應は問題にしておくことが無意味だと云ふのでは決してない。

要するに、これは優生學や遺傳學などの基礎の上に立たうとするから厄介で、解決が煮えきらなくなるのであつて、（何となれば、優生學や遺傳學そのものが抑々何もさう判然たる結論に到達してゐるわけではないのであらうから）、これを社會學的又は心理學的見地からするならば問題は比較的簡單になるのではなからうか。と云つても、私は必ずしも他人斷種が好きなわけではない。そんなことはペニスナイドの強烈な、男性コムプレクスの盛んな女醫さんたちか、或は自身睾丸炎にでも罹つて子供の出來る希望を失つてゐて他人に子供の出來る事の嫉妬に燃えてゐる男醫諸君あたりに依囑するのが最も効果的であらうと思ふ。

抑々かう云ふ方法を優生學的見地から唱へる人々は、餘程自分の優生に就いて自信のある人々に相違ない。さう云ふ自信のある人々のナルチスムスに果して病理的傾向はなきか。彼等の態度が煮えきらないのは、一つにはこの病理性に對する無意識的な不安と罪障感とに由るのではなからうか。

アプフウブ

不老泉院主

足袋の文數

男の親戚に隨分反對はあつたがそれを押しきつて思ひ通りに女は島田から丸髷に一足飛び、三味線持つ手に筆持つて、安藤さんお酢二合、長谷川さんお味噌五百匁と帳場格子の中に帳合ひをする酒屋のおかみさんとなつたはつい四年前だが、御亭主が競馬にちよつと手を出したが病みつきで町内に何軒かある酒屋の中で一二と云はれた此の店が瞬くの間に沒落の悲運。

二人の間に別れ話が持上つて、男は鄕里の秋田へ歸り、女は元の主人の家から二度のお披露目、丸髷から島田へ逆戻りはしたが、そこは女の有難さそれに元からお出先の氣受けもよかつたので、お披露目した月は廻りきれない程に繁昌し、二タ月目三月目にはそのお客が旦那になつて

一軒持たせてくれるといふスピード出世ぶり、今では抱へも二人置いてもらつて何不自由のない暮し向きだ、がそれに反して風の便りに聞けば秋田へ歸つてゐる元の亭主は今なほあんまり良くはないといふ話。

勿論今となつては色戀ではないが、旦那に內證で縕袍を拵へて無名で秋田へ送つたり、二十圓、三十圓の小爲替を送つた事も一再ではないが、此間、町內の唐物屋で店仕舞の投賣りがあり、足袋がひどく安いので二十足ばかり纏めて買ひ、これを秋田へ送つてやらうと思つてゐる處へ、ひよつこり旦那が見えて「こんなに足袋を買ひ込んでどうする氣だ？」と訊く、女は咄嗟に「足袋屋の投賣りがあつたので腐る物ではなし、あなたにはいていたゞかうと思つて買つて置きました」と云ふ。

天晴れ名答辯のつもりでゐたが秋田にゐる元の御亭は十一文胛高、今の旦那は九文七分、旦那は一足を取つてはいて見たがもとより寸法の合はう筈はなく、ぶかぶかな事まるで狼に衣を着せたやう。

やがて風呂場へ立つて行つた旦那、小判桶へ湯を汲んで素足を二本ニユツとその中へ浸してゐるので女が「何をなすつてゐらつしやるの……？」と訊けば旦那「足をふやかしたら丁度よくならうと思つて……」

×

以上は須田榮氏が都新聞演藝欄に連載せられてゐる隨筆文學の一つ（昭和十三年三月廿二日分）であるが、分析的にも大變面白い。分析して了ふと、いさゝか殺風景になるが、足袋は女を、足は男を象徴してゐるので、ふやかしてまで足袋に迎合しようと努力してゐるところに、旦那が妾への愛着のほどがよく描かれてゐる。足と足袋の象徴性は、讀者が誰でも直ぐに無意識的に感付いてはゐるのだが、それを意識化せぬところに文藝の魔力があるのだらう。魔力を魔力として尊重し過ぎると文藝を讀まずして文藝に讀まれるやうになる。

花見酒

と題する有名な落語があることを、近頃延島英一氏から聞いた。甲乙二人は花見の酒を賣つて一儲けしようと相談一決、なけなしの錢を出し合つて一樽の酒をしつらへ、二人でそれを舁いでエッサ〳〵と隅田川堤まで出かける途中、甲は咽喉が渇いたと云つて懐にわづかに殘つてゐた五錢を乙に提供して五錢がとこの酒を飲む。それを見た乙も急に飲みたくなつてやがてまたその五錢を甲に返して五錢がとこの酒をのむ。このやうにして同じやうなことを繰返してゐる內に、樽の中の酒は一滴も殘らなくなり、二人はすつかり上機嫌になつたが、商賣はおじやんになつてしまつたと云ふ話。

これは非常によく出來た笑話だと云つて或る西洋人が非常に感心してゐたと云ふことであるが、如何にもよく出來てゐる。一體どこがよく出來てゐるのかと云ふと、彼等二人の間に爪の垢ほども不正は行はれゐないに拘らず、彼等の現實的目的は完全に駄目になつてしまつた、と云ふところにある。分析的に云へば、現實原則が快樂原則のために完全に足をすくはれてしま

つたと云ふ點にある。快樂原則（卽ち無意識）はかくも機智的で、かくも拔目がないのだ。

快樂原則が完全にその實現を見るためには一先づ現實原則に屈服しなければならないのだ。「負けるは勝」と云ふパラドクシカルな諺は這般の消息を傳へたものだ。併し自我がよほど確立してゐないと、その人の生活に於いて、現實原則は極めて容易にその快樂原則のために小股をすくはれて結局「勝つは負」と云ふことになつてしまふのだ。

淺い川

私は、かつて友人に誘はれ、その鄕里なる水鄕いたこへ行つて、田舍藝者を招いて遊んだことがあつたが、その時、老妓がお酌に命令して「淺い川」なる踊りを踊らせたのを覺えてゐる。實は私の母は長唄に長じてゐて、幼時から踊りを見る機會は多かつたが、從つて日本舞踊は分らぬながら好きなものゝ一つだが、「淺い川」を渡らうと云ふところになつてお酌が忽然必要以上に裾をからげて見せてくれたので、さてこそ老妓の命令に若いお酌が澁つてゐた理由も呑み込めたほど、私はその方面には迂濶な男であるが、お蔭で「淺い川」の名は深く私の腦裏に印象せられた。「淺い川」の創作年代はさう古いことではないらしいから、これを以て舞踊が一般に性的な原始性を濃好に持つものである、と云ふ理由の一つにするわけには行くまいが、併し年代が比較的新しいからとて時に原始性が露出しないと云ふわけにも行くまい。現に活動寫眞にさへもキングコングのやうな原始趣味が復活せられることもある位だから……。

私はかつて南洋土人の尻振りダンスや乳房のリズムダンスを見たことがあるが、これ等がもし原始舞踊のそのまゝの形で遺つてゐるものとすれば、舞踊に於ける性的要素は否定すべくもないと云へるであらう。

なほ序ながら云つておくが「淺い川」なるものが實は旣に少女又は處女を意味してゐるらしいと云ふことである。「淺い川」を渡るとは、つまり初夜權行使の意味であらうと思ふ。何となれば足は男性的なものゝ象徵であるから。「淺い川」に對して「深い川」と云ふのがあれば、それは勿論、熟練女工のことであらうが、深川區內に熟練女工が多いとすれば、あまりに名前の偶然は恐ろしい。何となれば、現に見よ「玉の井」とはこれまたその方の象徵たることは知る人ぞ知るからである。

內外彙報

本研究所研究會例會

四月例會は十八日、アメリカン・ベーカリで催された。食前、司會者から本誌前月號所載フロイド精神分析學入門講語の朗讀解說あり。その後、北山隆氏からの質問により、インシュリン（ホルモン）の注射に依り痙攣を起させ、ショック療法に依り早發性痴呆症を治癒する方法に就いての談話が小山良修氏に依り與へられて人々の興味を索いた。

次に大槻氏は貞操問題に關係するものとして近江國坂田郡筑摩神社の鍋被り祭に就いて述べられた。この祭禮は有名なもので、從來種々な解說があるが、それ等に就いての一通りの批評が試みられた。

次に、久しぶりに出席せられた武田忠哉氏が花田八段の碁法に就いて心理學的考察を試みられ、攻擊精神一點張りであの位置にまで到達したことを不思議とも偉大とも思ふと云はれ、それに就いての分析學的見地からの解釋を求められた。大槻憲美子氏はこれを死の本能から說明することが出來ようと示唆せられた。

次に、高橋鐵氏色彩心理に就いての自家の調査の結果を報告せられ、久しく忌避せられてゐた黃色が近頃に入り頓に人氣を得て來たらしい風潮に就いての解釋を求められた。話はなほ衣裳の事、帶の事にも及んで行つた。

最後に、北山隆氏は氏得意の主題たる夏目漱石に就き、殊にその夢十夜の中のエディポス的な夢を解釋して、會員等の批判を求められた。

出席者は右言及諸氏の他に、吳無限、黑澤敬次、塚崎茂明、倉橋久雄、吉田靜枝、長田耕一、田中虎男、長崎文治氏等であつた。なほ大久保眞太郞、富田義介、兩氏からは鄭重な缺席挨拶があつた。

本研究所講習會例會

五月例會は、研究所改築中のため臨時に池袋の中外新藥商會（會員田中虎男氏紹介）の階上會議室に於いて催された。堂々たる室であつたので、會員一同の氣分も新たになつた。今日からはフロイド全集第三卷『社會・宗教・文明』中の第一の『集團心理と自我の分析』の第一章緒言及び第二章ルボンの集團心理說の二章を精讀討議した。この書は、緒言に於いては社會心理學と個人心理學との間に本質上の區別はないと云ふことを明かにして、まづ分析學的社會心理學の立場を明かにし、續いて第二章に於いて、ルボンの集團心理學說を批評してゐるのである。この批評の要點は次の數項に約說することが出來よう。

一、ルボンは個人として以前には所有しなかつた新たな特質が群集となると共に現れると信じたが分析學は人々が個人として以前から無意識裡に所有してゐたものが群集中に於いて抑壓解除と共に現はれるのだとする。

一、かくなる契機としてルボンは三つ（責任感消滅、感染、披暗示性）を擧げてゐるが、これは單に事實の記述であつて、原因の闡明ではないと云ふのがフロイドの批評の要點であるらしい。

一、集團心理と催眠狀態との類似性の主張、これはルボン說と分析學との一致點。

一、ルボンは指導者の「勢威」をのみ問題にして、群集の幼兒性を問題にしてゐない。

その後、茶菓をとりつゝ、斷種問題、遺傳問題を論じ合ひ、また黑澤敬次氏の登山心理や胎內空想的な夢の告白などあり、甚だ愉快な一夕であつた。出席者は、倉橋、高橋、同小春、北

山、北垣、田中、大槻夫妻、塚崎、黒澤、延島、の十一氏であつた。

研究所だより

▲研究會、講習會員でゐれる吳氏が此の度歸國されることになりました由、左のやうな御葉書を頂きました。

（前略）今度病氣ほどでもないのですが、醫者の勸めで田舍に歸ることになりました。秋頃には上京出來ると想つて居ります—中略—先生方の御健康と研究所の御隆盛を祈つてゐます。皆樣に宜しく四月廿五日（瀨戸内海より）

私共は一日も早く吳さんが御全快御上京なされることを心から希望して會員の皆さまにお傳言いたします。

▲前號で申しましたが二階堂招久著「初夜權」は賣れてしまひました。御報告申上げますと同時におくれて御送金下さいました皆さまに御挨拶申上げます。

▲大久保眞太郎氏は十三日より三週間の豫定で朝鮮の北の方へ旅行される由……朝鮮窒素の石炭乾餾の見學と慶州、石佛寺への巡遊です……云々

▲長谷川誠也氏は久しく風邪氣で原稿は書けなかつたが、次號には久しぶりに書かれます由。

▲最近特別誌友に御加入下さる方が大變增加いたしましたので心強く感じて居ります。何卒この後とも皆さま方の御支援を頂き益々充實したものを御手元に差上げ度くよろしく御協力下さいますやう切に願上げます。六卷四號は賣行も相當よいやうであります。

▲フロイド博士は無事のやうです。英國の分析學會長アーネストジョーンズ氏からの便りに依りますと、ヴインの學會も出版部も押收せられたと云ふことですが、その後同氏が四月二十一日のロンドン・タイムズ紙に寄書したところに依ると、同氏は遙々ウインまでフロイドを見舞に行つたらしく、その時分には釋放せられて自宅で無事に仕事をしてゐたと云ふことです。併し國外へ出るには他のユダヤ人と同樣の手續きを踏まねばならぬのだと云ふ風に書いてありました。

また五月十七日のジヤパン・アドバタイザ紙の報道するところに依ると、英米諸國からの抗議に依つてフロイドは獄から釋放せられ、やがて英國に渡る筈になつてゐるが、家族の者等を連れて出ることを許されない以上、國外に出ることを拒んでゐるとありました。何れにもせよ、無事でゐることだけは確かですが、生活の方は悲慘なことになつてゐるのではないかと思ひます。何れまた來月號にはも少しくわしく報道し得るだらうと期待してゐます。

通信

▲卷を追ふて益々興趣滿點深謝候。此の上共宜敷御願申上候。御一同樣の御健安を祈上候、（愛知縣・篠原政雄氏）

▲よろしき時候となりました。本月號雜誌は殊の外讀みごたへ

がありました。岩倉公令妹御逝去の由哀悼に堪えません。本誌に御執筆の隨筆を拜讀いたしたことあり、その味ひを未だに記憶してをります。とうぞ先生より御悔みを申上げておいて下さいませ。（大阪・廣井重一）

▲季節ともなれば生徒と一緒に出ます。神宮を參拜して今夜吉野に落着いたところです。慌だしい旅ながら、旅はいつもよいものです。令夫人によろしく。（吉野にて、宮田齊）

▲パンフレット面白く拜見しました。仰せの通りアプフウブ的な、特に初學者向に系統を立てた講座樣のものを希望してゐます。尙斯學の發展史。及現在の動靜等について詳報を得れば幸甚です。（栃木、島崎勝次郎）

▲この度は貴著「分析家の手帖」の表見返しに、私からお贈りした湯殿山の寫眞を使つて頂き光榮でありました。初夏青葉の如く爽かなる裝ひの御本、早速拜讀、內容亦人心を爽然たらしむることを感じました。（鶴岡市、梅木米吉）

編輯後記

第二番目の「冊子精神分析」（第六卷第五號）を、こゝに讀者諸君の前に送ります。今度のは前の冊子よりは柔かくなつたと思ひます。

斷種問題に就いては次號に、塚崎茂明氏、時乎咲枝氏その他の稿が二三載る筈であります。

岩倉熙子さん追悼の意味で熙子さんの文を一二篇と遺影とを掲げたいと思つてゐます。

六月三日に海上ビル內東和商事映畫部試寫室で生理學及び精神分析關係の映畫鑑賞の小集を催します。『女性とホルモン』と『春の調べ』と『魂を失へる男』とであります。詳細を知りたい方は至急に郵税三錢添て申込んで下さい。

『分析家の手帖』と『一茶の精神分析』は當所にて販賣取次します。

昭和十三年五月廿五日印刷
昭和十三年六月一日發行
（月刊） 定價 金五錢
編輯兼發行人 東京市本郷區駒込動坂町三二七 大槻憲二
印刷所 千葉市長洲町二ノ七 千葉印刷株式會社
發行所 東京市本郷區駒込動坂町三二七 東京精神分析學研究所
振替口座東京七八八一七番